

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十二）

鈴木 満 訳・注

*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をDSBとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig, Verlag von Georg Wigand, 1853. Reprint. Kabu Press.

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をDSとする）を参照した場合、次の版を使用。

Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag, 1981. Vollständige Ausgabe nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版（略称をGLとする）も参照した。

The German Legends of the Brothers Grimm. Vol.1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human

Issues, Philadelphia, 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合はここに記さず、本文に注番号を附し、「DS***」と詳しい」と注記するに留める。
5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。
6. 語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があるうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜ることができれば、まことに幸いである。
7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。
8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その一) 一—— 六〇 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第一・二号
 一七〇～二三五ページ、平成二十四年十一月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その二) 六一—— 九〇 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第三号
 四六三～五三〇ページ、平成二十五年二月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その三) 九一—— 一三四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第四号
 七五～一七六ページ、平成二十五年三月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その四) 一三五—— 一八四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第一・二号
 一五七～二八五ページ、平成二十五年十一月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その五) 一八五—— 二二五 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号
 九五～一八〇ページ、平成二十六年三月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その六) 二二六—— 二八八 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第一号
 二〇九～三三〇ページ、平成二十六年十月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その七) 二八九—— 三三九 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第二号

- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その八） 三四〇——三九四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号 一五〇〜二四六ページ、平成二十六年十二月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その九） 三九五——四四四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号 一九〇〜一九六ページ、平成二十七年三月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十） 四四五——四八四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七卷第一号 八三〜一七八ページ、平成二十七年十二月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十二） 四八五——五四四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七卷第二号 一五〇〜一五六ページ、平成二十八年三月

*本分載試訳（その十二）の伝説

- 五四五 乳龍とお金龍 *Milch- und Gelddrachen.*
- 五四六 苔小人、女の樹の小人、家のちびさん *Von Moosleuten, Holzweibern und Heinnchen.*
- 五四七 姫苧香麵麴 *Kümmelbrod.*
- 五四八 皮だけになつた麵麴 *Das hohle Brod.*
- 五四九 おつたまげた小人 *Das erschrockene Wichtel.*
- 五五〇 罰を受けた娘 *Die bestrafte Magd.*
- 五五一 繁みの祖母様 *Die Buschgroßmutter.*
- 五五二 餌やりグーペル *Der Futter-Gupel.*
- 五五三 建築小人 *Das Baumannchen.*
- 五五四 カムス村の山の精たち *Kamsdorfer Bergeister.*

- 五五五 ビルプツェども Die Bilbenzen.
五五六 莫ト根刈り人の報い Des Blisenschneiders Lohn.
五五七 フォイクトランント Voigtland.
五五八 ロイス一門の名 Der Stammname Reuß.
五五九 悪魔の障壁 Das Teufelswehr.
五六〇 クロスターハンマー村の鍛造小人たさ Die Hüttenmännchen im Klosterhammer.
五六一 おいらのための灯 Das Licht für sich.
五六二 娘つこ池 Der Dockenteich.
五六三 カルシユテートの亡霊 Geist Karrstet.
五六四 粉挽き場の偶像 Der Mühlgötz.
五六五 トリプストリル Tripstrill.
五六六 ぶかぶか帽子 Pumphut
五六七 水車装置修理人になつたぶかぶか帽子 Pumphut als Mühlenarzt.
五六八 ルンゲレ Rungele.
五六九 世話好きな灯火 Das dienstfertige Licht.
五七〇 カタカタどん Der Klapperer.
五七一 踊る牝猫たち Tanzende Katzen.
五七二 真正正銘の降誕祭樹 Der wahre Christbaum.

- 五七三 青い霧 Die blaue Dunst.
五七四 ホーフの背高のこぼ男 Der lange Mann in Hof. *DS168. Der lange Mann in der Mordgasse zu Hof.
五七五 プレヒタの麦酒 Prechten-Bier.
五七六 ウルバヌスの説教 Urbanuspredigt.
五七七 黄金の上靴を履いた巨人 Der Riese mit dem goldenen Pantoffel.
五七八 カムゼンの山山の宝物 Die Schätze im Camsenbergen.
五七九 銀の泡が湧く泉 Silberschaumquell.
五八〇 愚かな女 Die Unkluge.
五八一 オルラミュンデの市お抱え楽士 Der Stadtpfeifer aus Orlamünde.
五八二 オルラミュンデ伯爵夫人 Die Gräfin von Orlamünde. *DS585. Die Gräfin von Orlamünde.
五八三 グライヒェンの二人用寝台 Das Gleichen'sche Doppelbette. *DS581. Der Graf von Gleichen.
五八四 クラニヒフェルト城の記念の徴 Schloß Krannichfelder Wahrzeichen.
五八五 別別の塔 Die verschiedene Thürme.
五八六 乙女の跳躍とペーラーの小人たち Der Jungfersprung und die Böhlersmännchen.
五八七 「マースたごどりー！マースたごどりー」 „Voll Maab, voll Maab!“
五八八 子ども十字軍と子どもの踊り Kinderzüge und Kindertanz.
五八九 むっつりした子むっ Das stille Kind.
五九〇 伯爵の口癖 Des Grafen Sprüchwort.

- 五九一 ファウスト博士の路地 Doktor Faust's Gäßchen.
五九二 鞭打巡礼者 Die Geißelfahrer.
五九三 特殊不治病者 Die Sonderseuchen.
五九四 短い裁判 Kurzer Prozeß.
五九五 シビュレの小塔 Sibyllenthürmchen.
五九六 情の深い牡狼 Der zärtliche Wolf.
五九七 ヴォルフラム Der Wolfram.
五九八 グライヒェン伯 Der Graf von Gleichen. *DS581. Der Graf von Gleichen.
五九九 殺しの庭 Der Mordgarten.
六〇〇 アウグステインヘアウツステイン Herr Augustin.
六〇一 フリーデンシュタイン城の財宝 Schatz auf dem Friedenstein.
六〇二 テューリンゲンの洪水 Thüringer Fluthen.
六〇三 ネーゲルシュテットの草地 Die Nägelstätter Weide.
六〇四 血の濠 Blutrabben.
六〇五 スウエーデンの小羊な鐘 Das Schwedenglöckchen.
六〇六 イエナの七つの奇蹟 Die sieben Wunder von Jena.
六〇七 狐塔と狐とフンスタルム Fuchsturm und Fuchname.
六〇八 イエナの降誕祭クリストナハトの夜 Die Jenaische Christnacht.

六〇九 大学生の受難劇 Die Studenten-Passion.

五四五 乳龍とお金龍

ザールフェルト地方では、近隣のオルラ地域やフォイクトランド同様（もつともテューリンゲンでも、また遠くフランケン^フの地に入つてもそうだが）、有翼龍は悪魔と盟約を結んだ者に富を授ける、と広く信じられている。まことに多くの村村で住民がそうした家を指摘し、遠慮会釈無く名を挙げる。龍は火焰に包まれた姿で出現、いい龍とつまらん龍に区別される。大抵の龍は火の玉の形で煖炉の煙突から家の中に入つて来て、そこに宝物や乳や卵や金やらを撒き散らす。そういうのは、いい龍、と呼ばれる。長い干し草締め付け柱の恰好をして窓の楔型から部屋に入り込む龍が時折いるが、これは財宝の代わりに恐ろしい悪臭を残す。これがつまらん龍である。いい龍が入つたと分かつたら、乳桶を幾つも急いで綺麗にして、龍が乳をその中に注げるように、台所や穴蔵に置く。龍を惹き付けるために、牛酪製造の攪乳桶は異教時代神聖とされた種類の木、たとえば杜松、立葵、科の木のようなものを用材とする。使う木は降誕祭の聖なる宵に採つて来て、すぐに皮を剥く。攪乳桶には別別に三回に分けて乳を注ぎ込み、掻き混ぜて牛酪を作るのは金曜日のみ。現在でも家家の穴蔵にはそこに埋め込まれた独特の形状の壺が見つかる。丈が高く、底が尖り、中央部を九本の環が取り巻き、把手はない。本来の蓋は縁を欠いて壺内部の底に置き、蓋の代わりに粘板岩の板が載せてある。何もかも乳を増やすという龍の仕事を容易にするための用意である。

さてまた火焰龍には別の種類もある。伝説では一般に宝の守護者として登場、宝の発掘を生業とし、そのために往往にして己の頸と永遠の至福を代償にしてしまう連中が目にするやつである。これすなわちお金龍で、しばしば人間の顔をして二本足で徘徊することもある。

ラニスから程遠からぬバイスラ村の近辺に天使山エンゲルベルクが聳そびえている。全山赤山毛櫛アカヤマモミに覆われている。山麓には深い溝が北へ向かつて延びている。ポツペン溝ポツペンという名で、ポツペンビル山に突き当たる。エンゲルベルクの東山腹には洞窟ドイグが口を開けている。この洞窟は——伝説によれば——山全体に抜ひがっている由。洞窟内には二頭の火焰龍が鎖つなに繋がれていて、そこに隠された莫大な宝物を見張っている。何世紀かの後白髪の男の小人(8)が、財宝に至る入口を開くことのできる大きな鍵のある場所を教えてください。小人は杖でバイスラからドビアンへ行く路傍に横たわっている大きな石の一つに印を付けるのだ。

五四六

苔小人モイスロイデ、女の樹ホルツツアアイベルの小人、家のちびさんハイムヒエン

民衆が種種様様の名称で呼び、種種様様の特徵付けをしている小妖精たちの類縁関係をはっきり区分けするのは難しい。書こうと思えばこうした小人族についてだけで優に一冊の本ができればよい。それもアイリン・T・ナイト(9)の『フェとエルフの神話学(10)』より遙かに内容豊富なもの。けれども本から学ぼうとしてはいけないのだ。村落で庶民が互いに語り合う話に自身現場で耳を傾けねばならない。神出鬼没の小人族がきちんと分類されないように、小人族の伝説も整理不能である。なにしろこの連中が現れる場所はこと思えばまたあちら、姿にしても千変万化、また、群れを成すこともあるし、独りぼっちのこと。しかしながら苔小人モイスロイデはお助け妖精ではないし、女の樹ホルツツアアイベルの小人は苔小人モイスロイデではない。そして家のちびさんハイムヒエンはまたこれら全てとはろくすっぽ似ていない。精神のところお助け妖精ではあるが——家のちびさんハイムヒエンは荒れ狂うベルタのお伴を形成する。けれども彼らは荒れ狂いはしない。名詮みやうせん自性みようせいで親しみ易い。ドイツ語中最も親しみ易い名称で、それゆえ、居心地の良い煖炉の傍、麵麩パッセン焼き竈カマドの

傍などでひそやかに温もっている生き物にも附けられている。そのツイル・ツイル・ツイルという鳴き声に民間信仰は予言の意味を持たせる。この虫たちはこの地方で蟋蟀（こおろぎ）と呼ばれる。これをハインヒエンとかハイソツヒエンとかと取り違えてはならない。オルラ地域ではペルヒタは家のちびさんの女王と呼ばれ、このおどけた妖精の群れに囲まれて登場する。他地方では小人たちが川を舟で渡してもらい、どこかへ立ち去るが、オルラ地域のゴスドルフやレーデルンの村村（どちらもはや現存しない）では家のちびさんたちがそうしたことになっている。この地域の幾つかの村落では彼らはちび小人、家ちび、地中小人と呼ばれ、指ほどの背丈で、家家の鼠穴に棲んでいるごくちつぽけな地の精であると考えられている。通常彼らが姿を現すのは宵の内で、白装束を纏い、愛想の良い性格を示し、数百もの数で愛らしい旋回舞踏を踊ってみせる。彼らは家の者に吉凶をあらかじめ予告するし、心細やかな応対を受けると、ごくちつぽけではあるが値打ちのある贈り物を残して行くことが少なくない。それらは黄金の小箱に入れられて鼠穴の外に置いてあるのが朝見つかる。

グローベンゲロイト近くのシュナファートにある赤ビル山にはその昔女の森の小人がどっさりいた。彼女らは干し草山や穀物の束の山の上で跳ね回り、子どものようにふざけあった。人間たちがやって来て、これら小さい者を目にし、うじうじびくびくした様子を見せると、愛想良く「まあさ、こっちへ来て、やりたいことをやればええがな。あたしら、あんたらに何もしやしねえで」と声を掛けるのだった。——もつともシュナファートで野良稼ぎをしている人たちから盗み食いするのは好きで、弁当を半分とかあるいは全部持って行ってしまったりした。

アルテング湖周辺——今日に至るまで樹木が豊富である——の農民は女の樹の小人たちと仲良しにしていた。木が伐採されることになる、彼女らはすぐそこにやって来て、薪作りの衆に、倒れる木が地面につかないようにどうか十字を三つ幹に刻んでちょうだい、と頼むのだった。その上にいれは荒れ狂う狩猟から守ってもらえ

るの、と。人間が喜んでそうしてやると、その代わり女の樹の小人たちは知つてゐることを教え、できることをして、働く者たちに助力した。朝森に入ると、農民は麵麩を一切れとか団子を一つとかをお助け小人のために十字が刻まれた幹に載せておくのだった。すると彼女たちは気持ちよくお招かれして、こう言いながらせせと薪を持って来た。

薪が要る衆、来ればええ。

貧乏な衆、取るがええ。

五四七

姫苜香麵麩

メルケンドルフの西十五分の行程にあるシャルホルツにも男の樹の小人や女の樹の小人たちが棲み着いていた。彼らは人間たちに援助・奉仕するのが好きで、干し草作りの手伝いもしたが、内気な性分ではなく、鍋から団子を、籠から麵麩を、しばしば勝手に失敬した。とうとう人間たちは我慢できなくなり、こういうありがたくないお客さんがたを厄介払いすることを考え、有効な手立てを行使した。粉挽き——樹の小人たちはこれまでこまめに力を貸し、粉を掃除したり臼を綺麗にしたりしたのだが——は彼らのために服を新調して置いておいた。お助け小人たちはこれに気を悪くして引越してしまい、二度と戻って来なかつた。ある人たちは姫苜香を麵麩生地に入れて焼くか、あるいは今日でもよくやるように、麵麩生地の皮に振り掛けるかした。すると女の樹の小人は嘆き悲しんだ。

姫苺香麵麴、
あたしら死んじやう。

そこで彼らは退去しながら——なにせいなくなつて、二度と戻つて来なかつたのでね——こう言つた。

姫苺香麵麴を喰うがええ、
苦しい仕事を背負うがええ。

それからというもの、人間たちは二度と再び以前のように安樂な暮らしができなくなつた。

五四八 皮だけになつた麵麴

ゲフェル⁽⁶⁾の牛飼い娘が牧場にいと、よく女の樹の小人^{ホルツツグアイベル}がやつて来た。そこで娘はこの女小人と仲良しになつた。ある日家で新しく麵麴^パを焼いた⁽⁸⁾。暮らしてはいなかつたので、娘は麵麴^パを一塊全部友だちの女の樹の小人^{ホルツツグアイベル}のために持つて行つた。女小人は大喜びでその麵麴^パを受け取ると、割つて、中身の柔らかいところをすつかり取り出し、牧場の縁に生えている木の葉っぱを集め、それを皮だけになつた麵麴^パにぎつしり詰め込んだ。こういった子どもっぽい遣り口^ヤに若い牛飼い女は憤慨、せつかくの麵麴^パが惜しくてならなかつた。それから突然女の樹の小人^{ホルツツグアイベル}は消え失せていて、牛飼い娘の傍にその麵麴^パが転がつていた。娘は取るものも取りあえず皮だけに

なつた麵麩パから詰め込まれた葉っぱを振り落とすと、麵麩パを持って家に戻った。すると麵麩パの中で何かチャラチャラ音がする。娘は、小石が葉っぱと一緒に麵麩パの中に入ったのかも知れない、と思ひ、また振り落とした。するとなんとまあ、前に振り落とされないうちの中に引つ掛かっていた何枚かの葉っぱがそれぞれ葉っぱターラー銀貨⑩に変わつていたのである。牛飼いの女は急ぎに急いで牧場の縁へ駆けつけ、値打ち物の葉っぱを捜した。葉っぱはまだ見つかつたので、前掛けにくるんで家へ持ち帰つた。けれどもそれらの葉っぱはターラーにはならなかつた。それからお礼をしてくれた女の樹ホルツツグアイベルの小人にも二度と会えなかつた。

五四九 おつたまげた小人

ゲスジツツ⑪の農夫の女房がシュリンゲン谷ツルンゲンにある自家の森ホルツツグアイゼの草原で最後の干し草山をひろ拡げに掛かつたところ、その山の上に彼女に背中を向けてごくちつぽけな男の小人が坐すわつていた。はて、どうすりゃよかつたらうね。女房は仕事を済ませてしまいたかつたが、そうかといつて小人に話し掛け、そこから降りて、と頼む勇氣もなかつた。そこでちよつと思案すると、小人の背後から忍び寄り、手にした熊手フオイクで山の下から干し草を搔かき取つた。小人は一向それに気付かなかつた。女房はまた搔き取り、これを繰り返した。とうとう干し草山は上の重みに堪たえかねて崩れた。おつたまげた小人は落ちながら甲高い悲鳴を挙げ、骨折つて干し草の中からもがき出た。すると森の中からもわらわらとちつぽけな小人ツグアイゼルの群れが現れ、こう叫んだ。

どしただ、どした。

ぬしゃあいつたい何なにされた。

小人ウイレトルはなんとか気を取り直したものの、陥没した干し草山をまじまじと眺めるだけ。頭を振り振り、答えていく。

はれまあ、はれまあ、こいつがこんなに崩れてよ。おらあ、全くおったまげただ。

そうして農夫の女房など気にもせず、走れるだけの速さで、仲間と一緒に森の中へと退散した。

五五〇 罰を受けた娘

気の強い娘が三王節ドライケイデーの宵アインツァイトにナイデンベルクからザールタール(ヴィルヘルムス村から程遠からぬザールレ川に接する村)へ向かって家路を辿たどっていた。彼女はナイデンベルクのある灯り部屋(「紡ぎ部屋」)で糸紡ぎに精を出し、自分の下裳スカート分(「糸」)は綺麗に紡ぎあげたのである。谷へとなだれている山腹までは何人か同行の若い衆がいたのだが「今は独りだった」。すると家のちびさん(ハイムヒェン)の群れを連れたベルヒタが山道をこちらへやって来た。子どもの大群にうようよ取り巻かれた堂堂たるご婦人を目にした娘ははっとして立ち止まった。ちびたちは大きな犁すきを引く張つたり、押し上げたり、他の道具を引きずつたり、大骨折りをやらかしていた。この光景になんともおかしくて堪たらなくなった娘は頭上の絶壁から罅ヒキが帰って来るほど大笑いした。そこで家のちびさんたちはびっくり仰

天、運んでいた道具を何もかも、犁に至るまでほっぽらかして、急な坂道を転がり落ちて行つた。すると粗忽そごつものの腹を立てたベルヒタ夫人は娘の両眼にふっと息を吹き込んだ。するとたちまちピシヤリ、何も見えなくなつてしまった。娘はもう怖くて怖くて、道もないところを闇雲やみぐもに突き進み、一晩中あてもなく踏み迷つた。朝になつてやつとだれかが彼女を見つけ、川向こうへ渡し、ザールタールの雇い主の家へ連れて行つてくれた。ところが主人はこの女中に暇を出したので、寄る辺ない彼女は物乞いになつた。そしてしばしば泣いて自分の軽はずみを後悔しながら、道端や川の渡し場に坐すわつていた。さて再び三王節ドライケニヒスアレントの宵が廻つて来た。盲目めしいの娘はだれか女性が道をやって来るきぬずれの音、たくさんの子どものようなパタパタいう音を耳にし、声を挙げて、喜捨を乞うた。ところでこの女性はちいぢな子供を引き連れたベルヒタで、娘に「施しをしましょうね。わたしは一年前におまえの二つの灯りを吹き消した。今日また点ともしてあげる」と言うなり、物乞いの顔にフツと息を吹き掛け、行つてしまった。娘の両眼は突然開き、以前と同様見えるようになった。彼女は自分の身に起こつたことを決して忘れず、他の人たちが用心するように、また教訓とするように、たびたびそれを物語つた。

オルラ河畔のノイシュタット近郊のいわゆるゾルゲでも、ベルヒタに両眼めいの明を吹き消された糸紡ぎ女に関する同じ伝説が語られている。

五五一 繁フッシュユグロリスムックみの祖母様

ロイテンベルク(24)の近く、ザーレ左岸に——田舎いなかの人たちの言い伝えによれば——なんていうか、一種の魔物が棲すんでいる。これすなわち繁フッシュユグロリスムックみの祖母様。苔モイスフロイライオンの嬢ちゃんと呼ばれる娘をたくさん持つていて、これらを引き連れ幾つ

かの一定の時期と聖夜に田舎をうろつき廻る。出くわすのは險イノノ呑ノである。目はじいっと坐すわって動かず、髪はもじやもじや。小さい荷馬車に乗っていることもよくあり、そういう場合うまく避けるのに越したことはない。子どもたちは殊の外このお化け婆ばあちゃんに怯おびえ、お互いこれを口にして怖がらせっこする。この妖怪はフルダとかベルヒタ、あるいは荒ディ・ヴィルデれ狂デう狩ヤクト獵トラウの奥方に他ならない。この地域伝説では彼女に娘たちが扈コトウ従ジュウすることになっているが、そのお隣の地方では家のちびハイムヒュンさんがお伴というわけ。

五五二 餌えさやりグーペル

オルラ河畔ノイシュタット近郊、騎リッター士ツイトの莊園ミジツツで羊飼いの下僕——名前はシュベック——が奉公を始めた。ここにはグーペル（家の精コイポルト）が一人活躍レブしていて、夜毎羊たちに餌をやるのだった。なにしろ獣どもが干し草架カに架けてもらった飼葉かいばを食くべようと、秣まぐ桶おけや飼葉架カへ跳はんで来る物音がはつきり聞こえたものである。新参の下僕は、ちいぢやなお助け妖精が干し草を脇わきに抱かえて引きずって来て、それを拵ひらげてやる——羊たちはその際全然怖がる様子がなかった——のを、窓の一つからじいっと見守った。こうして丸一年が過ぎた。好奇心に駈かられたシュベックは藁床フンゲ——藁束わらなで作った寝床——を家畜小屋の台の上に拵こえた。できればグーペルの餌の遣り方を見習おうと思つて。これは大失敗だった。なにしろグーペルはそれ以来二度と出て来なくなつたからである。羊たちはいえ、その時からどんどん瘦せ細り、日の光が透けて見えるほどになった。——これだつてまあちつたあ教えにはなるだね、と、この話をした時シュベックは付け加えたものである。

ヴァイスバハの古城にも昔大変な働き者の誠実な餌やり小人がいたことがある。この城に嫁よめいで来た若奥様がこ

の小人のためにとうとう新しい襯衣シャツを縫ってやった。すると小人は滝のように涙を流しながら、ルール「ルールーラ」のあの帽子ヒュート小人ヒエンのように、こう嘆いた。「おらあもうこれつきりおさらばせにやあなんねえ。労賃もちを貰っただからよ」。以来二度と姿を見せなかった。

ラニス近くに住む羊飼いの親方も同じ体験をした。この人は冬にたまたま手伝い好きな餌やり小人の足跡を見掛け、小人がはだしで歩いているのに気付いて憂鬱ゆううつになった。そこで急いで縦横の寸法を測り、小人のために綺麗な可愛い靴を一足拵こしらえ、これを並べておいた。やって来た餌やり小人は靴を発見、取り上げて上から下までじっくり検分すると、深い溜息こしを吐いて言った。

あなたの靴を貰ったで、

おらは休むとすべえよ。

そうして姿を消してしまい、二度と再び現れなかった。

五五三 建築小人バウメンヒエン

ザールフェルトとラニス——どちらも重要な鉱山業の町である——の間にある大カムス村グロスで教会を建立するこ
とになった時のこと、顔は皺しわくちやで髪は白いちっほけな男がいるのが人目に止まった。だれもこの男を知らな
かったが、まあ働くこと、働くこと。ここかと思えばまたあちら、現れたかと思えば見えなくなり、石材を運んだ

り、灰泥を混ぜたり、足場をあちこち攀じ登ったり。とりわけ昼飯時には目立った。なにしろこの男、一切飲食しなかつたからである。いたかと思えばいなくなり、どこからやつて来て、どこへ帰るのか、さっぱり分からなかつた。棟梁が週給を払う時、親方連や職人たちの中にいた例しかなかった。老人たちはこの小男が若手の職人たちに侮辱されないよう気を配り、職人たちに「ありやあ建築小人だ。むしろ、絶対にあれを怒らせちゃなんねえ。さもねえとえれえことになる」と低声で言つて聴かせた。さて、教会建立は滞りなくみごとに済み、竣工は信じられるくらいほど早かつた。教会の奉獻式が行われた時、建築小人は、この新しい神の家を祝福する祈禱が唱え終わられるまで、高廊やら、風琴演奏席やら、説教壇やらに出没した。それから衆目が見守る前でどこへともなく姿を消し、二度と現れなかつた。

五五四 カムス村の山の精たち

カムス村の数の数の鉦坑には性格が善良、意地悪を取り混ぜていろいろな種類、姿形の山の精がいる。白髪の小人として現れる場合は山の修道士と呼ばれ、鉦夫らに豊かな鉦脈を教えてください。事故が起こりそうな時、捨石山の上に火焰に包まれた巨人の恰好で坐り込んでいて、鉦夫らが入坑する前に警告することもある。どちらの姿でも親切な性質であることが分かるが、ただし、大きな騒音や嘲弄は我慢できない。そこで地底で働く際、鉦夫は無用な音を一切出さないようにし、暗闇の中では口笛を吹いたり、悪態をついたりすることもあえてしない。どちらも明るい地上ならしよつちゆう平気の平左でやらかすのだが。呪いの言葉を口にする者がいると、山の精たちはごく深い縦坑に突き落したり、頸をぐいと捻つて顔を真後ろに向けてしまう。灰色の上つ張りを着込んだ彼らは、好意

を寄せる鉞夫の仕事を手伝ってやる。すると諸事万端素晴らしく速く進捗する。山の精たちの声は雄鶏の鳴き声に似ている。猫の姿になって掘り出された鉞塊の上に坐っているのが時折見掛けられる。大きな、火のような目でこうした宝を見張っているのだ。カムスドルフの鉞坑の一つに、ずんぐりむっくりでみっともない風采、乾酪鉢みたいでつかい目玉の山の修道士がいたことがある。そんな姿ではあったが、極めて善良な性質で、独り静かに暮らしており、鉞内作業をこつこつ一緒にやってくれた。とりわけ、哀れな少年鉞夫がくたびれた時には力を貸し、仕事を代わったりしたもの。けれどもその時一言も喋らなかつた。この少年は坑内に入る際毎朝プフェニヒ小型丸白麵麩を一つ持って来て、決まった場所に置くことになつた。山の修道士をからかつてやりたかつた別の少年がその小型丸白麵麩を平らげた。その後鉞石運搬谷器が引き揚げられて地表に着くと、その中に小型丸白麵麩を食べてしまった若者が発見された。死んでいた。山の修道士に頸を捻られ、運搬谷器に押し込まれ、見たり、聞いたり、麵麩を喰つたりとは未来永劫おさらばの身となつたらしい。

五五五 ビルプツエども

この地域の田舎の民衆の間にはいまだにこのビルプゼとも莫卜根刈り人とか灯心草刈り人とも呼ばれる、魔物だつたり人間だつたりのいやらしい穀物刈り手の存在が信じられている。その形態の描写は種種様様だが、小さな三角帽を被つてゐることが少なくない由。彼らは妖精のようなお化けとして、田舎の人たちが宵も遅くになつて敵の間を抜け、家に帰る折、その行く手にしげしげ出現する。これらビルプツエどもは髪を靡かせ、大抵は白い亜麻の服を着ている。巨大な玉の恰好をして畑を転がり廻り、ひどい損害を与えることもよくある。収穫時にはまま恐

ろしい旋風つむかぜになつて襲来、刈つたばかりの穀物を吹き散らしてしまふ。どちらの場合でも、これに気付いたら、農夫たちは懐中小刀ポケットナイフ——刃に十字が三つ刻まれていなければならぬ——をそのビルプツェに投げつけ、「こいつを喰くらえ、ビルプツェめ」と叫ぶのが常である。もつとも、今日一般に民衆が信じているビルゼンシュニッターとい②うのはこうである。これはキリスト昇天祭、洗礼者聖ヨハネの祝日、三位一体の祝日に畑③にやつて来る。裸足で、右の親指に小さい鎌型かまの小刀を結びつけている。こうして耕地を歩いて行き、この小刀で一筋ずつと刈り取る。刈り入れと脱穀の時が来ると、こうされた畑の収穫は十分の一をビルゼンシュニッターに分けねばならない。しかしながらそうした所業は大きな危険を孕はらんでいる。これをやつている最中ビルゼンシュニッターがだれかに呼ばれたり、頭上に銃を撃たれたりすると、その年の内に死なねばならないのだ。こやつの方がやつて来た者に先に気付いて、声を掛ければ、死の籤くじはそちらに中あたる。大抵の農夫はこんな具合に自家の畑に降り掛かりかねない損失を以下の方法で防ぐ。畑を外側からぐるぐる耕して、種もそのように播まくのだ。そうすればこうして収穫された穀物にビルゼンシュニッターは手を出せない。刈り取られた穀物が脱穀されると、ビルゼンシュニッターがやつて来て、うまいことを並べ立て、収穫物をいくらか掛けで売つて欲しい、と言うが、聴き入れてはならない。ビルゼンシュニッターへ仕返しするには、「こやつにやらねばならない」十分の一の穀物を脱穀する際、杜松ねずの木の小枝を何本か〔穀棹かやくさおに〕添そえるとよい。穀物を穀棹が打つことにビルゼンシュニッターに中るので、遂にはビルゼンシュニッターが慌あわててやつて来て、どうかお願いだから、別の穀棹で叩たたいてくれ、と頼む。

五五六 蓑卜根刈り人の報い

ビルプツェだった欲張り男が、洗礼者聖ヨハネの祝日の真夜中少し過ぎ、日の出前に例のいやらしい畑歩きを始めようと身支度した。屋根裏部屋のごく人目に付かない片隅から注意深く隠しておいた小さな三角帽と二挺ちようの小さな鎌型の小刀を取り出し、上つ張りの下にしまい込んだ。隣人の穀物畑を指して進みながら、男はだれにも見咎められないよう気をつけた。なにしろ途中ビルゼンシュニッターがだれかに出くわして、声を掛けられ挨拶されようものなら、死ななければならぬからだ。ふさふさと見事に稔みのっている穀物を貪欲に見渡し、男は呪われた妖術によってこの半ばばが自分のものになると思っただけで笑んだ。それから急いで小さな帽子を被り、鎌を両足の親指に結び付け、穀物の茎を刈りながら、耕地を斜めに歩いた。これを済ませた帰り道、もう村の取っつきの家並みに差し掛かった時、彼はうっかり莊園領主の牝牛の群れに入ってしまった。牛飼いに朝の挨拶をされては大変と、慌てて脇の路地に滑り込んだのはよいが、腹立ちのあまり、牝牛たちが血の乳を出すよう、呪いを掛けた。夕方の乳搾りの後で女中たちが牛飼いを呼んで、ひどいことになった、と訴えた。世故に長けた牛飼いは因果関係を推し量り、近くの森の一軒家に住んでいる賢い男の許へ急いだ。賢い男は、犯人はきつと自分から名乗り出るだろう、安心して家に帰れ、と牛飼いに告げた。それから賢い男は感応と反感応の術を用い、牝牛を汚損した者が不安で堪らなくなるようにした。すなわち、民間信仰によれば、加害者が家畜の所有者に何かを借りに行くまで、居ても立つてもいられないように仕向けたのである。そこで例のビルゼンシュニッターは恐ろしい不安に襲われ、遮二無二莊園領主のところへ押し掛け、挨拶もなにもあらばこそ、領主の部屋に駆け込んで、どうかお願いですから、麩を

貸してくださいまし、と頼んだ。この異常な懇請に驚いた莊園領主は、どうしたものかと思案した。するとビルゼンシュニッターは極度の不安に駈られて跪き、どうかどうか麴麩を一切お貸しください、と哀訴嘆願した。とうとう莊園領主が願いを叶えてやると、ビルゼンシュニッターは蒼惶として立ち去った。さて、それから間もなく、この男はもつと大きな難儀に見舞われた。自分の穀物畑でだれが例の歩行をやらしたか、すぐに悟った男の隣人は、かんかんに怒り、ビルゼンシュニッターに刈り取られた穀物の穂を一握り集め、束に縛ると、これを家の煙突の中に吊した。なにしろこれこそかの妖術に対する最も強力な反撃手段なのである。悪評高いビルゼンシュニッターはその日から消耗性疾患に取り憑かれ、穀物畑の所有者が穂の束を煙道から出そうとしなかったため、その穂のように乾涸らびて、生ける木乃伊と化し、だれが見てもおぞましい化け物となったが、とうとう惨めな死を遂げた。これが彼の非道な悪行の報いだつた。

五五七 フォイクトランド

エールスニッツ近郊のフォイクツベルクの館に纏わる広く知られた伝説によれば、この城を築いたのはローマの將軍ドルルス・ゲルマニクスだそう⁽³⁶⁾な。城の一室——後に役場執務室として使われた——の壁にはかつてラテン語の二行詩が記されていた。

ここに陣營を張りしドルルスは山を総督と名付けたり。
 しかしてその名を後代は継承せり。

古人はこの詩句に次のように唱和した。

高貴なるローマの代官フアイヤクドルススは

危急に遭いてこの山ベルクを築きぬ。

彼はドイツで戦をこととせしゆえ、

ここは今に至るまで代官山フアイクツベルクと呼ばれたり。

更にこういう韻文もある。

代官山フアイクツベルクの周りの土地は

どこもかしこもフォイクトランド（註）。

幾歳月を閏けいみした城を

たまたま得たのはブラウエン（註）の殿ら。

一五三六年フォイクツベルクはフォイクトランドのかなりの部分と共にマイセン辺境ヘンクランツ伯フリードリヒとヴェルヘルムの手に渡った。

フォイクトランドとこれに隣接するオルラ地域ガの幾つもの小都市を世俗ではこんな諷刺詩ふうし——アルトマルク地方のものと同類（DSB三四一）——でおちやらかす。その文句は左のごとし。

アダムの墮罪でトリプツは滅びた。

そしてアウマはその隣。

ヴァイダにやお銭は一文も。

ノイシュタットは何もくれない。

ツイーゲンリュックは大窮乏。

ラニスにや麵麩は一口も。

そしてパウザはその姉妹。

空っぽの巢じゃないのかい。

伝承によればパウザは世界の中心だそう⁽⁴⁶⁾な。そこへ行くにはザクセン＝バイエルン鉄道でメールトイアー⁽⁴⁷⁾まで行く。そこから郵便馬車がシュライツ⁽⁴⁸⁾へ通っている。六人以上の人間がこれに乗ろうと申し込むと、こう言われる。「シュライツ行きの郵便馬車は満員です。でもパウザへなら他の馬車で行けますよ」と。さて、パウザまで行くと、どうやってシュライツに辿り着いたものか、思案投首⁽⁴⁹⁾とあいなる。これを称して「パウザをやらかす」と申しますな。

五五八 ロイス一門の名

ロイセンラント——フォイクトラントはこう言われることも稀⁽⁵⁰⁾ではない——はヴェンド人の部族名⁽⁵¹⁾「ルツツエ

ン——「ロシヤ人」と響きは同じ。ロシア皇帝の称号中にある「あらゆるロイセン人の専制君主⁽⁵⁰⁾」というのがまたこのドイツの地方を思い起こさせる——に由来する。伝説はこの邦の名の語源学的推論を鼻であしらい、このように説く。皇帝フリードリヒ二世がパレスチナへ大軍——これにはテューリンゲン方伯ルートヴィヒと諸邦の伯爵や殿輩^{ぼら}が多数参加した——を率いて出征した折、プラウエンの代官、ゲラの殿、それからかの、後に一度に二人の妻を持ったので知られるクライヒエン伯も従軍した。プトロマイス攻防戦でクライヒエン伯がサラセン人の捕虜となつた時、プラウエンの代官も同じ憂き目に遭つた。彼は異教徒たちによつてモスコヴィアの商人に奴隷として売り渡され、その故国に連れて行かれた。さてその地でこのドイツの伯爵は奴僕として仕える身となつたが、ロシア軍がタートル軍に打ち負かされた時、闘いで英雄しく活躍した。しかしながら、またしても虜囚にされたのである。ヘカッタなる名のタートルの君侯が新しい主人となつた。この野蛮な種族の当たるところ敵無き強大な軍勢はドイツの地にも侵入、シレジアまで押し進んだ。元プラウエンの代官も軍旅の中にあつたが、機会を見つけてうまうまと脱走、再び自らの治める邦と民の許に戻り、身辺の要務を処置し終わると、皇帝の宮廷に冗談につけ本気につけその堂堂たる騎士としての進退で頭角を現した。その際しばしばロシアの民族衣装を纏つて人前に出、モスコヴィア人の言葉を喋ることができ、モスコヴィア人の習俗を少なからず身に着けていたものだから、のつぱろシヤ人とかロイセと呼ばれた。そこで古文獻には彼の名がルツツオ、リュツツオと記されているのが見つかる。かくして彼の添え名のロイスが一族の姓および称号として代官家の全ての家系に受け継がれ、後世には代官なる名称を全く押し退けるに至つた。

五五九 悪魔の障壁^{トイフェルズヴェール}

ツイーゲンリユックから程遠からぬ森林地帯のヴァルスブルク・アン・デア・ザーレ⁽⁸⁸⁾のアイヒリユック山に昔むかし悪魔がその子分どもと共に棲み、ここに近づく者を奸計を廻らして捉えようとした。ある時壁工の親方がそこへやって来た。邪な者^{ホシヤク}〔「悪魔」〕は、おれはあんたが見ている前で、真夜中から雄鶏^{おんどり}が啼くまでの間に、川の一番流れが激しいところを横切つて障壁を築くつもりだが、おれと賭けをしないか、と言つた。親方は賭けに乗り、近くの木に登つて、そこから事の成行を見届けることにした。親方は、悪魔が山山からでつかい巖^{いわ}の塊を幾つも幾つものもぎ取り、ザーレ川にぶち込み、足で踏みつけて動かないようにするのを眺めて愕然^{がくぜん}とした。あと僅か十五、六肘尺^{エシ}で工事が完成しようという時、おつそろしく心配になつた樹上の壁工は、声高らかに「キツケリキー、キツケリキー、キツケリキー」と啼いた。そこで悪魔は瞞^{だま}されて、本物の雄鶏^{おんどり}が刻を作つたのだ、と思ひ込んだ。かんかんに怒つた悪魔は傍にあつた巖をびしゃりとぶん殴り——今日でもその手の痕^{あと}がそこにまざまざと見える——、それからいなくなつた。障壁は悪魔がほつぽらかした開口部が残つたままいまだに未完成で、悪魔の障壁^{トイフェルズヴェール}と呼ばれている。

障壁近くの大きな巖の上には皿や鉢^{はち}のような窪^{くぼ}みが数数ある。障壁工事を始める前、悪魔が子分どもと一緒にこれを使つて食事をしたそうな。

五六〇 クロスターハンマー村の鍛造小人たち

ローベンシュタイン近郊(6)のクロスターハンマー村にはその昔鍛造工らの仕事を前もって片づけてくれる鍛造小人たちが棲すんでいた。彼らが小さな緑の襦じゆ衣いを着てせせと働いているのがしばしば見受けられた。一人が炭を火にくべれば、一人が鉄を運び、一人が大きな錠はしを振るうという具合。鍛造工らがやって来ると、いつも仕事の大部分がもうできているのだった。小人たちが姿を消してから、鍛造業の全盛時代は終わった。

五六一 おいらのための灯

そうそう昔のことではないが、ヒルシユベルク近郊(6)の小村レルヒの傍では、灯火とうひが一つ、頻ひん繁ばんに目撃された。あの区域を行きつ戻りつし、これを三回繰り返すと、消えるのである。あえてこれに出逢であおうとか、行く手の邪魔をしようとか、企てる者はなかった。けれどもとうとうごく年若なな生物識ものしりが登場した。この坊や、教員せみ養成所なりで大量の啓蒙主義を呑み込み、お腹一杯ぼんぼり人になつていたのである。彼は、迷信に拠よつて来たるところのさような妖怪を信じているとは無知蒙昧もうちまいな人たちだ、とレルヒの農夫たちを笑い飛ばし、「灯火とうかはただ一つあるのみ。すなわち、我らが理性、我らが啓蒙主義の灯火である」と片づけ、その灯ひとやらを見せて欲しい、そうしたら自分わがは、そもいかなる灯火とうかぞ、と問い質たし、これを自然原理に基づいて彼ら農夫に説明しよう、と言った。農夫らは灯火とうひがよくさまよう宵を待つて、出没する場所までこの小先生に随ついて行つた。するとその灯ひがやって来た。先生

は勇氣凜凜灯火に向かつて進み、近くまで寄ると、「おい、あんたはいつたいどういふ灯火なんだ」と叫んだ。農夫たちはけっこう後ろに退いていたが、大きなピシヤリという音、すぐに続けてもう一発ピシヤリ、それから甲高い声でこゝろ怒鳴るのは充分聞こえた。

おぬしはおぬしの世話を焼け。

おいらはおいらのための灯よ。

この科白と共にでしゃばりの啓蒙家はしたたかな横びんたを二つ喰らわされたわけ。それからというもの、レルヒの農夫たちは彼に「灯のお友だち」なる綽名を奉った。もつともこちらは、絶対そんなんじゃない、と堅く誓ったが。

五六二 娘っこ池

(アウマ近郊) メルケン村の北西半時間、アウマ水車の傍に娘っこ池と呼ばれる池がある。昔むかしこの池には父親と二人のこよなく愛らしい娘が棲んでいた。その繊細優美なことといったらもう形容しようもなかった。人人は、それ以外全く知ることのないこの姉妹をただただ「娘っこ」と呼んだ。この「水中の」娘たちには地上の娘たちと同じく、踊りが大好きという弱点があつて、それゆえしばしば山を下りてメルケンドルフやピージギツツへとやって来た。もちろんこの子たちにはすぐさま崇拜者ができ、彼らは怠りなく家まで送り届けた。池の畔まで行く

と、そこには一種の扉があり、そこから階段が下へ続いていた。これを降りるとすぐに快適で広広とした住まいに達した。しかし娘らは、父の年寄り水の精がまず寝てしまわなきゃ、そうすればキリスト教徒(「人間」)の臭いを嗅ぎつけられないから、と言って、送ってくれた男たちを用心深く玄關の後ろに隠した。男たちはこの場所で、娘らとその父親の会話を震えながらたまたま盗み聞きした。父親は、おまえたちはキリスト教徒のところに出掛けたのか、それともキリスト教徒をここへ連れて来ているのか、と訊いた。娘らが、こちらから出掛けたの、と答えると、父親はいくらか落ち着いた。この娘らは父親から、宵の十時には家へ帰っているように、と極めて厳しく命じられた。さもなければ殺してしまふ、と脅したのである。ある時メルケンドルフの若者たちはわざと娘らをもっと遅くまで引き留めて、それから送って行った。若者たちがいつもより長いこと帰って来なかつたので、メルケンドルフの乙女らは不安に駈られて他の若い衆に言った。「明日の朝早くお池に行ってみなきやだめよ。お池の水が赤くなっていたら、あのひとたち、殺されちゃったんだわ」と。翌朝池は本当に血のように真っ赤に染まっており、その後若者たちについても娘らについても何の消息もなかつた。

五六三 カルシュテートの亡霊

その昔ブントツイヒにカルシュテートという貴族——ベオグラードの会戦でトルコ軍と闘ったことがある——が住んでいた。粗暴かつ傲慢な男だった。とうとう到底平穩無事とは申せなかつた生涯を終えると、遺骸はホーエンロイベンの教会に埋葬された。しかしいまだにこの死者の霊は夜白い戦馬にまたがり、遺骸がホーエンロイベンへ運ばれた道筋を乗り回す。いや、それどころかこの亡霊、教会の中にまで闖入する。こういうことである。ある

時ホーエンロイベンの牧師が黄昏刻息子の一人に言い付けて、祭壇の上に置き忘れた本を取りにやった。息子は合唱隊指揮者の二人の息子を一緒に誘って行った。この男の子たちの一人が子どもっぽい悪ふざけで説教壇に上がり、「来いやい、来いやい、カルシユテートの亡霊やあい」と叫んだ。するとなんと、建物がどつと揺れ動き、騎馬の亡霊が轟轟という音と共になんとも恐ろしい形相で婦人席を越えて疾駆して来た。男の子たちは教会墓地で氣を失っているのを発見された。以来カルシユテートの亡霊を呼ぶ者は二度といない。

五六四 粉挽き場の偶像

ブラウエンの上手の粉挽き場ではかつて——あるいは今日でも——奇妙な古代の木像が見られた。まずまあゾングースハウゼンのピュストリヒミたいに不恰好人間の形で、粉挽き場の偶像と呼ばれた。これは異教時代に由来し、本当に神像だったのだ、との言い伝えである。この像には不思議な特性があつて、粉挽き場から持ち去ることはできない。片づけてしまおうとしても、再三元のところに戻つて来る。もつともその際うるさい音やらお化け騒ぎはないのだが。ある時のこと、がたがた若造（粉挽き職人）である小生意気な青年がここにやつて来て、慣わし通り親方や朋輩にしかるべく仁義を切り、泊めてください、と頼み、ああ、いいともさ、と言われた。粉挽き場をつらつら眺めると、当然粉挽き場の偶像も目に入った。で、訊ねると、その木像に関わる由緒来歴が講釈された。これを聴いた余所者の職人はふふんと鼻で嗤い、こんな古ぼけた茶色の木像が持つて行かれた先から自分でここへ戻つて来るなんて話がほんとかどうか一つ試してみるべえ、と心中ひそかに考えた。夜が更けると、あてがわれた小部屋から抜け出し、折から月が明るく照っていたので、偶像に忍び寄り、安置されていた場所から取つて、水車

溝に投げ込んでしまった。ところが途端に突然嵐が轟轟捲き起こり、目に見えない手が水車の輪を始動、水車がごとごと運行、鈴がリンリン、水は凄まじく奔騰、もろもろの装置が、桶が、箱がぐるぐる回転したので、若者は気が遠くなつた。それから目に見えない手が若者をぎゅつと掴むと、水車溝に引き戻した。溝の中からの木像がにゅつと突き出ており、仰天した若者は慌ててミュールゲッツを水から引き揚げて元の場所に運んだ。すると、何もかもまたしんと静まりかえつた。ただし親方を除いて。親方は、奉公人と共に、大騒動の原因を調べ、余所者がミュールゲッツの平安を妨げたことを知ると、棒を一本おつ取り、奉公人にもそうさせ、二人掛かりで軽はずみなおつちよこちよいをこてんこてんに叩きのめし、水車場から抛り出した。以来ミュールゲッツは平安を妨げられることなく、同じ場所に鎮座し続けた。

五六五 トリップストリル

フォイクトランドおよびお隣のテューリンゲンやザクセンではありきたりの冗談だが、どこへ行くんだね、と詮索されて、ちゃんと本当のことを言う必要がない、と思われる場合、「トリップストリルへさ」と答える。このおふざけは小都市トリプティスと関係があり、この町にはこんな事のしだいがある。現在トリプティス市がある地域にはかつて三つの城館ないし城塞があつた由。一つ目は大ホッカー山上、二つ目は現在館があるところ、三つ目は現在墓地があるところ。この三つの城塞は「トリリオ」ないし「ドリロ」といわれ、これから「トリプスストリル」なる戯名が作られた。

トリプティスの近くには泉がある。今日では麗しからざる名前「水溜まり」で通っている。そして「水溜まりが

柳の上に垂れている」とふざけた言い方がある。その昔、そこは日蔭で快い場所だった。いとも歳古りた柳の巨木が立ち、泉と芝生に緑の天蓋のごとく枝を垂れ、逞しい根を泉の底まで伸ばしていた。この根は澄み切った水中に見え、今なお見える。かの麗しきグロイチユ女伯が未来の背の君の容姿を水面にありありと予見したのはこの泉である。しかしやがて柳は枯死し、根っこだけが残った。そこで根っこの上に水があることになったので、前述の戲言「水溜まりが柳の上に垂れている」が巷間作られたしだい。

五六六 ぶかぶか帽子

昔むかしパウザ周辺で家の精みたいな若者がうろつき廻っていたことがある。この男の素性はとんと見当がつかず、人間なのか、手伝い妖精なのかも分からなかった。しかしながらいつも粉挽き職人の嗜好をしており、被りつけているみょうちきりんな形の帽子のために、だれにもぶかぶか帽子と呼ばれた。彼はおそろしく勤勉だったが、どの粉挽き場でも長続きしなかった。なにしろひとをからかったり、ぶきつちよな失敗をやらしたりが再々なので、しょっちゅう、おめえは誠だ、と申し渡される羽目に陥ったからである。彼を知っている者は、麴麴を喰う以上のことができる（「一筋縄では行かない」やつ、と口を揃えて言ったし、やりこめようとしたり連中で手ひどく反撃されたのも少なからずだったが、それでも、当たらず障らずでいてもらえれば、たいていは無害な悪戯をするだけだった。ある時、ヴァレングリユーンの百姓屋敷で、一家が大人も子どもも食卓に着いて昼飯を食べていたが、周りにはおそろしくたくさん蠅が群がっていた。そこへ扉が開いて、ブンプフトが顔を覗かせた。愛想良く歓迎の挨拶をされて、一緒に食事を、と招かれた彼は、二度まで言わせず、すぐさま坐り込んだ。もてなしのい

い主婦がずつしりした団子クロリスを皿に載せると、突拍子とつびょうしもないことが起こった。ンプフートが当該団子クロリスを切り分けようとする、団子クロリスは自分の固さを目に物見せてくれんとはかり、ンプフートの小刀ナイフの下から滑り出し、砲弾よろしく部屋の戸と真向かいの厩うまの戸をぶち抜き、斑あまの牡牛おおしの角に刺さったのである。皆、びっくり仰天、口あんぐりとなったが、ンプフートは落ち着き払って次次に団子クロリスを皿に取り、頗る旨うまそうに平らげた。こうした楽しい仕事にいそしんでいる最中、蠅はがなんともうるさく彼を煩わせたので、ンプフートは主人に向かつてぶうぶう不平を鳴らし、害虫どもを戸の外へ追い出したらいいだろう、と言った。「そりゃまあ、やつらが追い出されてそのまま外にいくれりゃあええだがよ」と返辞がある。「だども、追い出したところでなんになる」。「そいじゃ」とンプフート。「おめえさまたち、このけつこうな飯を喰くつちまうまで、やつらをどつか別の場所に置いときゃあよかンべえ。そうすりゃ、あつかましい虫けらに邪魔されねえで済む」。これを聞いて、一座はげらげら笑い、一家の父親はこう言った。「まあさ、ンプフート、おぬしがそうしてみなあよ。蠅どもをどつかへ片づけなせえ。なんせおぬしゃあ妖術使いだで」。ンプフートは口を横に拡げ、被っていた帽子を別の場所に置くと、蠅どもに中へ入るよう命じた。するとだれもが驚愕きやうがくしたことは蠅はは悉く蜂の集団のように帽子の中に潜り込んだので、帽子は一杯になって膨れ上がり、更に縁の上でうようよ蠢うごめいた。ンプフートはと申せば幅の広い大きな口を拭くと、ご馳走さん、と挨拶し、蠅の入った帽子を手に取り、扉の外へ蠅を持ち出し、そこにあつた幾つもの乳入れ壺ちぼの中へ払い落とし、大声で笑うと、いなくなつた。

五六七 水車装置修理人になつたぶかぶか帽子

ある粉挽き場でお祓い箱になつたぶかぶか帽子は、いかにも粉挽き職人といった恰好で、流れに沿つて歩いて行つた。辿り着いたブルクハルトの水車小屋なる粉挽き場には、かなりの数の人間が集まつていた。それもそのはず、水車の車輪が新たに作られ、これを粉挽き業者の習慣に従い、厳かに取り付けるところだつたからで。ポンプフートはほくそえんだ。なにしろ、こういう折にご馳走や酒をたっぷり振る舞わないと世間一般のしきたりに背くのでね。この放浪のがたがた若造〔「粉挽き職人」〕は、愛想良くもてなしてもらえるもの、とすつかり当て込み、凶凶しく部屋に足を踏み入れ、しかるべく同業の仁義を切ると、でっかい菓子の数数、各種腸詰め、その他宴会のために用意され、ずらりと並んでいる品目を横目で眺めた。ところが粉挽きの親方はと申せば——この御仁、ポンプフートのことをこれまで知らずじまいだつた、知つていれば多分こうはしなかつたらう——、渡り者の粉挽き職人が仁義を切つた時にいつもそうしていた通り、麵麩を一切れやり、火酒を小さな杯に注がせただけだつた。ポンプフートは渡された麵麩を食べ、酒を干すと、こんな人に人を集めているなあ、なんのためにござんす、と親方に訊いた。「水車の建前さね」と粉挽きが言葉短かに答えると、「さよで」とポンプフートはもつと言葉短かに返して、ろくすっぽ礼も言わずに部屋を出た。さて、車輪取り付けの作業が始まつたが、車軸が短か過ぎて軸受けがそこまで届かないことが分かつた時の粉挽きの狼狽・憤慨と来たらなかつた。粉挽きと大工と鍛冶屋は、前もつて何もかもきちんとして計り、ぴったり寸法は合つていた、と三度も固く誓いはしたものの、作業は無駄骨折りとあいつた。すると建前に招かれた客の一人が、さっきの余所者の職人はもしかして例の底の知れない妖術使いポンプフー

トかも、やつこさん、つつけんどんにあしらわれたのを根に持つて、粉挽きにこんな悪戯を仕掛けたんじゃあないか、と思いついた。一同、これに同意、何人かが、できればポンプフートに追いついて、連れ戻そう、と駈け去った。彼らは間もなくポンプフートがいともゆつくり、ぶうらりぶうらり道中しているのを見つけ、後ろから大声で呼び掛けた。男は聞こえないようなふりをしていたが、ポンプフートに間違いなかった。そこで追いつこうと速度を上げたが、走って走ってとうとう汗びっしょり、息も絶え絶えになった。ポンプフートはてんから怠け者の職人よろしく至極のろろ歩いていたのだが、追い掛けている連中との距離は一向変わらなかったのだ。とどのつまりは追いつかせてやりはしたが、水車小屋まで戻ってくれ、との申し出をせせら嗤い、招きに応じようとはしなかった。長いこと口を酸っぱくして頼んだあげく、ようやく一緒に引き返す気になった様子を見せた。以前挨拶を交わした時とは天地雲泥の差でもてなしが良くなった水車小屋でポンプフートはすぐさま、自分が麵麩を喰う以上のことができる（「一筋縄では行かない」ことを証明した。すなわち、焙き肉、豚の塩漬け腿肉、腸詰め、菓子類を驚くべき分量で貪り、加えて、これまたそれに劣らず傍の者を仰天させる飲みっぷりを見せた。この牛飲馬食が終わると、彼は外へ出て、届かない軸受けと車台の間に上げられたままになっていた車軸の短い車輪のところに行き、水受け板に攀じ登り、被っていた帽子を脱ぎ、それで車台の片側、次いでもう片側を叩いた。すると、両側とも車軸にじりじりと近づき、軸受けにすっぽり嵌まった。居合わせた全員が喝采し、ポンプフートは一言も言わずに立ち去った。

五六八 ルンゲレ

一六五四年九月、シュライツで奇妙な事件が起こった。言い伝えによれば、中央広場沿いのハンス・フランクなる靴屋で、煖房部屋にお化けが出没するようになったのである。これは一年の四分の一、毎日、宵の六時から八時まで暴れ回り、子どもたちや奉公人らにありとあらゆる物を投げつけた。煖房部屋で女中が夕食後の洗い物をするたびに、洗い桶から雑巾を引つ張り出して、ぐしょぐしょになったのを女中の顔に投げるのだった。噂が高くなる、毎晩近隣その他の人人が検分のためこの家に押し掛けたが、この連中にも色色な物が飛んで来たので、多くは二度と来なかつた。日中こやつは匙や小刀を隠したので、家人が昼食を摂ろうとしても、匙や小刀が見当たらないという始末。靴屋の娘はこのお化けをルンゲレと名付け、「ルンゲレ、あたしの小刀やお匙を返してよ」と叫んだ。すると皆の小刀が真つ昼間食卓にざつと抛り出され、一同、わつと跳び上がったものである。靴屋が「肉屋に頼んで」肥えた豚を潰してもらい、「拵えた」腸詰めが煖房部屋の藁筵の上に運び込まれると、ルンゲレは白腸詰めを取つて、これを肉屋の頸の周りに鬚襟のように巻いた。一家が食事していると、こやつは一掴みの玉葱を汁「の入った深鉢」に投げ込んだので、汁が鉢の周囲に飛び散つた。靴屋の隠しから金を引つ張り出し、子どもたちが飲んでいゝ乳入り汁に投げ込んだので、ちびさんたちは匙で貨幣を——大方の賢しらぶつた御仁が学識を掬い出すように——掬い出す羽目になった。子どもたちだけが家にいた時のこと、黄昏初めた頃、煖房部屋で一緒に遊んでいると、突然ルンゲレが胸をはだけた白襯衣姿の小児の恰好で出現した。胸は血まみれで、「木馬遊びのように」一本の棒にまたがって走り回つた。それを見つけた例の女の子がきやあきやあ言い始め、子どもたちは怖がつてあち

こちに走って逃げ、ご近所の衆や両親を探した。集まって来たこうした人人その他は、例の女の子——いつもルンゲレに声を掛けていた——を、あの(血まみれの)子がまだいるかどうか、独りで煖房部屋に見にやった。女の子は子どもが煖炉だんろの後ろに立っているのを見つけ、「ぼうや、どうして欲しいの」と訊ねた。亡霊いわく「あんたにやどうしたってぼくを助けられない」。煖房部屋の扉の外にいたある女の指図で、女の子は更に色色なことを訊き、そのつど返辞を貰った。最後に女の子が「ぼうや、安息に就きなさい、そうしてもう戻って来ちゃだめよ」と言わされると、妖怪は煖房部屋から出ては行つたが、かなりの間相変わらず家に留まり、子どもたちが寝ようとする、と、びしやりとぶつたり、髪の毛を引つ張つたり、鼻をつまんんだり、時時は平手打ちさえ喰わすのだった。靴屋の寝台の前にも来て、揺り籠かごに入った幼子おまごを前後に跳ね返るほど手ひどく揺さぶつた。錠前から鍵を外したり、焙やき腸詰めソイセーシを盗んで、煖炉の焼き網メッシュに載せて焙あぶつて平らげたりなんてこともやらかし、腸詰めソイセーシの皮は焚たき口に放つてあつた。靴屋が市へ出掛けようとすると、彼の靴を靴掛け棒からどこかへ持つて行つてしまった。また時折(靴製靴製造用の)皮革を全部見ている前で運び去つた。とうとうこの悪い幽霊はある牝牛小屋(25)に入り込んだ。何度か二階の干し草置き場から厩うまばへ降りる梯子はしこを持ち出し、それを厩の戸の前に横たえ、それから牝牛たちを解き放ち、厩中追いかけて回したので、牝牛たちは疲れ切つてしまった。こんなことをしている最中、二、三度邪魔が入つたものだから、とうとうお化けは鞍替くらかえした。もつとも他の家家に出現、ひどい被害を与えた。織物工が乾かそうとした糸を半分に切ることが度重なり、別の場所では牛糞ぎゅうふんを牛乳の中に入れたり、乳搾り娘ちらしほに石を投げて牛小屋から追い出したりした。

五六九 世話好きな灯火ともしび

シユライツ近郊、ノインドルフとゲルクヴィッツの間で、街道はかなり大きな沼地の傍を通っている。現在の舗装道路ができる前、夜間そこを旅するのは險呑けんどんもいところだった。けれどもかつてその界隈かいわいにはしばしば灯火が一つ現れ、道に踏み迷ったり、事故に遭つたりしないよう、旅人に注意しようとした。昔ある馭者ぎよしやが夜この道やつて来て、ぬかるんだ場所で馬車を顛覆てんぷくさせてしまった。馭者はすぐにもノインドルフへ引き返し、助けを呼ぼうとした。なにしろこうも真つ暗では独りではどうしようもなかったからだ。その時彼は、角灯カクデンが一つ、どんどん近づいて来るのを見た。間もなくそれは馬車の背後に到着した。馭者は、こうも親切に世話を焼きに来てくれたのは、だれだか確かめようとしたが、人間の姿はなく、灯火だけが宙にふわふわ浮き、周囲を明るく照らしているのに、びつくり仰天した。しかしながら切羽詰まっていたので、世話好きの灯火は大歓迎。馭者はこの明るい光のお蔭かげで車体を起こし、道中が続けられるように馬車の整備を終え、それから援助の手を差し伸べてくれたことにとつくり礼を述べようと、馬車の後ろに廻った。けれども、「ありがとうさん」と馭者が口を切った途端、へんてこな灯火は穏やかながらリンリンと響く声でこう叫んだ。

ありがとうさんにありがとね。

これで救済、決まりだもん。(2)

そう叫びながらふわふわ高く昇って行き、雲間へ消え失せた。

五七〇 カタカタどん¹

パウザから程遠からぬティーアバハ⁽²⁰⁾の教会墓地に、その昔、骸骨^{がいこつ}が一体あった。これには骨がまだ全部揃^{そろ}っていた。骸骨は墓地の壁龕^{へきがん}の中にいて、村の若い者を脅^{おびや}かし、罪を犯させないようにするのに役立っていた。風が強く吹くたび、野曝^{のびら}しの骨が打ち合ってカタカタと鳴るものだから、人呼んでカタカタどん¹。この骸骨、ある農夫——村長だったとか——の息子のもので、村の貧乏な娘に惚^ほれ、うまいことを言つてその純潔を奪ったのである。その時、男はこう誓った。「もしもおれがおまえに信実^{まこと}を守らず、女房にしなければならぬ、おれはこの体を墓の中で安らわせはしない」と。けれども男は娘と結婚することを〔親に〕許してもらえなかつたし、その後もそうしようとせず、結局ある裕福な女と縁組みした。貧しい娘の方は名譽^{なごう}を恢復^{かひく}してくれる男性が見つかったが、信実を守らなかつた男は裕福な妻とはうまく行かなかつた。いやそれどころか極めて不幸だつた。そこで飲酒に耽^{ふけ}るようになり、酔つ払つたあげく顛落^{てんらく}事故を起こして死んだ。埋葬されたが、亡骸^{なきがら}を納めた柩^{ひつぎ}は涼しい土の中に憩^ひおうとせず、地表へせり上がり、その一部が墓から出ているのがしょっちゅう見えた。土を掘つて上に被^{かぶ}せてもだめで、せり上がるばかりだつた。そこで人人はとうとう柩を掘り出し、棺台を保管しておく扉^{くほ}もない窪^{くぼ}みに置いた。やがて柩はだんだんに崩れ、骸骨が剥^むき出しになり、衆目に曝^{さら}された。こうして歳月が流れ、かつてこの体で歩き回っていたのがなんとという名の男か、もはや知らない者も多くなつた。しかし、いまだに男が安らぎも休息もなくさまよっている、との言い伝えが広まつた。さて、ある時、ティーアバハで婚禮があり、老若^{こせ}挙^あつて祝宴に連なつた

が、やがて若い人たちが担保遊び(85)を始めた。もう真夜中だった。「担保は何にしたらいい。あたしが持つてるこの担保」とだれかが唱えた。「墓地からここまでカタカタどんを運ぶ」と大きな返辞。だれもがげらげら笑ったが、この担保の置き手で、かつ、なんともけしからぬ注文を出した跳ね返り娘に惚(86)れていた男は、そっと席を外し、教会墓地へ行くと、カタカタどんを背負い、それからすぐカタカタ音を立てる荷物と一緒に戻って来た。一回びつくり仰天して悲鳴を挙げたが、この若い衆は自分の勇気を自慢した。しかし若い人たちが大騒ぎしていると、一人の老爺(87)が進み出て、厳しくこう言った。「みんな、カタカタどんと握手して、煩(88)わせた詫(89)びをするがいい。でない、と、良くない事に見舞われるでな」。一座の者はびくびくしながら言い付け通りにした。けれども年輩の小柄な女が一人だけ遠くに身を避けて、震えながら目に涙を湛(90)えていた。「あんたもだよ、あんたも、許してくれ、って言わなくちゃ」と年寄りが叫んだ。彼女は身を震わせながらも歩み寄り、骨と化した手を握り、こう囁(91)いた。「許してね。あたし自身もあんたを許すわ」。かつて捨てられた女だったのである。すると微かな音を立てて骨と骨の繋(92)がりがある。外れ、骸骨はばらばらになつてくずおれた。人人は骨を拾い集めて埋葬、カタカタどんはかくして安息を得たのである。

五七一 踊る牝猫(93)たち

ベルガ(94)の上手、ペルチエン村の最寄りに、その昔クヴェアフルトという女子修道院があった。近くのペルチエン村の多くの住民の言うところでは、その建物は全く不気味だそうである。とりわけそこではしばしば魔女どもが猫に化けて夜の舞踏(95)をやらかした。村の古株で元のレンマー亭、今のガイン亭(96)の主人はよくこんな話をしたもの。

「ある晩のこつてすが、あつしの牝猫が閉まつてる窓に外から跳び上がりましてね、窓の縁に坐り込んでカリカリ引つ搔くんでさ。あつしは窓を開けて、菓子の生焼けを縁無し帽に入れてくれてやりました。そうしてこつ言つたもんです。『この老耄れど腐れ女郎、おめえなんぞは昨日の晩あたり、修道院で仲間になつてたんだろな』ってね。すると猫のやつ、急にいなくなりましてね、帽子も見えなくなつたんでさ。あつしら、外へ出て窓の下を全部探したんですが、帽子は影も形もありやしませんでした。猫もそれつきり戻つて来なかつたんです。雪が降つたばかりで、黒い帽子は簡単に見つかるはずだつたんですが」。

同じことをベルチェンにある今のプーフエ亭の住人が語っている。「わしはクヴェーアフルト修道院で夜よく猫どもが踊るのを目にしたもんだ。ある夜、わしはベルガでいろんな用事を片づけて、家へ帰つて来た。すると古い修道院に灯りが点つているのを目にした。近づいて、すぐ向かいにあるわしの家まで来ると、あつちで猫がたくさん踊っているのが見えた。その中にわしんとこの牝猫もおつた。で、翌日やつを見掛けると、こつ怒鳴つてやつた。『やい、こんちきしよう、おまえも夜修道院におつただろうが。わしやあ、おまえが踊つとるのを見たぞ』。するとな、あのけだものめ、シャーシャー、シューシュー、喱み啼きを始め、さあつと走つて行くなり、硝子を突き破つて窓から跳び出した。それつきり二度とわしは目にしとらん」。——メルゼブルクのあの司教の猫と同様である（DSB四二一）。

また別の時、ベルチェンのある男が古い修道院で四匹の猫が踊つているのを見た。そこには男の牝の飼ひ猫もいて、目を光らせていた。翌日戻つて来た猫は掻き傷だらけだったので、男は猫にこつ言つた。『おまえ、何をやらしたんだ。おれは昨日見掛けたなあ、どうやらおまえだな。おまえ、目を光らせとつたが、自分の仕事はちゃんとやつたんだろな』。すると猫はくるりと振り向くと、飼ひ主にぱつと跳びつき、顔を引つ搔くなり、一躍硝子を

突き破って窓から跳び出し、二度と戻って来なかった。

五七二 正真正銘の降誕祭樹

ゲラから行程一哩マイルの村について前世紀（「十八世紀」）までボルスドルフ種の林檎りんごの生る樹があった。ところがこの樹は毎年降誕祭クリストマスの夜に漸く開花し始め、熟した実をつけるのだった。この樹は救世主生誕の夜初めて開花し、同夜実をつけたのであり、不可思議な奇蹟きせきによって、長寿が保たれたのだ、と人人は言う。

五七三 青い靄

フォイクトラントの都市ゲラとその周辺には黒死病流行時代の伝説が一杯ある。数多くの町村が黒死病に襲われ、住民はばたばた斃れた。この折にはさまざまなきごとが起こり、いまだに伝説として語り継がれている。

二人の余所者の旅職人がゲラのとある居酒屋——ここではもう何人もが黒死病で死んでいた——に入り、酒を酌み交わした。その内職人の一人が薄い霧みtainな奇妙な青い煙が部屋の間からゆっくり立ち昇っているのを目にし、仲間を肘ひじでつついた。仲間もその青い靄が見えた。そして二人は靄が壁の割れ目にのろのろと入って行くのを見届けた。最初の職人はほんの気晴らしにささつと楔くわを削り、これを割れ目に打ち込んで、靄を封じ込めた。それから酒代を払い、旅修業を続けた。それからというもの、「ゲラでは」黒死病で死ぬ者は跡を絶った。二、三年後、例の職人の一人がたまたまゲラを再訪、その時にはもはやだれもあの忌まわしい疾病のことを憶えていなかった。

職人は同じ居酒屋に立ち寄り、自分があの折打ち込んだ楔——まだ前の場所に刺さっていたのである——にふと目が行った。そこでげらげら笑いだし、飲み仲間らに向かつて「なあ、みんな見なよ、二、三年前によう、おいら、あすこへ青い鳥を閉じ込めた。まだ、中にいるかどうか調べようや」と言うと、ただちに楔を引っこ抜いた。すると抜かれた楔の奥からすぐさまあの青い霧が湧き出した。これは黒死病だったのであって、すぐさま居合わせた幾人かに襲い掛かり、次いで町中に広まり、前回よりもずっと多くの人人を奪い去ったのである。

ラニス近郊(88)のモラにも同様なことがあった。ここでは黒死病ペストはある梁はりに楔で封じられたのである。ある少年が悪戯半分(89)で楔を抜くと、青い霧が町の各戸、村の農家、そして田園全体に広まって行き、レーマースドルフとツォイレンローダ(90)へ進み、市町村に襲い掛かったので、たくさん(91)の人人が罹患りかんして斃たおれた。ツァーデルスドルフでは全村民が死亡、ツォイレンローダの墓掘り人が村中の者を埋葬した。ところが、この男、死人の中に老嬢オールドミスが一人まだ生きているのを発見した。この女は「埋めようとすると」抵抗した。墓掘り人いわく「おんや、まあ、これじゃどいつもこいつも穴から出て来て、まだ生きてるよ、って言いかねえな」。そうしてあくまでも一緒に墓穴に投げ込もうとした。でも女はなんとか無事に逃げ出して、ゲラ近傍のツァイツ山ベルクへ向かった。この山は有名な山だが、老嬢オールドミスだつて留め針で掘り起こし、指貫ゆびぬきで運んで行けるに違いない。で、老嬢オールドミス連が死ぬと、墓蛙ウンケになつて、沼地に坐り込み、こう歌う。

ウンク、ウンク、ウンク、

昔あたしは若かつた。

あたしに亭主があつたなら、

沼地に坐^{すわ}つちやいなかるう。

ウンク、ウンク、ウンク、

も一度若くなれたらな。

五七四 ホーフの背高のつぽ男

ホーフ^(註)には市場小路^{マルクトガッセ}と呼ばれる横丁がある。昔ここには大きく、黒く、背高のつぽの男が現れたもの。こやつ
の丈^{たけ}と来たら、頭は家並みを越し、足を踏んばると、横丁の幅一杯だった。ヴァールブルク・ヴィートマンのお
かみさんなる女性がある晩横丁を通らなければならぬことがあつて、男を目にした。で、男の股^{また}の間を抜ける
か、引つ返すか、とあいなつた。とうとう彼女は心を決め、十字を切ると、運を天^{まか}に委せ、横丁の真ん中を通つて
背高男の両足を潜^{くぐ}つた。潜り抜けた途端、男はぴしやりと足を閉じたので、市場小路^{マルクトガッセ}中ががらと崩れ落ちんば
かり、ばりばりがたんと家鳴り震動した。その後黒死病^{ペスト}の大流行が起こつたが、始まりは市場小路^{マルクトガッセ}で、そこから全
フォイクトラントに蔓延^{まんえん}した。シュライツの町を見下ろす美しい山^{ベルケルヒェ}の教会にはシュライツに黒死病^{ペスト}を持ち込んだ
黒死病男^{ペスト}についての石造の記念碑がいまなおある。町はこのためほとんど壊滅したのである。

五七五 プレヒタの麦酒^{ビール}

ペスネックの町⁽²⁾から程遠からぬところにボーデルヴィッツ⁽³⁾が、ボーデルヴィッツの近くにデーブリッツ⁽⁴⁾が、デーブリッツの近在に三角形の畑がある。この畑を時折怖いプレヒタ⁽⁵⁾が耕す。デーブリッツのある娘がボーデルヴィッツまで麦酒^{ビール}を買いに行かされた——ホレ夫人の同勢に麦酒^{ビール}を飲み干されたシュヴァルツアのあの男の子たち(D S B五〇一)のように。だが、こちらでは飲みたがったのはプレヒタである。一杯入った水差しを持って帰る途中、娘は村の近くの三角畑のところで鋤^{すき}を使っているプレヒタにやっぱり出くわしたのである。プレヒタは娘に、どこへ行って来たのか、容れ物には何が入っているのか、訊^きねた。そうして娘の手から水差しを取り上げ、麦酒^{ビール}を底まで飲み干した。それからプレヒタは水差しの中に小便をし、それを娘に返して、「とっとと家に戻りな」と言った。何枚かの木切れも、贈り物だよ、とやろうとし、娘が、そんなもの要りません、と拒むと、逃げ出そうとする娘の靴の中⁽⁷⁾へそれを詰め込んだ。デーブリッツに着いた娘が灯^{あか}りの下でよく見ると、金貨六枚になっていた。持ち帰った麦酒^{ビール}はケストリッツ⁽⁸⁾産⁽⁹⁾よりも旨^{うま}く、一向尽きようとしなかった。もつとも、これを苦にして思い悩んだ娘が、とうとう、水差しに何が起こったかすっかり喋^{しゃべ}ってしまうと、容れ物は突然空っぽになった。なお、この娘はその後いつも幸せで、また誠実勤勉でもあり、おちゃらけ唄^{うた}でそこいら中歌われた、その昔のボーデルヴィッツの娘⁽¹⁰⁾と連みたいなことは全くなかった。

ブーデルスってどこだか知らないの。

緑豊かなところにある。

あすこにや綺麗なあまつちよがおつてさ。

雌鶏めんどりみたいに怠なまけ者。

明け方牛飼いの角笛吹くと、

あまつちよ叫ぶよ、あんれまあ、

あたいはまんだ乳搾しぼつてねえだ。(99)

五七六 ウルバヌスの説教

エールゼン教会(10)の北側には一つ石像が見られる。これは牡羊おひつじにまたがっている羊飼いの姿で、こんな伝説が語られている。その昔、エールゼンの上手、クリーデン巖フメゼンの上には醸造釜がまが置かれていて、村民はこれを使ってせつせと麦酒ビールを醸かめた。この釜は毎回、貸してください、と頼んで取って来なければならなかった。そしてまた元へ戻されるのだが、麦酒ビール一マース(10)と白麵小麦一列分(10)を必ず中に入れておかねばならなかった。ある時羊飼いの下働きが飢渴に迫られてこうした飲食物を発見、すっかり平らげてしまった。この若者は罰として羊の群れや醸造釜ともども地中に沈んだ。白麵小麦を食くべ、麦酒ビールを飲んだ償いとして、沈んで行く羊飼いは遺言おごを遺した。そこで毎年、彼が罪を犯した日——これは聖ウルバヌスの祝日(10)だった——に弥撒ミサを執り行い、彼の哀れな魂のために祈禱きとうを捧げ、その際参列者一同に彼の遺産を用いて焼かれた小型丸白麵小麦が一つづつ配られることになっている由。これはいまなお

行われている。これらの麵麴ペは決して黴カビが生えない効能がある。そしてまた大切に祀まつっておけば、それが保管されている限り、家で麵麴ペに不自由することはないような。

五七七 黄金キンの上靴を履いた巨人

ペスネック近郊に絵のように美しい巖いわの塊がある。険しい斜面は東のオツブルク（出）の方に向いている。每晚、ペスネックの教会の時計が十二時を打つと、この巖の家から巨人が出て来て、絞首台ガルゲンベルクの山を越えて行く。巨人は左足に黄金の上靴を履いている。だれかが巖のところまで巨人と一緒に歩き始め、追いつくと、巨人は上靴を失なくしてしまう。そしてそのだれかは上靴を頂戴ちやうたいして、生涯裕福になる。

五七八 カムゼンペの山山ベルゲの宝物

ペスネックとオツブルク（出）の間にカムゼンの山山ベルゲとかヒヤムゼンの山山ベルゲと呼ばれる二つの山がある。南側の巖いわの裂け目を指し、これこそカムゼンベルゲの大宝箱はうくつの入口だ、とする者がある。伝説によれば、まず狭い口から長いこと内部へ辿たどると、拡がって大きな広間になるとか。やっと最深部に達すると赤く輝く黄金で一杯の醸造用鍋がある。けれども両開きの鉄の扉が閉ざされていて、焰はなを吐く一頭の龍が見張っている。幸い中に入れ、さて次に真つ暗な恐怖の洞窟の中で龍と闘い、打ち勝つことができれば、黄金の財宝はたけが我が物になるわけだが……。カムゼンベルゲは、ヘールゼーレンベルゲ、ヘルマンズベルゲ、ヴァルトベルク、ジンガーベルク、シュネーコプフその他

テューリンゲンの幾つもの山山同様、言い伝えに富んでいる。オステラリッツなる城がそこに沈んでいる。さまざま白衣の令嬢が財宝を守護している。旅回りの楽士たちが輝く灯火が走り去って行くのを目にし、たった一人、一番貧乏な低音大提琴の奏者だけが、そう速くはなかったが、跡を跟けることができた。近寄るとこれは火の玉となり、パチパチ弾け、燃える炭を周りに撒き散らした。その幾らかは楽器胴体の響孔に跳び込み、中で金塊に変わった。白髪の男の侏儒たちが農夫、羊飼、牛飼、男の子などを山の胎内に招き入れ、多くは宝物を貰って戻って来た。子どもを抱いていた女中が誘い込まれたことがある。彼女は、麵麩と黄金を取れ、と言われた。しかも同時に。そこで子どもを卓子の上に置いて、両方を掴み、前掛けに包むと、上オップルクの奉公先目指して走り去った。「子どもは一体どうしただ」。——「あれまあ、カムゼンベルゲに忘れて来ちまった」。——急いで走り戻ると、洞窟の入口はまだ開いており、子どもは見つかり、卓子から抱き取って、山の外へ出た。——外へ出てみると、子どもは塵になった。放牧の家畜が群れから誘い出され、地中に沈んだ城の厩に連れて行かれたことがある。しかし牛飼いはたつぷり弁償してもらった。例の「洞窟を開く鍵となる」奇蹟の花は、カムゼンベルゲ山麓や胎内での不思議な話にはしばしば登場する。ハールツ山地ターレ村近くの湧き出す銀貨（DSB四〇四）にすら匹敵するような伝説が数数語られる場所は幾つかあるが、カムゼンベルゲはこうした場所の一つである。

五七九 銀の泡が湧く泉

オルラミュンデ近郊ハイリンゲン村の傍に廃村がある。ある時そこで羊飼いの少年が羊の番をしていたところ、突然目の前の地面に穴が開き、中から白い泡がさながら霜のように噴き出し、穴の縁全体に付着した。少年はびつ

くりして長いこと穴と中の白い代物を眺めていたが、そのうち羊を駈り立てて戻り、妙な物を見た、と語った。これを聞いた羊飼いの親方はかっとしてこう叱りつけた。「この莫迦野郎。おめえが行き当たったような幸せにだれもが恵まれるもんじゃねえの。おめえが手を出して、その白いのを取って来たらよ、未来永劫好い目に遇ったになあ。なぜってよ、そいつあ純銀だったからさな」。以来羊飼いの少年は来る日も来る日も羊を同じ場所に駈り立てて行ったが、無駄骨折りで、生涯再び銀の湧く穴にお目懸かることはなかった。他の羊飼いの少年でもうまくは行くまい。たとえ眼鏡を掛けていてもね。

五八〇 愚かな女

かつて騎士の古城がハイリンゲンを見下ろす山上にあった。ここに住んでいた最後の騎士には息女が一人あり、ある若者と相思相愛の間柄だった。しかし父親は若者を憎み、これを射殺した。そこで騎士の姫は塔から身を投げ、老父は後悔のあまり死に、城は廢墟になった。令嬢は安息を知らぬ亡霊となつていまだに辺りを徘徊しているが、善良な亡霊で、これまでかなりの者が恩恵を蒙っている。彼女は隠された葡萄酒貯蔵庫——極上葡萄酒が一杯入った数数の大樽が置かれている——の鍵も携えている。こうした穴蔵やこうした令嬢がめつたにないのはまことに残念。

ハイリンゲンのある農夫に娘がいたが、これが普通お人好しといわれる類のお莫迦さんだった。もつともてんからの魯鈍痴呆じゃなくて、ぼうっとしてるだけだったのである。ある時気心の知れた近所同士やらなにやらの酒と骨牌の集まりがあり、お百姓連はこんなことをつい口にした。「あの古いお城のよ、葡萄酒やら金貨やら

がどつきりあるちゆう穴蔵をだれか見つけることができたらもう」。すると例の抜けている娘が「おら、その穴蔵知ってる、おら、知ってる」と言った。「はあて、おめえにや分かりそうもねえがな」と父親。「だども、おら、知ってるだに」と娘は繰り返した。「それで、すぐにおめえさまたちに葡萄酒を持って来たげるよ」。そう言うなり、この子は壺を一つ手にすると、出掛けて行き、間もなく縁まで葡萄酒がなみなみ入った壺を持って帰って来た。「わしもその穴蔵をどうしても見てえ」と父親。「さ、わしと一緒に行くだ」。——こうして二人は連れ立って出掛けたが、今度はお莫迦さんにもまるきり何も見つからなかった。「おらが独りで行ったんだったらよ」と娘は百姓家の部屋に戻りながら言った。「あの穴蔵はきつと見つかっただるうにさ」。さて、上物葡萄酒をもう一度聞き召したいという気分が盛り上がり、農夫たちは、もしこの子がまた葡萄酒を手に入れてくれれば、と金を集めて、差し出したもの。娘は出掛けて、葡萄酒を持ち帰ったが、こうも言った。「これでもう酒屋さんは店仕舞いだ。白い服着たお嬢様はもう二度とおらを入らせちゃくれね。おらがおめえさまたちからろくでもねえ金さ貰ったからだつてよ。お嬢様はおめえさまたちにこう言えつて。この葡萄酒はあんたらのどんちゃん騒ぎにやあもつたない、あんたらにや薄麦酒が相応だ、あんたらを一纏めにしたつて葡萄酒一壺の値打ちもない、つて」。農夫たちはゲラートの寓話にある領地管理官のお愛想を聞いた時みたいに、にやにや笑い、こう言い交わした。「ま、言わせしておくだあ、あれはからきし莫迦だからよ」。

五八一 オルラミュンデの市お抱え楽士

オルラミュンデに市お抱え楽士がいた。人呼んでハウスマン。威勢の良い男だったが、実直だった。もうごく若

くはないにせよ、ぴんしゃんとしていて、神の賜物たる高貴な葡萄酒を決して軽んずることはなかった。ある時このハウスマンは仲間と連れ立ってハイリンゲン——一説によれば、シャウエン森の下手のある村——に出掛け、婚礼の舞踏の伴奏をして、けっこうなもてなしを受け、夜が白む頃そこを出て、陽気に楽しく例の古城の傍、あるいはシャウエン森の縁を通り掛かった。その時ハウスマンの言うよう「朝の調べを一曲やらかして今日という日の夜明けを祝おうじゃないか。それと一緒にあちらにござらっしゃる白衣のお嬢様にもご挨拶をな」。そこで一同縦隊を作ると、いとも朗らかに吹奏を開始した。音曲がまだ終わらぬ内に白衣の令嬢が現れ、楽士たちに歩み寄り、にこやかに彼らの頭数だけ葡萄酒の杯が載っている皿を差し出した。楽士たちはこれを飲み、お礼心でもう一曲吹奏した。令嬢はまた出て来たが、今度皿の上にあつたのは何本もの骨だった。皆目を真ん丸にしたが、この妙ちきりんな贈り物を拒む勇氣はだれにもなかった。けれども城の塔が見えなくなるやいなや、受け取った物を近くの穀物畑に投げ込んだ。だがハウスマンだけは頂戴した骨を丁寧に衣囊に納めた。そして家へ帰り着くと骨は上着ごと衣装篋筒に吊り下げられた。翌日の日曜、晴れ着を持って来ておくれ、と夫に言われた妻は上着を取りに行つたが、「あなた、一体何を入れているの。これ、鉄の塊より重いわ」と訊いたもの。夫は答えた。「だれかに何か貰つた憶えはないんだがなあ。まあ、見せてごらんよ」。実直な市お抱え楽士が骨を突つ込んでおいた上着の衣囊から、妻が引つ張り出したのは円筒状に紙で包まれた長い一卷きの金貨だった。

せっかくの骨を投げ棄ててしまった仲間の楽士たちがこの話を耳にした時、いやもう驚いたのなんの。大急ぎであの穀物畑に駆け戻つた。やれ、嬉しや、骨は見つかった。拾つて帰宅した。ところが家で衣囊から出してみる、と、だれのも骨製の横笛だった。念願の幸運は笛吹きに行つちまつた(「ふいになつた」)が、それでも吹く物はできなかつた。

五八二 オルラミュンデ伯爵夫人

オルラミュンデ伯爵夫人⁽¹²⁾なる人が亡くなり、後に夫人アグネスが残された。なんともうら若い未亡人だったが、伯との間に子どもが二人いた。アグネスの実家はメラン公爵家で、テューリンゲンのオルラミュンデ伯爵領の他、フランケン⁽¹³⁾の地にプラッセン城とその所領を遺産として与えられていたので、時折そちらに住んだ。やがて彼女はブランデンブルク辺境伯にしてニュルンベルク城伯たるアルブレヒト美男伯⁽¹⁴⁾に激しい恋情を抱くようになり、相手も自分と結ばれる気があるのかどうか、内内探らせた。辺境伯とヘンネベルク伯爵家のゾフィーアとの間には縁談が進行中で、辺境伯の両親は存命で婚儀成立を望んでいた。オルラミュンデ伯爵夫人ご執心との報せが秘かに届けられると、アルブレヒトは「四つの目だに無かりせば」と洩らした。——これを聞いた伯爵夫人は、罪のない自分の幼子二人のことだ、と思い込んでしまった。子息は三歳、その妹姫は二歳。辺境伯への身も世もない愛慕に眩⁽¹⁵⁾まれた彼女は、邪魔な子どもたちを排除しよう、と忌まわしい決意を固めた。そこで子どもたちを殺すためにハイダーなる下僕を金で雇い入れた。この男が兇行に及ぼうと踏み込むと、ちいちゃい伯爵はこう哀訴したという。

ハイダー、お願い、生かしといておくれ、

オルラミュンデをおまえにあげる。

それからプラッセンブルクもね、

これなら後悔しないでしょ。

そして息女の方は

ハイダー、お願い、生かしといっておくれ、

あたしのお人形、みなあげるから。

けれども殺人者は嘆願を受け付けず、非道な所業をやり遂げた。とはいえ、後に拷問台でこう告白した。「あの無邪気な子たちの、とりわけ女の子の言ったことを思い出すたび、おれはひどく後悔したもんだ」と。——こんなことをしたにも関わらず伯爵夫人は目的を達しなかつたので、悔やみ、絶望し、重い贖罪しよぐわいを行った。そして死後も安息を見出せず、プラッセンブルク城のあの名高い白衣夫人となってさまよい歩くのだ。彼女はヒンメルクロン修道院へ膝ひざで這はいずって行き、そこに埋葬されている。

五八三 グライヒエンの二人用寝台(註)

シュタットイルム(註)とールドルフシュタットの中間にエーレンシュタイン村があるが、そこにはいまだに同名の城の廃墟はいきよが残っている。これはかつてグライヒエン伯爵家のもので、ささやかなエーレンシュタイン領の中心だった。エーレンシュタイン領は、婚姻によってシュヴァルツブルク伯爵家からグライヒエン伯爵一門に移り、同一族

廃絶後再びシユヴァルトブルク＝ルードルフシユタット家の手に戻った。ありし日のエーレンシユタイン城は城壁を廻らし、幾つもの塔を備えた堂堂たる建築で、プラウエを見下ろすエーレン城ブルクながらだった。東洋に囚とらわれていたグライヒェン伯エルンストを奴隸の鎖から解き放つてくれ、伯爵が第二の奥方として、まだ存命の第一の奥方にフロイデングールの谷で引き合わせたかのサラセン女性に、寡婦産かふとして譲渡したのはこれ、とは昔からの言い伝えである。ここにグライヒェン伯はしばしば滞在した。今日もなお色褪あせた彩色画と金箔きんぱくで飾られた古い巨大な天蓋付き寝台が見られるが、かの伯爵は二人の妻とともにこの寝台で眠つたのだそうである。

五八四 クラニヒフェルト城の記念の徴しるし

クラニヒフェルトの上手城オイバシユロスにその昔ヴォルフアーとリュトガーなる兄弟が住んでいたが、お互いいがみ合うようになり、別居して、共有の領地とクラニヒフェルトの支配権を分割することを決めた。「おれは自分のために新しい城を築く」とリュトガーは言い、彼方かなたの山——後にその山上ニターにクラニヒフェルト城ができた——を指した。これを聞いたヴォルフアーは呵か呵か大笑していわく「おまえがあんなところに城を造れるなら、わしはだれもできん、だれもせん、しかじかのことをして見せるわ」。するとリュトガーは「決トまりだ。騎士は約束を守るものだぞ」と応じて、兄と袂たもとを分かった。それから彼は下手城ニターフルクの建設を開始、壮大なものを仕上げた。そこでヴォルフアーは至極心配になり、大金を積んで賭けを取り消してもらおうとしたが、リュトガーは承知せず、ヴォルフアーが約束した例のことをどうしてもしろ、と言い張つた。そこでヴォルフアーはこれをやらかしたのだが、その際脊椎を折ってしまった。かくして上手城オイバシユルクもリュトガーの所有に帰したらしい。リュトガーは記念の徴しるしとして浅ましくもみつとも

ない恰好かっこうをしている兄の姿を城の張り出し窓の一つに取り付けさせた。これは今日なお見ることができるといえる。

同じ形の石像がアルンシュタットの聖母教会(12)の聖堂内陣窓間壁コイルノフアイラにあり、纏まつわる伝承はこうである。ある敬虔けいけんなシユヴァルト伯爵夫人がこの教会を建立したのだが、手持ちの資金がどうも足りなくなりそうだった。すると建築棟梁とうりやうが、クラニヒフェルトの領主と同じ約束をあえてした。伯爵夫人が最後の一文まではたいしたところで、教会も完成した。そういうわけで、棟梁はやむをえずなんともかとも不快なことをしてみせなければならなかった。

五八五 別別の塔

アルンシュタットの聖母教会(13)についてはたくさんさんの伝説がある。西側正面の脇にある巨大な鐘楼の他に塔を二つ備えているが、内一つはビザンチン建築様式、もう一つはゴシック建築様式である。片方は棟梁とうりやうが、もう片方はその職人がそれぞれ単独で造営した由。助手の担当した塔の方がより優美だと人人に賞讃しょうさんされたので、棟梁はむらと妬ねたみ心を起こし、職人を彼が建てた塔から人知れず投げ落とし、職人の忠犬もその後を慕って跳び下りたのだそう。やがて石像が装飾および思い出のよすがとして塔に取り付けられ、これは今日なお見ることができるといえる。荒れ果てた聖母教会は不気味な雰囲気ふきいめいで、真夜中には亡霊たちがそこで弥撒みさを執り行う。ナウムブルクその他多くの町の塔についても全く同じ、ないし細部がいささか異なる伝説がある。教会の一つの塔の内部には巨人の肋骨が「肋材として」渡わたされている。この巨人の墓はヴァルパー山ペグの下にあり、ハールハウゼンへ通じる街道脇にはこの巨人が地面に差し込んだ匙さしがある。

五八六 乙女の跳躍とベラーの小人たち

アルンシユタツト近郊にヨナス谷なる深い峡谷がある。名称の由来はだれも知らない。谷には垂直にそそり立つ険しい巖壁があり、人呼んで乙女の跳躍という。昔騎馬の男に追われた処女が天使たちに身を委ねてそこから跳び下り、天使たちは彼女を抱き留め、やんわりと地面に下ろしてくれた。騎馬の男は乗馬を制御できぬまま、娘の後から跳躍、人馬ともども奈落の底で砕け散った。谷の入口にある麗しの泉はその昔乙女の泉といわれた。五十年ほど前アルンシユタツトのちいちゃな少年聖歌隊員が乙女の跳躍の巖頭へ散歩に出掛けたところ、猛烈な突風に襲われてよろけてしまい、ことにこの子の着ていた外套を風が帆のようにはらませたので、谷間へ攫われた。ところが落ちて行く際、聖歌隊の外套が落下傘のような働きをし、傷一つ負わずに済んだ。

この谷の奥、入口からずっと上手に、ベラーの洞窟と呼ばれる巖穴があり、中にベラーの小人たちという小人たちが棲んでいた。彼らは悪戯妖精の流儀——これについては随分話がある——通り、温良でもあり意地悪でもある。リンブルク・アン・デア・マースで物語られるニーフェル小人やオウヴェル小人に似ている。この峡谷——もつと高くエスペンフェルト村の方へと登ったところはゲツツェン谷と呼ばれる——は全く不気味である。妖魔どもが夜歩く人人の背中にどさりとおぼさり、かなりの距離を背負って行かせる。夜更けに「麗しの泉」亭——上等の小麦麦酒が飲める——を出て、あの辺りの道を辿った連中が既に少なからずこうした目に遭っている。

テューリンゲンの多くの他の場所にもまだまだ小人の洞窟があり、そちこちで悪戯小人の洞窟とか悪戯小人の洞穴と呼ばれている。ブツファールト・アン・デア・イルム、ザルツミュンデ、マイニンゲン、デイルシユテッ

ト、ヴィヒツハウゼン^(註)近郊がそうである。そして、フン族侵入時代、人人はこの恐ろしい蛮族どもから逃れようと、ちいぢやな怖がりんぼの悪戯^(註)小人よろしくこうした洞窟に潜り込んだ、という伝説がいろいろところで語られている。

五八七 「マースたつぶり! マースたつぶり!」

アルンシュタット近郊に菓草が豊富に採れる美しい山林があり、ヴァルパー森^(註)と呼ばれている。なぜなら昔その高みに聖女ヴァルプルギスに奉獻された修道院が建っていたからである。そこに高い山毛櫨^(註)林というところがあり、実際いわゆる狩りの山毛櫨の樹が聳えている。この山毛櫨の根元周りは芝もその他雑草も菓草も一切生えない丸い地面である。そこにはさる麦酒酒場の女将の安らぎに就けない亡霊が呪封されている。生前麦酒の量りをこまかしたからだ。その名はホレ夫人。時折古風な衣装を纏った彼女が狩獵山毛櫨の周りを休むことなく歩き続け、絶えず声を振り絞って「マースたつぶり! マースたつぶり!」と悲痛に叫ぶのが見聞きされる。

この伝説の呪封された亡霊の名にホレ夫人というあの神話的な名が重ね合わされていることは確かである。またこの亡霊はメーリス近くのもぎとり巖の下を徘徊する女(DSB五一〇)を思い出させる。彼女はお顧客さんに損をさせたので呪封され、「一カンネを四分の三、一プントを四分の三」といつも叫んでいるのだ。

五八八 子ども十字軍と子どもの踊り

その昔（一二二二年）テューリンゲンその他ドイツ各地の子どもたちの間に、フランスにおいてと同様、群れを成して遠征し、聖墓を獲得しようという奇妙な衝動、不可思議な幻想が広まったことがある。

伝承にいわく。見知らぬ美少年が諸地方を渡り歩き、十字軍従軍者の唄を歌ったので、子どもたちは皆、抗い難い衝動に駆られて、少年に付き随ったのだ、と。説得も、打擲も、拘束も彼らを引き留めることはできなかった。ドイツからは二万、フランスからは三万の男の子が発した。しかしながら、途中アルプス越えの際、道らしい道も無い山岳地帯で斃れたり、海に行き着いた者たちも恐ろしい嵐で難破し、だれ一人故郷に戻らなかった。

この大規模な行進と同様、一二三七年にも小規模な行進が起こった。こちらは別口で、結果も異なったが、とにかく、何か訳の分からないものが群衆を強烈に捉え、魅了し得る——それについて彼らは自分たちのしばしば全く狂気の沙汰たる行動の理由を説明できない——という証拠にはなる。

右の年の休耕月十五日、エアフルトの町の子どもたちの中に奇妙な舞踏熱が広まった。子どもたちは千人以上の群れを成し、手を繋ぎ合つて大きな列を作り、エアフルトのレーバー門からシュタイガー森へと登って行き、ヴァルタースレーベン村に達すると、今度はそこからアイシュレーベンへ、アイシュレーベンからイヒタースハウゼンへ、更にルビスレーベンを経てアルンシュタットへと向かった。たつぷり四時間は掛かる行程を上機嫌かつ無我夢中で絶えず踊り、歌い、跳びはねながらだった。とどのつまり彼らは夕暮れ刻へとへとにくだびれてアルンシュタットに到着した。夥しい子どもたちが突然やって来られたアルンシュタットの市民は大層訝しんだが、とにかく

彼らを迎え入れた。一方エアフルトの市民は子どもたちがどこへ行ったか分からず、どの家でも子どもたちが帰って来ないので町中大恐慌をきたし、騒ぎは丸一晚続いたが、翌早朝やつとアルンシュタットから報せが来たので収まった。そこでエアフルトの人人はたくさんの馬車を用意してアルンシュタットに赴き、自分たちの子どもらをもてなしてくれたあちらの市民の親切に心から感謝し、子どもたちを家へ連れ戻した。けれども子どもたちはいづれも、こんな遠道とあみちを踊りながら行け、とだれに命じられたのか、言うことができなかつた。——ぐったり疲れて、お腹がぺこぺこにならなかつたら、ずつと取り憑つかれたままで、もつと先まで行つたことだろう。しかしながらこれら子どもたちの多くはその後間もなく死に、残りの大部分もしつこく続く震えを死ぬまで背負しい込んだ。彼らの踊りは命取りだつたわけ。

五八九 むつつりした子ども

一六七七年三月のこと、エアフルトの市有耕牧地に十歳ほどの女の子の姿が見られた。髪はお下げに編まれ、白い服を着ていて、顔色は蒼白そうはくだつた。この子はアーラツハ耕地フエルトとビュンダースレーベン耕地フエルトを歩き回り、独り言を呟つぶいていたが、意味はだれにも理解できなかつた。片手に赤褐色の小さな杖を握り、穀物畑ないし牧草地を歩きながら、それで花を打ち落としたので、子どももの周囲至るところに花が散らばっているのが見えた。このむつつりした子どもに行き逢あつて話を交わそうとしたり、後を追つて素性やらその奇妙な行動の理由を問たひ質たそうとした者は、なんだかひどくぞつとしたので、思い切つてそうできず、すこすこ引き返した。そこで、このむつつりした子どもにどんな事情があつたのか分からず終しまいとなつた。

五九〇 伯爵の口癖

昔シユヴァアルツブルク伯ハインリヒ七世なる御仁⁽¹⁰⁾がいたが、この人は、何か行き過ぎたことをやらかしてしまふと、必ずこんな厭⁽¹¹⁾わしい言い種⁽¹²⁾を口にするのだった。「かようなことをしでかすと、わしは厠⁽¹³⁾で溺れ死にせにやならん」と。さて、こんなことになった。この伯爵は雄雄しい殿で、帝国議会にも馬上槍試合にも数多⁽¹⁴⁾たび参加していたが、一一八六年皇帝⁽¹⁵⁾ハインリヒ六世の臨御⁽¹⁶⁾があつたエアフルトにおける帝国議会に出席した。そこには長期に亘⁽¹⁷⁾つて互いに抗争、領邦を侵攻し合つていたテューリンゲン方伯ルートヴィヒ、マインツ大司教コンラート⁽¹⁸⁾もやつて来た。そこで皇帝と大勢の高貴な諸侯、伯爵、殿輩⁽¹⁹⁾立ち会ひの下、聖⁽²⁰⁾ペトルス教会の広間で、この両者間の調停が図られ、和議が締結される運びとなつた。この広間の床は古くて腐つていたので、かくも夥⁽²¹⁾しい人数の重みに堪えかねて突如崩壊した。ところが下には幾つもの便所から糞尿⁽²²⁾が流れ込む汚物溜⁽²³⁾めがあり、悲惨なことにシユヴァアルツブルク伯ハインリヒとアルンスブルク伯フリードリヒ⁽²⁴⁾はここに顛落⁽²⁵⁾して窒息した。更にヘッセン伯ゴスマール、ツイーゲンハイン伯ゴットフリート⁽²⁶⁾、キルヒベルク城伯フリードリヒ、ベリンガー・フォン・メルディング⁽²⁷⁾ンその他も死んだ。窓のある壁龕⁽²⁸⁾の一つで立ち話をしていた皇帝と大司教は窓の鉄格子にしがみついて助かつた。テューリンゲン方伯も崩落事故に遭つたが、怪我せずに済んだ。まことに悲しいことながらこうしてシユヴァアルツブルク伯の誓言は実現したしだいである。

五九一 ファウスト博士の路地

エアフルトの錠前師横丁シユレツサーガッセの中程に向かつて家家の間に路地が一本あるが、幅がとても狭いので太っちょは通れない。これがファウスト博士の路地で、ファウストウスは、エアフルトに来た時、干し草を満載した馬車でここを抜けた。彼が住んだのはミヒェルス横丁ガッセで、これは大いなる学寮ダス・シユレッセ・コレギウムの近くだった。大いなる学寮では彼自身講義を行き、学生たちにホメロスを解説、学生たちの面前にホメロスの英雄たちの亡霊を出現させ、最後には巨人ポリュペモス(註)まで見せたので、学生たちは仰天して逃げ去った。シユレツサーガッセにはある高貴な貴族の若様が家を借りていた。彼はファウストウスの友だちで、二人はよく一緒にいた。この家は切り妻屋根の上の、錨飾り(アンカー)で知られており、ファウストウスはよく宴会を開き、卓子テイブルに「酒樽サカヅケみたいに」飲み口を開けてそこから葡萄酒ワインを注いだり、屋根から空中に飛び出したりした。そして屋根の穴はそのままだしたが、これは決して瓦かわらで塞げないのだった。やがて町でも田舎でも寄ると触るとファウスト博士の噂うわさで持ちきりになった。この不思議な人物と彼が駆使する伎倆わざづを見ようと近在から貴族たちが町へやって来た。そこで由由しい数の人人が悪魔の術に誘惑されてしまふのではないかと、と危惧きぐされるに至り、一人の修道士が、ファウストウスを改心させよ、との命を受けて彼の許もとに派遣された。弥撒ミサを授かり、祈禱きとうを唱え、悪魔と絶縁するように、との修道士の申し出に対し、ファウスト博士はこう応じた。「できませんな、親愛なるクリンゲ博士(註)。我と我が血で署名いたした契約を破るのはわたしにとつてまことに恥ずべきことですからな。公正とは申せませう。悪魔はやつが約束したことをきちんと守ってくれました。そこでわたしもやつとの約束を守るつもりじゃ」。「なんと、しからは悪魔のところへまいるがよいわ。この呪われた極

悪人、悪魔の盟約者めが」と修道士はかんかんになって金切り声を挙げた。「悪魔とその僕どものために用意された永劫の火の中に失せおれ」。そして大学総長の許に駈つけ、ファウストウスは悔悛を知らぬ、正道に引き戻せぬ罪人でごさる、と告げた。かくしてファウストウス博士は不良学生さながらめでたき町エアフルトから追放されたのである。

五九二 鞭打巡礼者

ドイツの諸地方に鞭打巡礼者たちが現れた折り、眩暈のように頭を襲うこの民衆病はテューリンゲンにも到来した。そして三千を下らない鞭打苦行者の群れがエアフルトへ押し寄せた。彼らは二人づつ組になり、だれもかれも腰の周りに亜麻布を巻き付けた他は素っ裸だった。先頭の者は旗を担いでいた。頭には白い帽子を被り、体の前と後ろには白い十字架を掲げていた。よく知られた鞭打苦行者の唄を歌い、「両手を上げた」十字型に地面へ身を投げたり、跪いたりした。そして鉄釘を差し込んだ結び玉が先端に付いた三条の皮鞭で自らを鞭打つのだった。日中二度、夜に一度この鞭打ちが行われた。こうした似而非信心の宗教茶番劇を演じたのはごく貧しくごく惨めな下賤の輩ばかりで、男も女も子どももいた。金銭を乞い求めることはなかったが、食べ物喜んで受け取った。どこか教会に入るたび、意味もなくわめき続けたので、会衆はだれもいたしかたなく黙りこくった。エアフルトの市参事はこれららくざな無頼の徒の鼻先で市門を閉じさせた。イルファースゲホーフエンの傍で夜営を許されたのは僥倖だった。この鞭打巡礼者の一人が愚かにも、自分は神の子(「イエス・キリスト」だ、と告げるに至った。本当にそうだと信じ込んでいたのかも知れないが、これは飛んだ身の破滅となった。彼は引つ立てられ、エアフルト

の市の立つ大広場でさっさと火刑に処された。その頃エアフルトに住んでいたエアフルトのハインリヒなる詩人がこの時代を唄に詠じ、鞭打巡礼者の流浪性、野人性を十全な言葉で表現している。

疫病ハ権勢ヲ振ルイ、民衆ハ幾千モ斃レ伏シ、
異形ナル者ドモハ半裸ニテ自ラヲ鞭打テリ。

五九三 特殊不治病者

エアフルト市参事会は悪事を働く者たちに大層苦勞していたが、持てる権力を思い知らせ、いかなる犯罪も峻厳に処罰した。かつてグライヒエン伯の持ち城エーレンシュタインにうら若い騎士がいたが、グライヒエン伯爵夫人の腰元の一人である乙女に恋慕し、相手の同意を得て拐かした。娘は若者の鞍尻に乗り、二人は無事に「エアフルトの」市門に辿り着いた。けれども残念ながらもう宵の十時で、門は開かれなかった。そこで彼らは不安に怯えながら馬の向きを変えて特殊不治病者の隔離所を訪ね、入れて欲しい、と頼んだ。もつともその前に騎士は乗馬の手綱を垣根に結んだ。二人は所内に入れてもらえたが、男ばかりだった病者たちは、綺麗な娘を目の当たりにすると、騎士に跳び掛かって縊り殺し、乙女を襲ってあさましい情欲を満たしたので、彼女は死んだ。それから一同は二人の亡骸を埋めた。ところで駈け落ち沙汰が知れると、エーレンシュタイン城とレムデ城から一群の追っ手が出、エアフルトにもやって来て、市門で逃亡者たちのことを問い質した。門番は言った。「いかにも、昨日の夜、

そうというのが来て、中へ入れてくれ、とせがんだけれど、わしゃあ門を開けてやれんかった。なにしろ時刻が遅過ぎたでなあ」。追っ手たちは隔離所へ馬を乗り付け、外から同じことを訊ねた。「わしどもものところへ来る人なんておりはしませぬ。わしどもは癩風患者で特殊不治病者ですからの」が答えだった。——ところがその時隔離所の裏の垣根に繋がれていた駒——不治病者らはまだこれに全く気付いていなかった——が馴染みの人声を聞き付け、腹を減らしていたこともあって、高らかに嘶き始めたのだ。さてよく知っている馬を発見した追っ手たちは所内に突入、周囲を取り囲み、市当局に使いを送った。当局は市の裁判官や審判人らを派遣、彼らは搜索・訊問のあげくおぞましい犯行を突きとめ、判断を下した。その後騎士とその哀れな恋人は聖トーマス教会の墓にきちんと葬られた。一方隔離所の周りにはぐるりと薪が積まれ、藁と粗朶が屋根にまで達し、さながら巨大な干し草山の観を呈した。それから四隅に松明で点火されたので、中の者は一人残らず燃えて灰になった。やがて隔離所の跡には石の十字架が立てられた。その根元の片側には騎士の姿が、反対側には跪いている乙女の姿が刻まれていた。

五九四 短い裁判

エアフルトの市参事会は放火殺人犯に関しては殊の外短い裁判を行った。このように厭わしい所業に及んだ場合はもとより、及ぼうとしたに過ぎなくとも。エアフルト管内の村落の一つドーン村へ男がやって来て、家家を回り、鷺鳥を売ろうとした。しかし農夫らは、この鷺鳥男が間諜ではないか、と疑い、縛り上げてエアフルトへ連行した。男はそこで厳しく訊問され、村の様子を悉く調べ上げて通報するつもりだった、あのパールシュテット村が放火されたのにも関係した、と白状した。それからドーンドルフへ連れ戻され、そこで首を刎ねられ、屍骸は四つ

裂きにされた。

エアフルト自体でも燃え木を担いだ男が現れ、これを持ったまま市門から出て行った。はて、妙な、ということになり、追跡が行われ、男は逮捕・拘禁された。訊問——情け容赦のないものだったことは疑いない——の結果、男は、エアフルト市管内の村村に放火するつもりだった、と白状した。「その後」と年代記は物語る。「男は斬首され、屍骸は野曝しにされた」。

五九五 ジビュレの小塔

エアフルト近郊キリアクスブルク堡壘の下、ゴータへ向かう旧街道の左手に、古ゴシック様式の装飾を施され、石の浮き彫りが付いた大きな石柱が立っていて、ジビュレの小塔と呼ばれている。これには伝説が一つならず纏わっているが、以下が最もよく知られている。若きグライヒエン伯が、ケーフェルンブルク伯爵家の姫君を恋し、結婚の日取りが決められ、それも間近になった。姫君は焦がれに焦がれてその日を待ったが、その日は遂に来なかった。伯爵は二人の従士を連れ、許嫁のため宝飾品を買おうと、城を出て騎馬でエアフルトに赴いたのだが、かねてから彼に敵意を抱いていた界限の追い剥ぎがこれを聞き付け、数人の人殺しどもと共にキリアクス山——当時そこには女子修道院があった——山麓で伯爵を待ち伏せし、短時間の闘い後二人の従士もるとも若殿を惨殺したのだった。ケーフェルンブルクの許嫁の許では大変な悲嘆・心痛が捲き起こった。彼女は城も財産も捨て、あの場所
で伴の者らと一緒に埋葬されている愛する人の墓に十字架を一基、従士の墓のそれぞれにも十字架を一基づつ立て、その近くに丈の高い大きな石柱を建立させ、山上の聖キリアクス修道院で修道女の面紗を被り、毎日山から石

柱へと下りて行き、最愛の人の墓畔で祈りを捧げ、遂に死が彼女をしめやかな傷心から解放したのである。この石柱は今日に至るまでその名を伝えていいる。

五九六 情の深い牡狼

一五五五年の夏のこと、数週間の間エアフルト市の市域を一頭の牡狼が走り回った。この狼は耕牧地にいる人——とりわけ女性——の後を追い、両の前脚を掛け、べたべたし、ぐいぐい押しこくるのだった。もつとも、別に危害を加えたわけではなく、噛まれた者は一人もいなかった。しかしながらだれかれなしに抱きつき、おっそろしくでかい口をかつと開けたので、抱きつかれた方はほとんど死にそうになった。このことは信憑するに足る人人が目撃証言している由。

五九七 ヴォルフラム

エアフルト大聖堂の高い合唱席に、中央祭壇の方を向いて、青銅製の肖像が立っている。少年くらいの大きさの男性像で、ヴォルフラムと呼ばれている。両手にそれぞれ会堂燭台を捧げており、聖物保管係らによれば、この像は異教時代に由来するとか。しかしながらそうではないのだ。ある若い都市貴族が肉欲の大罪を犯した。これを償わせるため教皇は苛酷かつ長期に亘る教会規定の贖罪を彼に課した。丸一年連日、燃える蠟燭を挿した燭台を手にし、祭壇の前に、それも弥撒が執り行われている間、立っておれ、というもの。ヴォルフラムもこれに従った。し

かし全く力尽きて、直立していることがほとんどできなかった。そこで彼のために猛烈な懇願がなされ、やっと罰は免除された。だが彼は償いのため、また自らの悔悛と懺悔とを諸人の記憶に残すため、青銅の像を造り、それから宗規厳格などこやらの修道会に入り、やがてそこでみまかった。

五九八 グライヒエン伯

グライヒエン伯爵家の起源は遙か上代で辿れなくなる。さりながら家系伝承は次の点では一致している。まずローマの貴族だった兄弟二人が故郷イタリヤを去り、ゲッティンゲン近くに今日なおグライヒエン城と呼ばれている二つの城を築き、そこに居を構えた。次いで彼ら自身、あるいは彼らの直近の子孫がそこから移住、ないし敵に追われて、テューリンゲンの地に到来、三グライヒエンと呼ばれているかの三つの城を築いた。これらの城はエアフルト、ゴータ、アルンシュタット三市の間で三角形を作っている。二つは廃墟となっており、その一つは本元のグライヒエン城——ヴァンダースレーベン城と呼ばれている——で、今一つはミュールベルク城である。三つ目の、最も高所にあり、最も要害堅固な城はヴァクセンブルクといい、これにはいまだに人が住んでいる。歴代のグライヒエン伯はテューリンゲン、ヴェストファーレンおよびアイヒスフェルトに多くの所領を持っていた。かの黒騎士ヴィッテキントは偉大なヴィッテキントの親族ではなく、グライヒエン伯爵家の始祖エルンストの孫であり、ルートヴィヒとカールなる二人の子息を持ち、このルートヴィヒの方が初めてテューリンゲンにグライヒエン城を築いたのだそうだ。この高貴な家系の一人ジークムントはケーフェルンブルク伯爵家やアルンシュタット伯爵家と同盟してエアフルト市を攻撃、甚大な被害を蒙らせたので、テューリンゲンの悪魔と呼ばれた。

皇帝フリードリヒ二世が十字軍を催すと、テューリングン方伯ルートヴィヒはその家臣の大方を率いてこれに加わった。そこでグライヒエン伯エルンスト三世も出征し、異教徒を相手に勇猛果敢に戦った。方伯は半途にして薨じ、皇帝はアッコンでイスラム王と和議を結んで帰国した。けれどもグライヒエン伯他はアッコン守備のため残された。ある時沙漠へ騎行した伯爵は虜囚にされ、奴隷として苦役を忍ばねばならなくなった。とうとう庭師として働いていた折り、スルトンの麗しい姫君が彼を見初めて恋に落ちた。そしてまた一緒に捕虜になった彼の従者の一人が姫に彼の身分が伯爵であることを明かした。そこで姫は、自分を妻にして、もろともに逃げてくださるなら、彼を自由の身にし、自分自身と所持の財宝の悉くを差し上げよう、と申し出た。さりながら、グライヒエン伯は故郷に奥方と子ども二人を残して来たのである。もつともサラセンの乙女にはそれが妨げになるとは思えなかった。スルトンの息女の申し出を受ける他自由の身になることは決してできないし、妻と子どもたちにはとづくにこちらが行方不明で死んでしまったと見なされている、と考えた伯爵は、教皇が重ねての婚姻を宥恕してくれるかも知れない、それにこの異教徒の美女は、伯爵様がお愛しいのでキリスト教徒になってもよろしゅうございます、と言っていることだし、と希望を持った。逃亡は成功した。サラセン女性は莫大な財宝を携行した。愛し合う二人と従者はイタリアに到着、ローマに赴き、スルトンの姫君は洗礼を受けた後、正妻として伯爵に娶された。それから三人はテューリングンへ旅を続けた。伯爵は先だって奥方の許に急行、奥方は死んだと思っていた背の君を大喜びで迎え、彼から全てを打ち明けられた。彼女は、自分には父を連れ戻してくれた異国の女性に感謝してこれを祝福、妹として愛することを約束した。次いでこちらを目指して近づいているサラセン女性を迎えに出、城山の下で賑賑しく歓待、その場所を喜びの谷と命名した。この名は今日に至るまで使われている。三人の夫婦は和氣藹藹として睦まじく共に暮らした。もつともサラセン女性に子どもは授からなかった。かかる出来事の

夥おびただしい証拠は言葉の本来の意味で存在したし、いまだに存在する。ヴァンダースレーベン村を眼下に見るグライヒェン城には今世紀〔十九世紀〕の二十年代まで三人用寝台があったし、またこれよりも大事なのはエアフルト大聖堂に現存する墓石である。墓石には二人の奥方に挟まれた伯爵の図が刻まれており、その装束は皇帝フリードリヒの十字軍時代のそれと完全に合致する。女性兩人の身なりも全く同時代のドイツ風である。更に同所では契りアクトを交わした三人の遺骨、とりわけ頭蓋骨が見られる。グライヒェン城からフロイデントールへはトルコ婦人の道なる舗装道路が下っている。なにせ東洋渡来のもは当時なにもかもトルコと呼ばれたからで。トンナにあるグライヒェンの館ではサラセン女性のトルコ纏布ターバン(墓石では認められない。二人の女性は黄金の飾りのある赤い環状冠を被っている)と黄金の十字架が見られる。ファルンローデファルンローデに保存されている壁掛けにはこの物語が織り模様で描かれており、オーアドゥルフの町の教会には彫刻があり、城そのものには、ピルモントの館、エーレンシュタイン城、エムレーベン近郊ツォルツェルの分農場ヴェルニングスローデなど随所と同様、三人用寝台がある。

五九九 殺しの庭

グライヒェン城の下、あの喜びの谷フロイデントールの近くに、以前は何本もの老樹の木蔭こかげに覆われていた空き地があり、殺しの庭と呼ばれている。ここは決闘に使われる場所だったのである。もう百年以上も経つが、二人の若者がアルンシュタットの美女に同時に喧嘩けんかを売った。喧嘩の種は賭け事の際に容易に見つかった。こうして殺しの庭でお互い拳銃ピストルで決闘ということになった。不吉な予感があつてか、なくてか、女性は決闘当日の朝、恋人に慣わしである婚札ヒストルを着

贈った。——これは死出の肌着となった。恋人はこれを纏まとって葬られた。最初の一発で斃たおれたからである。その後乙女は故人のため歎フイレンクびの谷——今や彼女にとつて哀ヤンマーしみの谷となったわけだが——の、自らが原因で彼が死を迎えたその場所に、あのケーフェルンブルク伯の姫君ジビュレと同様、十字架を一基立てさせた。この古い十字架は多分まだ立っているかも。一八二〇年にはまだあつて、それには故人の名と以下のような銘が刻まれていた。

クリステイアン・

フリードリヒ・カール・フォン・ローゼ殿は

一七一七年弥生さんがつ月九日

ここにて殺されたり。

キリストの血、我を地獄より救いたまえり。

復讐ふくしゅうを

我が血は

復讐を求めて

叫ぶ。

我、我が事を

神に委ゆだねまいらす。⁽¹⁸⁾

六〇〇 アウグステインさん

ゴータのヤーコプ広場に面して石像が飾られた石造りの建物がある。小さい子ども二人に小型丸白麵麩を差し出している男の像で、殊の外子ども好きだったアウグステインさんの姿を写したものである。この人が貧しい子どもたちに何かを与えるのはしよつちゆうで、町へ出る時には必ず衣囊一杯贈り物を詰め込んでいた。まるで湧き出るといった具合で、衣囊が空になることは決してなかった。アウグステインさんは、このように子どもたちを愛し、子どもたちもアウグステインさんを慕う中、八十歳になった。いよいよ臨終を迎えた時、小さな男の子が二人、その寢床の傍らにいて、アウグステインさんの目を閉ざしてやるのが見られた。そしてその墓の上にも三日の間小さな男の子が一人坐っているのが見られた。この子を知っている者はだれもいなかった。

六〇一 フリーデンシュタイン城の財宝

ゴータなるフリーデンシュタイン城——城内では公爵家の先祖の女性が彷徨い歩く——に家扶職を務めるエツカートという名の兵卒身分の男がいた。彼は時折宮廷煖房部屋の長椅子の一つで夜を過ごしたものの。宮廷の祝宴などが延延と続き、夜遅くまで忙殺された時にはとりわけそうだった。ある時男はこの部屋で亡霊を目にした。亡霊は、随いて来い、と手招きした。エツカートはまだ燃えていた灯火を手に取り、怖がらずに亡霊の後に従った。亡霊は幾つもの通路を抜け、とある穴蔵に彼を連れて行った。そこには金貨が溢れんばかりに入った大きな釜があ

り、亡霊は、手を出して財宝を取れ、と合図した。けれどもエックカートは驚愕のあまり宮廷煖房部屋へ逃げ帰った。亡霊は追つて来て、引き返すよう身振り手振りで説得を試みた。財宝の三分の一は自分のために取り、後の三分の二は君侯にやれ、というのである。しかしエックカートは相手にしなかった。翌朝彼はこの出来事を殿である公爵フリードリヒ二世に打ち明け、この件に関してはどうつかまつればよろしいかご下命くださいますよう、と言上した。公爵は、どうこうせよ、と申すつもりはない、今後亡霊に同行するつもりなら、自らの責任で進退いたすがよい、と答えた。それから暫くして宮廷煖房部屋に錠が下りていることが分かった。そして家扶の姿がどこにも見えなかった。人人は思い切り強く扉を叩き、思い切り大声で怒鳴り、とどのつまり扉を打ち壊して開けた。家扶は死んだようになって卓子に頭を載せていた。やがて正気になったものの、何一つ聞き出せなかった。ただある聖職者にその後こう話した。いわく。亡霊はまた現れ、まことに悲しげに贈り物の財宝を回収するよう哀願した——思うに、ゲホーフエンの夫人にあの亡霊が頼んだのと全く同様だった（DSB四一九）のであろう——。怖がることはない。七面鳥のような姿の魔物が彼の両脚の間を通り抜けるだろうが、何も危害は加えない。財宝の値打ちはターラー銀貨四万枚だ。そう言ったが、自分は、そんなことはやらない、七面鳥も焙り焼きになって皿盛りで出て来るなら珍重するが、亡霊が仄めかしたような代物はご免蒙る、と応じた。すると亡霊はひどく悲しげな、ぞつとするような身振りをした。そこで自分、エックカートは完全に気を失ってしまった、と。聖職者は「もう宮廷煖房部屋では眠りなざるな。肥えた七面鳥を一羽焙かせなされ。そして元気づけに葡萄酒を一壺添えるのじゃ。そうして欲しければわしも喜んでお相伴いたそう」と助言した。エックカートはこれを実行、以来亡霊に悩まされることはなかった。亡霊が別の男を見つけていなければの話だが、財宝はまだそのままかも知れない。エックカートはその後まだまだ少なからず七面鳥料理に見参したが、その際しばしば自分の体験を語った。そして立派な

生涯を送り、ゴータで公爵家令として極楽往生を遂げた。

六〇二 テューリンゲンの洪水

凄まじい大洪水が何度もテューリンゲンの邦を襲った。最も惨たるものの一つは一五五八年皐月十七日の出水である。地は震え戦き、天は車軸のごとき豪雨をゴータとランゲンザルツアの間に拡がる平野に降り注いだ。グライヒェン伯領の村ブルクトンナではほぼ四十戸の家屋と納屋が基礎から壊滅し、災害後これらがどこにあったものやら跡形も無かった。逞しい樹樹も根こそぎとなつて押し流され、ブルクトンナだけで四十六人もが遭難した。掠られた家家の一つ——羊飼いの住まい——には前日出産したばかりの産婦が床に就き、赤子は舟型容器に寝かされていた。家は倒壊、母親は死んだが、新生児は容器に入ったまま何の怪我もなく九十歩離れた林檎の樹の枝に引つ掛かり、健やかにしているのを発見された。村の各所で水は男の背丈三人分ほどの高さにまで達した。ある男は溺れながら「されば我ら聖霊に冀う」を歌つたし、またある男は沈みながら水から片手を挙げて、まだ生きている人を祝福した。少年が一人、下男が一人、秣切りが一人、高く聳える梨の樹にしがみつき、命を拾つた。ある田舎回りの担ぎ本屋——今日現代風に申せば巡回販売員——は梁にまたがり、耕地にして五つほどの距離を運ばれ、自分も本を入れた背囊も無事安穩に乾いた場所へ辿り着いた。

しかしながらある年の洪水には何もかも無力だった。テューリンゲンの邦では空前絶後のこの洪水が起つたのは一六一三年五月二十九日のこと。四方八方から嵐が襲来、全土を覆い尽くし、互いによつかつて荒れ狂つたので、最後の審判の日が近づいている、とだれもが信じ込んだ。これはザーレ川からハールツ山地、ヴェラ川からエ

ルベ川にまで及んだ。イルム川の水嵩は十肘尺から十二肘尺もの高さに増え、ヴァイマルでは四十四戸の家屋と納屋を押し流し、七十四人の人間と二百頭の家畜を溺死させた。同市のケーゲル門には洪水がどれほどの高さにまで達したかを示す黒い線がまだに記されている。上ヴァイマル村では十四人が溺死、家屋二十二戸が倒壊した。メリンゲンでは洪水が二十二人を掠い、家屋三十六戸を廢墟とした。ある牛飼いの妻は四人の子どももろとも溺死したが、助かった父親はこんな会話を耳にした。末の子が、自分の小さな寝台がもうぶかぶか浮き始めた時、母親に「溺れちゃったら、あたしたちも天国へ行くの」と訊ね、母親が「そうよ」と答えると、「分かった、じゃあ溺れてもいいや。お休みなさい、父ちゃん、母ちゃん」と叫んだのだ。幾つかの村ではほとんど全部が流され、立っていたのはごく僅かな家に過ぎなかった。ゴータでは館中の窓の内辛うじて一つが残っただけ、畑の穀物は全滅した。ミュールハウゼンの被害は甚だしく、ランゲンザルツァに嵐と洪水が齎した損失はここだけでも金貨一噸と見積もられた。そしてテューリンゲン邦全土では数百万ターラーに上ったと考えられる。イエナとマクデブルクの間だけでも二千人以上が溺死ないし倒壊した家に埋められた。この恐ろしい溢水は後に「テューリンゲンの劫罰洪水」と呼ばれ、神の審判の罰が下ったのだ、と見なされた。ある一語にこの処罰の年のローマ数字を合わせたものが含まれているのでなおさらである。その語とはすなわち I V D I C I V M (M D C X I I) である。

六〇三 ネーゲルシュテットの草地

ランゲンザルツァと大ファルグーラ村——ヴァインフリート・ボニアチウスが教会を建立、キリストの教えが真実である徴として携えた杖を地中に突き刺すと、それが緑なす樹となったかの場所——の間にネーゲルシュテット

村⁽²⁰⁾があり、その近傍に草原が拡がっているが、ここには悪い噂⁽²¹⁾があり、ネーゲルシュユッター・ヴァイデの草地と呼ばれている。しばしばそこへは亡霊⁽²²⁾が呪封されたのだ。昔ランゲンザルツァに風変わりな博士が住んでいた。博士は世俗との関わりを断っていたが、下僕の手を通じて貧民たちになつぷり施しをした。年老いてとうとう死んだが、もしかすると生きるのにうんざりしてもいたか。葬儀が行われることになり、柩⁽²³⁾は既に玄関の間に置かれ、聖歌隊が家の前で慣わし通り挽歌⁽²⁴⁾を歌っていた。するとなんと、亡くなった老博士が白い寝間帽子⁽²⁵⁾を被り、緑色の眼鏡を掛けて二階の窓から顔を覗かせたのである。泡を喰った一同は慌てて家に入り、柩を開いた。——が老人はしゃちこぼつて中に横たわっていた。柩は急遽持ち上げられ、教会墓地へ運ばれたが、博士の方はまたしても、ユダヤ人の葬式であるかのように人人が柩と一緒に走って行く様⁽²⁶⁾を、のんびり見送っていた。以来正午の鐘が十二時を告げてから一時まで博士の亡霊が窓から顔を覗かせ、だれもこの家に入ろうとしなくなった。そこで祓魔師⁽²⁷⁾が招かれた。これはアイヒスフェルトのイエズス会士で、この人は馭者⁽²⁸⁾の背負い籠⁽²⁹⁾のような物を持って来て、その中に亡霊を呪封、ネーゲルシュユッター・ヴァイデへ運んだ。その後一週間してほぼこんなことが起こった。村の許婚同士⁽³⁰⁾が町へ出て婚礼の買い物をするため草地を通った。けれども金が充分ないので、娘の方がこんな願いを口にした。「ああ、あたしたちに宝物が見つければねえ、そうすりゃ心配事が一遍に無くなるんだけど」「まったくだ」と男の方。「なんか宝物が入った物がありやなあ」。すると柏⁽³¹⁾の古木に籠が見えた。籠は綱でしつかり括⁽³²⁾られ、先の折れた大枝に吊り下がっていた。男はふざけて叫んだ。「やったあ。ここにおれたちのお宝⁽³³⁾が下がってら」。籠は急いで木から外された。なんとも重い籠だった——金が入っているに決まっている。そこで道からいくらか逸⁽³⁴⁾れたところで開けることになった。ぎゅっと結ばれた綱を骨折って解き、蓋を開くと、なんとまあ、婚約者たちは千一夜物語の最初のお話に登場する漁師⁽³⁵⁾みたいなことにあいなった。ほら、あの古い湯たんぽを網で引き揚げ、開けてみたあの漁師

ですよ。籠の中から煙が立ち昇った。阿魏(あゑ)と緞草(かんのそう)と麝香(じやくこう)が混じったような匂いがした。そしてこの煙はごくごく年寄りで背中に瘤(こぶ)のある小男の姿に変じた。これはあのランゲンザルツァの博士だったわけ。博士はとても愛想良くこう言った。「いやあ、ありがとよ、若いお二人さん。わしを籠から救い出してきてさ。あの糞(くそ)忌(い)しいイェズス会士めがわしを封じ込めたのじゃ。さ、礼の徴(しるし)にこのグルデン金貨を一枚受け取っておくれ。これでおまえさんがたの欲しい物を買うがよい。この金貨はいつもまたおまえさんがたの手許(てもと)に戻って来る。だがの、この礼の贈り物を決して迂闊(うかつ)に使ってはならんよ」。こうして婚約者たちは金持ちに、幸せになった。さて老博士の亡霊は元の家には帰らず、ネーゲルシユテッター・ヴァイデに留まり、時折姿を見せた。類似の伝説がヴァイマル近郊の森ヴェービヒトに纏(まと)わっている。この森も不気味だということである。殊(こと)にこの闊葉樹林(かつちゆうじゆりん)の下手の端、ティーフルトへ向いている辺りにはイルム川の女の水(みづ)の精(せい)が現れる。彼女の黄金(こがね)の髪は輝いて、人人を水中に誘い込む。

六〇四 血の濠(ほり)

一五五五年干し草月六日のこと、ヴァイマル(ヴァイマル)の城の壕(ほ)が年金局の後ろのある場所で湯が滾(なま)るようにごぼごぼ湧(わ)き立ち、溢(あふ)れ始めた。水の色は肉色で、時折血のように真紅(しんく)になったので、城壁に映る照り返しさえ焰(ほのお)のように赤く見えた。こうした湧き立ちは時折どこか一箇所、時折幾つもの場所で起こり、静かな濠(ほ)の真ん中で勢いよくどつと噴出したりした。けれども水底に泉があったわけではないのである。これは三日目までずっと続いた。三日目に濠を放水してみたが、湧き立ちと色の原因は突きとめられなかった。しかし地面には血の滴(しずく)のようにとろりと溜(たまる)まったし、樽(たる)に入れて保存しても水は赤葡萄酒(フレイシッ)のように澄んだままだった。当時エアフルトのある泉がやはり血紅

色になり、ヴァイマルのある野道で泉が湧き出した。これは農民戦争の前年にも血に変じたことがあるのだが、またしても赤い水だった。テューリンゲン邦のある泉も同じ様相を呈した。こうしたことが何を意味するのかその頃は示せなかったが、後に明らかになり、ああ、そうだったか、と驚愕した。グルムバハ事件が持ち上がったのはこの時代なのである。この事件はテューリンゲンの地で少なからぬ者の命を奪ったし、兄弟である二人のザクセン公、ヨーハン・フリードリヒ平凡公とヨーハン・ヴィルヘルムの中を致命的に離間し、善良にして信仰篤く、友として信実ある君侯だった前者を終身禁錮の憂き目に遭わせたのだ。

六〇五 スウエーデンの小さな鐘

ヴァイマルの市教会の鐘楼に古い、ただし鋳直されたことのある小さな鐘が下がっている。これは夜中の二時に突然警鐘を鳴らし始めたことが再度ある。一度はかのアルバがテューリンゲンで暴れ回ったイスパニア戦争の折。この時イスパニア兵どもはヴァイマル市を奇襲しようと企んだのだ。しかし彼らはこの警鐘を耳にし、市民が武器を執ったので、陣営を引き払って立ち退いたのである。二度目は三十年戦争の際だった。スウエーデン軍が夜を籠めて思い掛けなく市に接近、古い城背後の耕地——ここはいまだにスウエーデン堡壘と呼ばれている。エックタースベルクの麓という者もあるが——陣を張った。この時公の若殿ヨーハン・エルンストの許に白装束のちいさな男の子がやって来て、公子を呼び覚まし、「とつても怖いことがあるよ。すぐお父さんに教えてあげて」と言った。同時に鐘楼からあの小さな鐘が高らかに鳴り出した。そこで市民らは目覚め、武装して警備に出勤した。なにしろスウエーデン軍と来たら、友邦でも劫略をこととする連中だったから、ヴァイマルでも容赦しなかっただ

ろう。雄雄しい兄弟、ザクセン⁽²⁶⁾ハヴアイマル公ヴイルヘルムとベルンハルトはスウェーデン王グスタヴ・アドルフと同盟を結んでいたのだが。いや、それどころか彼ら二人は王の名高い将帥だったのだが。この警鐘——天使に鳴らされた由——を記念して、後に、さよう二世紀も経ってからだが、毎夜二時にスウェーデンの小さな鐘が暫く鳴らされたことがある。もつとも今は、他の少なからぬ古い習慣同様、取り止められている。けれどもとりわけ多くの村村ではありがたい思い出ではある。

六〇六 イエナの七つの奇蹟

イエナ⁽²⁷⁾は大学とテューリンゲン葡萄酒と七つの奇蹟で名高い。とりわけこの七つの奇蹟は前代には大いに賞讃賞揚され、あらゆる言語の韻文で述べられた。内最も有名な韻文は左記のごとし。

祭壇、頭、龍、御山、橋、狐塔、
うあいげるノ家、コレゾいえナノ七奇蹟ナリ

主教会の祭壇は奇蹟として尊ばれた。祭壇の下に開いた拱門と通路があるからである。こんなものは世界のどの教会にもまず無かる。祭壇の下をすれすれに干し草や堆肥を積んだ荷車が通過できる。頭というのは市庁舎の時計附属の工芸作品で、これは時計が正時を打つたびに大口開けて欠伸をする仕組み。この愉快なおちらけのお蔭で、ご同様暇をもてあましている蕪頭は、頭のこの欠伸から、この市は昔ゲエナといったのかも知れん、と穿鑿

したりできた。龍⁽²²⁾は人工の怪物で骸骨⁽²²⁾。大学図書館にある。沢山の犬の頭を持ち、黙示録⁽²²⁾の獣に似ている。御山⁽²²⁾はハウス山⁽²²⁾——グライス山ともいう。橋⁽²²⁾は幾つかの特徴を持つザール橋⁽²²⁾。橋が新しかった時代にはまさに奇蹟と思われたろう。狐塔⁽²²⁾は周知のもの。巨人⁽²²⁾の指なる名もある。これについてはこんな巨人伝説が——。その巨人は実の母親を打った。すると山が崩れ、巨人を埋めた。しかし巨人は墓の中から脅すように人差し指を突き出した。これがあの巨大な高い塔なのだ、と。ヴァイゲルの家⁽²²⁾はこれらいわゆる奇蹟全ての中で最も見る価値があるものだった。この家では明るい日中でも星を見ることができたし、下の階から上の階まで階段を使わずに昇れた。

六〇七 狐塔と狐という名

今日までもう長いこと狐塔⁽²²⁾と呼ばれているこの塔はこの地方を所領としていたキルヒベルク伯爵家の発祥の城の物見塔だった。城の名がキルヒベルクなのは、その昔聖者ポニファチウスが建立した教会⁽²²⁾を下に見て聳⁽²²⁾えていたからである。往古この塔はさる極めて高貴かつ著名な客人の宿となったことがある。ザクセンのあらゆる諸侯の尊貴な源流、大辺境伯⁽²²⁾と添え名されたヴェッティン伯コンラート⁽²²⁾である。グロイツ⁽²²⁾とユブ⁽²²⁾ヴィブレヒト⁽²²⁾がマイセン辺境伯領を我が物にしようとし、その正当な君主、若き辺境伯⁽²²⁾ハインリヒは毒殺されたのだ、との風評を流した。こうして極めて錯綜⁽²²⁾した、訳の分からない私闘⁽²²⁾が起こった。ヴェッティン伯コンラートはこれに関わらずにいることはできなかった。自身マイセン辺境伯に名乗りを挙げていたとあつてはなおさらである。彼は、マイセン辺境伯小ハインリヒは決して自分の近親などではなく、ある料理番⁽²²⁾の倅⁽²²⁾なのに拘⁽²²⁾り換えられたのだ、と主張していた。この結果両者間に深刻な私闘⁽²²⁾が勃発⁽²²⁾、コンラート・フォン・ヴェッティンはハインリヒの虜囚⁽²²⁾になった。ハインリヒは

母と自分がかねてコンラートから浴びせられた誹謗に苛烈な復讐をした。頑丈な檻に入れたコンラートを、さながら珍奇な鳥でもあるかのように、かの高い物見塔の外に吊り下げたのである。もしハインリヒがその後間もなく子のないまま亡くなって、唯一かつ正当な跡継ぎであるコンラートがそれによって自由の身にされなかつたら、もしかするとこの一門の始祖はあえない最期を遂げていたかも知れない。

この物見塔が廢墟と化すと、イエナ大学の学生たちはしばしば楽しい遠足の目的地にした。ザクセン公爵家によって大学が創立された時、ある学者がナウムブルクの学校からイエナへギリシア語教授として招聘された。ブリュゾマンなるこの御仁は奇妙な小男で、夏冬通して狐の皮の縁飾りが付いたちやいな外套を羽織っていた。ラテン語学校から来たというので、大学生連はこの人を学校狐と綽名した。そしてやがて彼らはラテン語学校の在学生、ないし卒業生を全てこう呼ぶようになった。大学生たちはそれ以前新入生を羽根洋筆——学校生徒の筆入れから由来——と称してからかい、苛めていたのだが、今度は新入生を狐と呼んでからかい、苛めるようになった。こうしたお遊びを連中は野外のお気に入りの場所で行ったのだが、キルヒベルク城の高嶺はこうした場所の一つだった。かくして物見塔は狐塔の名を得、初心で年若な小狐たちはかわいそうにたびたび虐待を受けたしだいである。

六〇八 イエナの降誕祭の夜

かつてイエナでこんなことがあった。ヴェーバーというツヴェイカウ出身の大学生——ライプツィヒ大学にも籍を置いたことがある——が若い衆何人かと羊飼一人と組んでとある小屋——ここにはしばしば白衣の乙女が姿を現し、なにやら宝を残したりするという噂があった——で悪魔を召喚し、財宝ないし幾枚かの子爵し銭を入手しよう

ともくろんだのである。しかしこうした芸当の結果は慘憺たるものだった。この連中は他の呪具に加えファウスト博士の呪文書（註）を調達し、一七一五年の降誕祭（註）の夜に例の小屋に集まったのだが、翌朝だれも町へ帰って来なかった。午後、大学生は完全に失神して意識無く、羊飼いてもう一人、農夫が死んでいるのが小屋で発見された。この事件がその筋に通報されると、大学生を旅館「黄色い天使」（註）へ運び下ろしてから、屍骸（註）の傍に三人見張りを置き、との指示があった。三人の見張りには更に二人が志願して加わったが、この二人は夜遅く町へ下りて来た。残された三人の若者が一緒に坐すわって、寝ずの番をしていると、小屋の扉が猛烈に引ひつ搔かかれ、男の子ほどの大きさの化け物が入って来た。これはあちこち動き回ってから、扉を凄まじい勢いでばんと閉めたので、微塵みじんに砕けたかと思われたほどだった。翌朝若者たちは死んだようになって屍骸の傍に横たわっており、内二人は実際息を吹き返さなかった。三人とも肌（註）に青い斑点と青い縞（註）が何箇所も付いていた。この話は周辺で大変な騒ぎを捲まき起こし、書き留められた記録、印刷に附されたものは数多い。他でもない、イエナの降誕祭（註）の夜の悲劇と呼ばれるのはこれである。

六〇九 大学生の受難劇

イエナの葡萄酒（註）の小屋の悲劇よりもっと恐ろしい悲劇が一七一六年ハレで演じられた。舞台は居酒屋の「緑帽子」（註）、時は聖なる受難週（註）、演じたのは遺憾ながら神学部（註）の学生たちだった。この連中は集まって割り勘の宴会を催し、何人かが悪魔に吹き込まれて、我らが主（註）、救世主の受難の様を演じよう、と思いついた時には、もう昼夜ぶつ通（註）して坐すわり放はなした。彼らはこの放埒無（註）厭（註）な茶番狂言に居酒屋の亭主と給仕役のその二人の娘も引ひつ張り込んだ。学生たちはまず仔羊（註）を焙やかせ、復活祭仔羊（註）と命名、これを平らげて晚餐（註）とした。晚餐の最中彼らは一人

ひとり順に麦酒の杯を聖杯になぞらえて飲み、大根の薄切りを聖餅の代わりとした。かてて加えて神聖な聖体制定の言葉(註)を瀆神的に歪め、逆さまに唱えた。それからこれをやった男は、他の者たちから「ゴルゴタの丘へ歩むキリストがそうされたように」罵られ、嘲弄され、戯れにはあるが鞭打たれ、赤い外套を肩に掛けられた。次いで、板切れを急いで釘付けにした十字架に両手を拡げて縛り付けられ、下ろされると、捏ね桶の中に埋葬された。——しかしながら神はご自身をからかわせてはおかない。神の審判は恐ろしい。悪魔は出現しなかったし、亡霊や化物は姿を見せなかった。ごく僅かな学生がその場から立ち去った。——これら僅かな数の学生がいなくなった後、嘆かわしい悪人どもの内十一人が死んだ。居酒屋の亭主も死んだ。その二人のうら若い娘も死んだ。それから居合わせた他の者たち——中には我らが御主、救世主の役を演じた不吉な男もいた——はそこに散らばって、瀕死の病の床に臥したり、絶望して狂乱したり、一部は不治の重い鬱病に罹った。

訳注

- (1) い龍(いりゅう)とつまらん龍(つまらんりゅう) gute und arme Drachen. 原文は上記の通り。
- (2) 干し草締め付け柱(かんしそうじめつけちゆう) Wiesebaum. 干し草を荷車に満載して運ぶ際、干し草の山の上に縦長に置かれる長大な支柱。DSB三三注参照。
- (3) 窓の楔型(まどくわぎ) Fensterzwickel. 窓枠に鉛を嵌め込む際、丸い窓ガラス同士の間の部分を埋める三角形のガラス。しかし龍がここから入るといのは分からなく。
- (4) 牛酪製造の攪乳桶(ぎゅうがくせいぞうのかきりかづ) Butterfässer. 単数形 Butterfaß. 以下に「穴蔵に埋め込まれた壺」in den Kellern eingegrabene Topfeという記述があるが、訳者には理解できない。ミルクという素材の性質上、バター(バター)の製造を終えるたびに清浄に洗い上げなければならぬはず。実際訳者が南西ドイツで見た数種の木製「ブッターファス」は——地方が違う、と指摘されればそれまでだが——埋め込まれるようにはできておらず、底辺は平らである。また「バター製造は金曜のみ」という意味の記事があるが、それで良いのだろうか。ミルクは涼しい穴蔵でも腐り易いので。

- (5) 立葵 なまめか *Eibisch*. 学名アルタエア *althaea* がギリシア語「アルティン」*althēn*(癒やす)に由来していることでも分かるように、古来薬草として用いられた。しかし草丈一—三メートルの草であり、これで攪乳桶が作れるとは思えない。識者のご高教を俟つ。これすなわちお金窟龍で、しばしば人間の顔をして二本足で徘徊することもある *das sind die Gelddrachen, die auch oft auf zwei Beinen mit Menschengesichtern umgehen*. 人間の姿に化け、魂と引き替えに富を約束する悪魔を指しているのかも知れない。ヨーロッパの民間信仰では龍はしばしば悪魔と同一視される。
- (7) 赤山毛櫛 あかやまけし *Rotbuche*. ヨーロッパブナ。学名 *Fagus sylvatica*。最大五〇メートル、幹の直径三メートルにもなる。通常二五—三五メートル、幹の直径一・五メートル。樹齢百五十一—二百年、三百年に達する樹もある。
- (8) 白髪の男の小人 *ein graues Männchen*. かつてこの財宝を蓄えていて呪われた城主に仕えていた侏儒なのか、超自然的存在の小人なのか不明。
- (9) アイリン・T・ナイトレイ *Iren T. Knightley*. 未詳。
- (10) フェとエルフの神話学 *Mythologie der Feen und Elfen*. 本来のタイトルは英語であろうが、いずれにせよ未詳。「フェ」は(フランス語)、「エルフ」*elf* *Elf*(英語、ドイツ語)はどれも「妖精」の意。
- (11) 家のちびさん *Heimchen*. 蟋蟀をも指し、小人の一種をいう。なお、英国の作家チャールズ・テイケンズの短編『炉辺の蟋蟀』*The Cricket on the Hearth* (1845) は、蟋蟀が幸せを齎すと信じてドイツと共通の——民間信仰をテーマにしている。
- (12) ツイル・ツイル・ツイルとごう鳴き声 *zirpen*. 「ツイルバン」*zirpen* は擬声語動詞。
- (13) ちび小人、家ちび、地中小人 *Butzelmännchen, Heimele, Erdmännle*. 原文は上記の通り。
- (14) グローベンゲロイト *Grobengeuth*. 現テューリンゲン州ザーレ＝オルラ郡の小村。
- (15) アルテンゲ湖 *Alteggese*. 未詳。
- (16) 姫茴香 *Kümmel*. 姫茴香の、種子のように見えるが果実である通称キャラウエイ・シードは甘い香りとはるる苦い味を持ち、香辛料として用いられる。若葉や根も食用になる。キウムメル(＝キャラウエイ)、ティルDIII(＝イノンド)、茴香 *Fenchel*(＝フェンネル)、西洋当帰 *Angelika*(＝アンゼリカ)、和蘭芹 *Petersilie*(＝パセリ) など強い芳香を放つ香料食用植物はドイツでは昔から魔物、魔女、魔法を祓う効用がある、とされて来た。小人、男の樹の小人や女の樹の小人、男の森の小人や女の森の小人はキウムメル・プロートで追い払える、という広く普及している言い伝えはこれに基づく。彼ら小人族は「姫茴香麵麩、辛苦の種」*Kümmelbrod macht Angst und Not*. とか「姫茴香麵麩、あたしは死んじやう」*Kümmelbrod, unser Tod*. と叫ぶ。
- (17) ゲフェル *Gefell*. フォークトランドにある現テューリンゲン州ザーレ＝オルラ郡の小都市。現バイエルン州、ザクセン州からも

- (18) 遠くない。
ある日家で新しく麵麩めんこを焼いた。Eines Tages, als sie daheim frisch gebacken hatten. 中世、領主（貴族や修道院）の支配下に
あつた領民は、領主の粉挽き小屋で穀物を粉にすることを強制された——自前の碾き臼の使用は禁止されたのである——ばかりか、
領主のパン焼き竈でパンを焼き、その代償（金銭ないし焼いたパンの一部）を差し出さねばならなかったが、近世・近代となつて
も、パン屋が近くにある都市の住民ならいざ知らず、田舎住まいの人人は自家の竈で、あるいは村落共有の竈で、何日分か纏めて
パンを焼いた。古く、硬くなつたパンを素材とするとするレシピがいまだに色色ある所以。焼きたてのパンが旨いことはいうまでもない
し、こうした大切な食料を友だちの精に贈るのは、庶民の娘としては並並ならぬ好意である。
- (19) 葉っぱターラー銀貨 Laubtaler. 一七二六年以降フランス王国で鑄造された月桂樹の葉を文様とした銀貨「月桂樹エキュ銀
貨」Ecu aux Lauriersのこと。六リーヴルの価値があつた。十八世紀ドイツでも広範囲に流通、その文様から「葉っぱターラー」
「Laubtaler」、「月桂樹ターラー」「Lorbeertaler」、「羽根ターラー」「Federtaler」と呼ばれた。
- (20) ゲスジッツ Gossitz. 現テューリンゲン州ザールホルツ郡の高原にある村。
シュリンゲン谷にある自家の森の草原で auf ihrer Holzweise im Schlingengrunde. 写真で見る限り、シュリンゲングルントは両
側に森があるなだらかに傾斜している帯状の草地である。
- (21) 三王節の宵 Dreikönigsabend. 一月六日（公現祭）の宵。十二夜の最後。
- (22) 灯り部屋（＝紡ぎ部屋）Lichtstube. DSB五二九注参照。
- (23) ロイテンベルク Leutenberg. 現テューリンゲン州ザールフェルト＝ルードルフシユタット郡の小都市。「七つの谷の町」Stadt
der sieben Täler と呼ばれる。
- (24) 騎士の荘園 Rittergut. 「騎士の家屋敷」Rittersitz と呼ぶ。DSB五三七注参照。
- (25) ルール（＝ルーラ）のあの帽子小人のように、wie jene Hüthen in der Ruhl. DSB四六一参照。
- (26) 乾酪鉢 Käsenapf. 成形するためチーズを入れる容器。
- (27) 莫卜根 Bilsen. 「ビルゼ」Blise は茄子科の毒草莫卜（ひよす）のこと。
- (28) ビルゼンシユニッター Bilsenschütter. DSB五五五で見る限り、人間である「ビルゼンシユニッター」——すなわち妖術を
使つて、仲間の収穫を奪おうとするこうした貪欲な農夫の遣り口は理解できない。十分の一の穀物はどうやって自分の物にするの
か。その過程で正体がばれては元も子もないわけだが。
- (29) キリスト昇天祭、洗礼者聖ヨハネの祝日、三位一体の祝日に an den Tagen Himmelfahrt, Johannis und der heiligen Dreieinigkeit.

- キリスト昇天祭 *Christi Himmelfahrt* は復活祭から数えて六回目の日曜日後の木曜日——四月三十日から六月三日まで移動。洗礼者聖ヨハネの祝日 *Johannistag* はクリスマス半年前——六月二十四日。三位一体の祝日 *Trinitatis* は聖霊降臨祭の一週間後——五月下旬から六月上旬まで移動。
- (31) この半ば *zur Hälfte*. *DSB* 五五五によれば十分の一の半は。鎌を両足の親指に結び付け *die Sichel an die großen Zehen*. *DSB* 五五五によれば右足の親指の半は。賢い男の許へ *zum klugen Mann*. かつした場合、普通昔話・伝説では「利巧な」*klug*ではなく「賢い」*weis*を用いるので、後者に相応しい訳語とした。昔話・伝説に登場する「賢い男」「賢い女」については *DSB* 五一三、*DSB* 五四三注参照。
- (32) エルスニッツ *Oelsnitz*. 現ザクセン州南西端フォークトラント *Vogtland* ——ベヒシュタインは「フォイクトラント」*Voigland* と表記している——郡の都市。町を白ヴェーザー川が貫流している。
- (33) フォイクツベルクの館 *Schloß Voigtsberg*. 後に「フォイクツベルクの館」と呼ばれるようになった「フォイクツベルク城」*Burg Voigtsberg* は中世盛期（一二〇〇年頃）の典型的山城である。破壊された後、三十年戦争時代、館に建て替えられた。一八五五年まで——初めはザクセン選帝侯領、次いでザクセン王国——フォークトラント郡の郡役場が置かれた。
- (34) ドルルス・ゲルマニクス *Drusus Germanicus*. ゲルマニクス・ユリウス・カエサル（前一五—後一九）。ローマ帝国初代皇帝オクタウィアヌス・アウグストゥスの姪の子。二代皇帝ティベリウスの甥。紀元十一年「プラエトル・ウルバヌス（首都プラエトル）」*praetor urbanus* に任命される。ゲルマニアにおいては、軍を率いてヴェーザー川をも渡河、ケルスキ族のヘルマン（*DSB* 二九一参照）——ローマ人はアルミニウスと呼んだ——の指揮するゲルマン人と数度交戦（一四—一六年）、ヘルマンの妻と息子を捕虜とする戦功（一五年）も挙げた。ただし、ゲルマン人に対し決定的勝利を取めたわけではない。結局エルベ河までをローマの勢力範囲とすることはできず、以降帝国の北境はライン河となる。中東に転じ、ここでも軍人として有能さを発揮したが、シリアのアンティオキアで（おそらく）熱病のため若死した。本来ならティベリウスの跡を継いで三代皇帝になるはずだった。
- (35) ここに陣営を張りしドルルスは山を総督と名付けた。／＼しかしてその名を後代は継承せり。 *Castra locus Drusus hic praetoria nomina monti / Fecit: posteritas servat et ipsa sibi. locus* は奇妙。このラテン語詩句は一書によれば若干異なる。すなわち *Castra locans Drusus hic praetoria nomina monti / Fecit: posteritas servat et illa sibi.* “*Johannes Unger: Vorurkundliche Geschichte der böhmischen Kronlehngüter Asch und Friben und ihrer Umgebung. Eger 1841*.” 訳は「あらの *locans*」に従った。また「プラエトル」*praetor* は「法務官」が一般的訳語だが、命令権を保持することからローマ以外では「属州総督」となったので、「総督」とした。こうすれば後の「代官」に相当するからである。尤もドルルスは前掲注に記したように「首都プラエ

- (38) トル」(ただし任命されてもローマに帰らず戦争に従事)に任じられたのであつて、「総督」ではない。
 フォイクトランド Voigtland. 現表記「フォークトランド」Voigtland。現バイエルン、ザクセン、テューリッゲン州およびチェコ共和国の境界地域になる地方名。かつて神聖ローマ皇帝直轄地ヴァイダ、ゲラ、ブラウエン、グライツの代官(=代官)によつて統治されていた地方であることに由来する。
- (39) プラウエン Plauen. 現ザクセン州南西部上部中心都市で、フォークトランド郡郡庁所在地。フォークトランド最大。「フォークト・フォン・ブラウエン」は「フォークト・フォン・ヴァイダ」(一五三一年継嗣を断つ)の一族から出た貴族の家柄。
- (40) トリプツ Tript's. 現テューリッゲン州ザール＝オルラ郡の小都市トリプティス Triptis. DSB五六五参照。
- (41) アウマ Auma. 現テューリッゲン州グライツ郡の小都市。二〇一一年末アウマ＝ヴァイデタール Auma-Weidetalの一部となる。
- (42) ヴァイダ Weida. 現テューリッゲン州グライツ郡の都市。
- (43) ノイシュタット Neustadt. 現テューリッゲン州ザール＝オルラ郡の都市ノイシュタット・アン・デア・オルラ Neustadt an der Orla。
- (44) ツィーゲンリュック Ziegenrück. 現テューリッゲン州ザール＝オルラ郡の小都市 Kleinstadt (尤もこの「都市」は住民数僅か七百)。
- (45) パウザ Pausa. 現ザクセン州パウザ＝ミュールトロップ Pausa=Mühltröpp (二〇一三年一月以降)。
 伝承によればパウザは世界の中心だそう。Die Sage geht: Pausa liege im Mittelpunkt der Welt. 現在もこの町は、「地球の中心」に am Mittelpunkt der Erde 位置する、として観光の売り込みをしている。ベヒシュタイン在世時からそれで有名だった、と見える。根拠は不明。以下の話の滑稽は、この町は、世界の中心、と誇っているから、行くのは簡単だが、同地域の他の町との交通手段が寡少ということである。
- (46) メールトイアー Mühltweier. 現ザクセン州フォークトランド郡の村。パウザ＝ミュールトロップと境を接する。
- (47) シュライツ Schleiz. 現テューリッゲン州南東部の都市でザール＝オルラ郡郡庁所在地。パウザより大きい。
- (48) ヴェンド人の部族名 einen wendischen Volksstamme. 「ヴェンド人」はゲルマン人の居住地ないしその近傍のスラヴ人を指すゲルマン語(後ドイツ語)。DSB二二三にも出る。
- (50) ロシア皇帝の称号中に「あらゆるロイセン人の絶対君主」im russischen Kaiserthum der Selbstherrscher aller Reußen. 二十世紀初頭のロシア帝国皇帝 *Николай II* の長長しい称号は「全ロシア、モスクワ、キエフ、ヴラディーミルならびにノヴゴロドのインペラートルおよび絶対君主」で始まる。しかし、ここでベヒシュタインが何を言いたいのか訳者には分からない。

- (51) 皇帝フリードリヒ二世 Kaiser Friedrich II. ホーエンシュタウフェン朝の神聖ローマ皇帝(在位一二二〇—一五〇)。シチリア王(在位一二九八—一二五〇)、ローマ[＝]ドイツ王(在位一二二二—一二五〇)。一二二五以降エルサレム王の称号をも帯びる。教皇グレゴリウス九世の圧力に耐えかね、やむを得ず十字軍(第六次。「無血十字軍」「破門十字軍」と呼ばれる。一二二八—二九)を組織、パレスチナへ渡った。二度教皇に破門を受ける。これまでもDSBに登場。
- (52) ゲラ Gera. 現テューリンゲン州でエアフルト(州都)、イエナに次いで第三の住民数(十万近い)を擁する都市。白エルスター川河畔に位置する。
- (53) かの、後に一度に二人の妻を持ったので知られるグライヒェン伯 Jener durch seine nachherige Doppelhe bekannte Graf. この物語はDSB五八三に詳しい。
- (54) プトロマイス Ptolemais. プトレマイスPtolemais. 現イスラエルの港湾都市アッコ(アラビア語アッカ)。ギリシア・ローマ時代および東ローマ帝国時代はプトレマイスと呼ばれたが、イスラム教徒の支配下に置かれてからは、古代エジプト時代の都市国家名アッコンに戻ってアッカ。十字軍に征服されていた時代(ほぼ一一〇四—一二九二)にはサン・ジャン・ダークルとして西欧に知られた。
- (55) モスコヴィアの商人に einem moskowitzschen Kaufmann. ロシア帝国の遙かなる前身モスクヴァ大公国(西ヨーロッパではこれをモスコヴィアと呼んだ)の商人がヴォルガ河を南下して、中央アジアのブハラ商人などのイスラム教徒と交易したことは虚構ではない。ただ神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世の在世中はこの大公国はまだ存在していない。モスクヴァ大公国を強力な統一国家に仕上げたイヴァン三世の治世は一四六二—一五〇五年。
- (56) タタール軍 Tataran. モンゴル軍である。衰退したキエフ大公国に代わって割拠していたヴラデーイミル・スーズダリ公国やノヴゴロド公国などルーシ諸国に対するモンゴル軍の侵入は一二二三年カルカ河畔の戦いで始まり、やがてほぼ一二四〇年までにルーシの民はロシア史にいわゆる「タタールの軛」の下に置かれ、これは一四八〇年頃まで続く。
- (57) ルッツォ、リュッツォ Ruzzo, Rizzo. これら他、ラテン語ルテヌス Ruthenus (ルテニアの人)ないしドイツ語ルルスツェ Ruzze (ルツェ) Ruzse = 「ルーシの人)はプラウエンの代官ハインリヒの次男である「小ハインリヒ」Heinrich der Jüngereの添え名である。彼はラテン語でHenrico de Plawe dicio Ruzze (るつゑト呼バレシぶらうえノへんりヒ)として古文獻に登場する。こうした添え名の由来は、東方のルテニア(現ウクライナないしウクライナと現ベラルーシを合わせた地域に対するラテン語名称。ここが本来のルーシ。現ヨーロッパ・ロシアも大ルーシと呼ばれたが、これは文明の中心地から遠い「辺境のルーシ」という意味だった)に長く滞在したためか、母方がルテニアの君侯家の出身であるガリツィア(現ウクライナ西部)の君侯の息女マリア・

- (58) スヴィホヴスカと結婚したためである。二人の子息ハインリヒ二世は一三〇七年以降公式にその姓ロイスRauhとした。ロイス一族は本拠地ブラウエンを中心にフォークトラントを構成する各代官領を支配、こうした趨勢は一五六四年まで続いた。
- (59) ヴアルスブルク・アン・デア・ザール Walsburg an der Saale. 現テューリンゲン州ザール＝オルラ郡の小村エスバハの一部。悪魔の障壁 Teufelswehr. 流れを横切つて巖がいわば鎖状に連なっている箇所である。
- (60) ローベンシュタイン Lobenstein. 現テューリンゲン州ザール＝オルラ郡の都市バート・ローベンシュタインBad Lobenstein。
- (61) ヒルシユベルク Hirschberg. 現テューリンゲン州ザール＝オルラ郡の小都市。ザール川上流河畔にある。現バイエルン州北端に接している。
- (62) ブンツィヒ Bunzig. 未詳。
- (63) ベオグラードの会戦で bei Bergard. おそらくセルビアを主戦場としたオーストリア・トルコ戦争(一七二六—一八)中のベオグラード攻囲戦(一七一七年七月十六日—八月十五日)を指す。現セルビアの首都ベオグラードはオスマン・トルコ帝国の支配下にあったが、ハプスブルク家に仕えた名将オイゲン・フランツ・フォン・ザヴォイエン＝カリクナン(一六六三—一七三六。通称プリンツ・オイゲン)オイゲン公子。フランス貴族)率いるオーストリア軍はこれを包囲、また救援に駆けつけたオスマンの大軍を撃破、ベオグラード守備軍は降伏した。
- (64) ホーエンロイベン Hohenleben. 現テューリンゲン州東部の最小の都市の一つ。
- (65) ゾンダースハウゼンのピュストリヒ Sondershäuser Püstrich. DSB四三二末尾に記述がある。詳しくは注参照。
- (66) 泊めてください、と頼み、ああ、いいとぞや、と言われた。Bat um Nachquartier, was ihm gern gewährt wurde. 旅修業の職人は同業の親方とこころでしかるべく頼めは食事と寝床は保証されたわけである。その対価は労働で支払へはよい。
- (67) 館 das Schloß. 十五世紀に建てられた「トリプティス城」Burg Triptisは主塔のみが残り、一七七五年この塔のすぐ傍に「新邸」Neues Haus あるは「館」Schloßとも呼ばれる建物が建てられた。これは現在もあり、私有。
- (68) 水溜まりが柳の上に垂れてくる Die Plütze hängt über die Weide. 原文は上記の通り。
- (69) かの麗しきグロイチユ女伯 die schöne Gräfin von Groitsch. 未詳。グロイチユ辺境伯ヴィプレヒトの息女ベルタBertha(一一四四—一一四四)か。
- (70) 手伝い妖精 Hinzelmännchen. 普通は「手伝い小人」HinzelmännchenとかHinzelmännchenとかの縮小形だが、この場合特に体つきがちっほけだったわけではないだろう。なお、「黠くちや小人」についてはDSB二二八の注「黠くちや小人」Hinzelmännleinを参照。

- (71) 水車装置修理人 *Mühlarzt*. この「水車」としたが、もちろん「風車」の場合もある。水車(風車) 医者。水車あるいは風車による製粉その他の装置全般を修理したり、調整したりする技術者。DSB三三三参照。
- (72) 暖房部屋 *Stube*. この家ではここが家族・奉公人全員が集まる居間兼食堂だったのであろう。中世ドイツでは暖炉による暖房可能な部屋を「シュトゥーベ」といった。DSB六〇一注で詳述。
- (73) お化け *Gespent*. これは一種の騷霊 *Pollergaist* である。伝承を見ると、これが出没する家には必ず少女がいる。この話でも同じ。
- (74) 匙や小刀 *Messer und Löffel*. この時代、フォークは食事用具としてまだまだ一般的ではないのである。ヨーロッパ人は元来指食文化圏に属した。フォークが庶民末端に至るまで普及したのはドイツでは十九世紀。
- (75) 白腸詰 *Weißwurst*. 細かく挽いた仔牛肉や豚肉、豚の背脂、香辛料で調製したソーセージ。沸騰しない熱湯で数分温めて食べる。硝酸カリウム・亜硝酸ナトリウム(発色剤・保存料) 添加塩でなく、普通の食塩を使うので、赤くならず、薄い灰白色を呈する。ミュンヘン名物の一つにミュンヘナー・ヴァイスヴルストがあるが、これは伝統的に早朝に作られ、軽食として午前中——ヴァイスヴルストは保たないのである——市の立つ広場や軽食店で売られる。甘いマスタードを付け、プレーツン *Brezn* (＝8の字型塩味ビスケット *Brezn*) と共に食べる。飲み物はミュンヘナー・白麦酒。(氷室などの例外を除き) 冷蔵設備のまず無い時代、れっきとした市民であっても、こうした傷みやすい加工肉、あるいは新鮮な生肉はたまにしか食べられないご馳走だった。現代でも、ドイツの農村で秋、豚を潰して解体、貯蔵用加工肉を作る場合、その家では当日の昼食として、茹でただけの肉に塩を付けて食べて楽しむ習慣がある。
- (76) 胸は血まみれで *die blutig war*. この化け物はかつてこの家で胸を刃物で刺されて横死した子どもの亡霊だ、ということを一仄めかしているのか。
- (77) 焼き腸詰 *Bratwurst*. フライパンないし直火で焼いて食べる。湯、スープ、白ワインなどで温めて食べる茹でソーセージ *Brühwurst* やそのまま食べる料理ソーセージ *Kochwurst* と区別される。
- (78) ある牝牛小屋に *in einen Kuhstall*. まるか町の中心部に住んでいた靴屋のものではあるまい。このあたり、筋が不分明。
- (79) 前何かの罪を犯し、呪われて灯火の形でさまよっていた亡霊が、奉仕に對し礼を言われたので、呪いが解け、天国へ行けることになったわけ。
- (80) ティーアバハ *Thierbach*. 現ザクセン州フォークトランド郡の都市パウザ＝ミュールトロッフの一部。

- (81) 担保遊び Pfänderspiel. DSB四二九注およびDSB五二二参照。
- (82) ベルガ Berga. 現テューリンゲン州グライツ郡の大都市ベルガ／エルスター。白エルスター河谷の斜面に位置する。
- (83) 元のレンマー亭、今のガイン亭の des sonst Lemmer'schen, jetzt Geyn'schen Hauses. いずれも旅籠屋兼居酒屋の名であろう。
- (84) 菓子の生焼け Klitsch. テューリンゲン、ザクセンの方言で、「捏ね粉状の焼き菓子」teigiges Gebäckをいう由（グリム『ドイツ語辞典』。「」の菓子はとんと生焼けたぬ）Der Kuchen ist feiner Klitsch. のように使う。
- (85) この老耄れと腐れ女郎 du alte Saunäre. 老女に対する極めて口汚い呼び掛け。
- (86) ボルストドルフ種の林檎 Borsdorfer Apfel. 栽培種林檎の名称の一つ。この種類で最も有名なのはドイツ最古の林檎種——最初の記述は一一七五年——であるエーデルボルストドルファーEdeboldsdorfer。
- (87) ところがこの樹は毎年降誕祭の夜に漸く開花し始め er begann aber sein erstes Blüten in jeder Christnacht. 林檎は中部ヨーロッパにおいては通常五月に開花する。
- (88) ラニス Ranis. 現テューリンゲン州ザーレールラ郡の大都市。
- (89) ツォイレレンローダ Zeulenroda. 現テューリンゲン州東部テューリンガー・フォークトラントの都市ツォイレレンローダトリューベス。
- (90) ゲラ近傍のツァイツ山 der Zeitberg bei Gerra. 未詳。識者のご高教を俟つ。次の文はこの山がごく小さいという意味であろうが、なぜベヒシュタインがそんなことに言及したのか分からない。また結びにオールドミス一般をからかう唄をわざわざ記しているのかも理解できない。
- (91) ホーフ Hof. 現バイエルン州北東部最大の都市ホーフ・アン・デア・ザーレ。一二七三年までヴァイタ代官家の所有。次いでニュルンベルク城伯に属す。一七九二年プロイセン王国、一八一〇年バイエルン王国。
- (92) ベスネツクの町 die Stadt Posneck. 現テューリンゲン州ザーレールラ郡最大の都市。
- (93) ボーデルヴィッツ Bodelwitz. 現テューリンゲン州ザーレールラ郡の自治共同体オップルクに属する村。
- (94) デーブリッツ Döblitz. 未詳。
- (95) 怖いプレヒタ die wilde Prechta. ベルヒタに同じ。優しさ怖さの二面性を備える。
- (96) ベルヒタ Perchta. ヘコミュタインは(こ)で(こ)う表記している。不統一なことである。
- (97) 靴の中へ in die Schuhe. 革靴ではなく木靴だったのである。それなら木切れが入るゆとりがある。
- (98) ケストリッツ産 Köstritzer. ケストリッツァー・黒ビールは現テューリンゲン州グライツ郡バート・ケストリッツのケストリッツ

- (99) ツアー・黒ビールシュワツブル醸造所製ビール。同醸造所はドイツ最古の黒ビール醸造所の一つである。
 ブーデルスってどこだか知らないの。／緑豊かなところにある。／あすこにや綺麗なあまつこがおつてさ。／雌鶏めんどりみたいに怠け者。
 ／明け方牛飼いの角笛吹くと、／あまつこ叫ぶよ、あんれまあ、／あたいはまだ乳搾乳搾つてねえだ。 Wilt ihr nich. wu Budeis
 liegt? / Budeis liegt im Grunne. / Sin a feine Mädlich drin. / Sin faul wie die Humme. / Fruh murgens. wann der Härte tut. /
 Schrein se: Ach du lieber Gutt / Mer han nuch nich gemulken. 原文は上記の通り。気候が良くなると、放牧して青草を食へさせ
 るために、朝早く牛飼いが村の家家から牛を集めて草原へ連れて行くわけだが、その前に搾乳が終わっていないならならぬ。こ
 の娘は寝過ぎたらしい。
- (100) エールゼン Oelsen. 現ザクセン州ゼクスィツシェ・シユヴァイツ・オストエルツゲルゲ郡の都市バート・ゴットロイバール
 クギースヒューベルの一部。一九九六年バート・ゴットロイバに併合。十九世紀を通じて住民は三百人台。
 マース Maas. 現在普通 'Maas' と綴る。ビールの古い容量単位で、一—二リットル。
- (101) 一列分 eine Zelle. パン屋で並べられている一列分らしいが、何個になるのやら訳者には分からない。パン焼き籠に入れる一回分
 なのかも、とも思う。識者の「高教を俵つ」。
- (102) 聖ウルバヌスの祝日 Sankt Urbanus Tag. 教皇聖ウルバヌス一世——葡萄畑と葡萄栽培農家の守護聖人——の祝日であれば十二
 月十九日。
- (103) オップルク Oppurg. 現テューリンゲン州ザーレールホルラ郡の自治共同体。
 白髪しらぎの男の侏儒じゆぢうたち Graue Männchen. 地中に沈んだオステラリツツ城の城主一家に道化などとして仕えていた人間の侏儒たち
 なのであろう。
- (104) オルラミュンデ Orlamünde. 現テューリンゲン州ザーレールホルツラント郡の小都市。オルラ川がザーレ川に合流する地点にあ
 る。かつてオルラミュンデ伯爵家の城下町だった。
- (107) ハイリンゲン村 der Ort Heilingen. 現テューリンゲン州ザールフェルト＝ロールドルフシユタット郡の小村。かつては同名の貴族
 一門の根拠地だった。
- (108) 薄麦酒 Kowent. 俗にいう「修道院ビール」Kofenbier のこと。「薄ビール」Dünnbier とも。中・近世、修道院や船、庶民の家庭
 で水代わりに飲まれた。英語の「スモール・ビア」small beer。一旦ビールを醸したマッシュを煮て再醸造する。煮沸の過程を
 経ているから衛生的だが、味もしゃらしゃらもあればこそ。ただしアルコール分はほとんど無いので、朝食の際にも、また子ども
 でも飲めた。

- (109) ゲラート Gellert. クリステリアン・フェルヒテゴット・ゲラート Christian Furchtegott Gellert (一七二五—一六九)。ドイツの文人。啓蒙主義の道徳哲学者。ザクセンのハイニヒェンに生まれる。生存時最も文名高い作家の一人とされた。
- (110) 市お抱え楽士 Stadtpfeifer. 十四世紀から十八世紀まで都市に雇われた音楽家のこと。彼らは同業組合を結成していた。十九世紀には市管弦楽団に発展解消。彼らの仕事は市の祝賀会などの催し事で音楽を奏でることだった。ツインケン (コルネットの一種)、トランペット、横笛、縦笛、諸種の弦楽器、打楽器などを演奏した。
- (111) 笛吹きに行っちまった (「ふいになった」) Flöten gegangen. 慣用句「笛吹きに行く」Flöten gehen は「行方不明になる」「消え失せる」「駄目になる」という意味。
- (112) オルラミュンデ伯オットーなる人 ein Graf zu Orlamünde, Otto. フロイセンのある伝説によれば、一二八四年に死んだオルラミュンデ伯オットー二世の未亡人が恋に狂って実子二人を殺させ、ヒンメルクローン修道院まで懺悔行をしたことになっているが、オットー二世は存在しない。一二八五年に死んだオルラミュンデ伯オットー三世 (ヴァイマルとルードルフシュタットを入手。以降この家系はヴァイマル＝オルラミュンデ伯爵家) は存在。夫人アグネス (一二〇〇以前に死亡) はトルーエンティンゲン女子、子女三人とも横死などしていない。内母と同名のアグネス・フォン・ヴァイマル＝オルラミュンデは未婚でヒンメルクローン女子修道院長 (言い伝えでは初代) として一二五四年死す。年齢からしてこの女性が伝説の「未亡人」となる。
- (113) アルブレヒト美男伯 Albrecht der Schöne. ニュルンベルク城伯 Burggraf von Nürnberg (一二一九—一六二)。ニュルンベルク城伯フリードリヒ四世の四男。ヘンネベルク伯爵家のゾフィーと結婚。息女マルガレーテはテューリンゲン方伯バルタザールに嫁す。
- (114) 二人用寝台 Doppelbett. ベヒシュタインは迂闊な人である。二人妻を持ったグライヒェン伯爵のために、貞実な第一の妻が作らせた豪華な寝台は当然三人が横たわれる寝台でなければならない。当該伝説を素材として楽しい物語「メレクザール」を作った J・K・A・ムゼーウスはちゃんと「二人用寝台」 eine dreischläfige Bettsponde と記している。詳しくは鈴木満訳「メレクザール」——所収「メレクザール」ドイツ人の民話、国書刊行会、平成一九年——を参照されたい。ベヒシュタインは同郷の大先輩ムゼーウスに私淑しており、この物語をきちんと読んでいる証拠がある——彼の初期の物語「ゼリンデ」Selinde (後掲 DSB 五八五注「匙」参照)——は「メレクザール」を枕に振っている——のだが……。
- (115) シュタットイルム Stadtlim. 現テューリンゲン州イルム＝クライス郡の小都市。
- (116) 同名の城の廢墟 eine Burgrümmen gleichen Namens. 「同名の城」、すなわちエーレンシュタイン城 Burg Ehrenstein はかつてのシュヴァルツブルク＝ケーフェルンブルク伯爵領、トナナ＝グライヒェン伯爵領、ヴァイマル＝オルラミュンデ伯爵領の接点にあった。

- (117) プラウエを見下ろすエーレン城^{アレン} der Ehrenburg über Plau. 現テューリゲン州イルム^{イルム}⇨クライス郡の都市プラウエの上手にそり立ち、ゲラ谷^{ゲラ}の西斜面にある山城。いまだに主要部分は残っている。
- (118) 欲びの谷 Freudenthal. グライヒェン伯エルンストは居城近くのこの地で、出迎えに来た留守宅の夫人、子どもらと再会、東洋から伴って来た第二の妻を引き合わせた由。
- (119) 寡婦産 Witthum. 現在では普通 Witum と綴る。中世の用語で、亡夫の遺産の内寡婦が受ける部分。ここではグライヒェン伯が生前から第二の妻の財産として譲渡したもの。もとより城ばかりでなく、エーレンシュタイン領全体がそうで、ここから上がる貢租は第二の妻の収入となったわけ。
- (120) クラニヒフェルトの上手城 Kranicheider Oberschloß. 現テューリゲン州ヴァイマラー・ラント郡の小都市クラニヒフェルトの上手にあるルネサンス時代の城。大貴族ロイス家の居館だった。十二世紀にクラニヒフェルトの殿たちの砦があった。
- (121) だれもでさん、だれもせん、しかじかのこと dieß und das thun, was keiner kann und thut. これについては物語中、実行したヴォルフアーは脊椎を折ってしまった、リュトガーは浅ましくもみっともない恰好をしている兄の姿を城の張り出し窓の一つに取り付けさせた、との説明しかない。クラニヒフェルトの上手城^{オベラシュロ}にはLECK MICH AM MARS (= Leck mir den Arsch!) = 「おれのけつを舐めろ」「糞喰らえ」と大文字で刻まれた粗末な石像(一五三〇年頃の物)がいまなお存在する。これは張り出し窓の一つの下部で支えの役割を果たしている。裸の男が足を踏んぱり、極度に背を丸め、両手で自分の尻を掲げ、陰茎・辜丸を含めて見せている。訪問者を挑発しようとしたルネサンス期の建築棟梁の突拍子もない思いつきか。ただしこの伝説では、自分で自分の肛門を舐めて見せる、との約束を履行しようとしている図とされているわけ。
- (122) アルンシュタット Arnstadt. 現テューリゲン州イルム⇨クライス郡郡庁所在地。ゲラ川河畔に位置する。これまでも登場。ベヒシュタインは一八一八年(一)で薬剤師の徒弟となり、更にここを振り出しに薬剤師主任助手をしていたので、愛着深い。
- (123) 聖母教会 die Liebrauenkirche. 一三二〇年頃建立が開始され、一三三〇年頃一応終わった。途中ベネディクト派の聖ヴァルブルギス女子修道院の附属教会となった。ところが宗教改革と共に同修道院が廃止されると、教会は意義を失い、僅かしか使用されず、一八一三年究極的に閉鎖された。その後当座倉庫として使われたが、ために荒廃が早まった。従ってベヒシュタインがDSBを編著していた頃は無人だったわけである。十九世紀半ば保持目的の募金が始まり、一八八〇年以降修復工事に着手。現在は美しく再建され、「聖母」の名を冠したまま、新教⇨プロテスタントの教会となっている。
- (124) 匙 Löffel. アルンシュタットの中心部から程遠からぬ、ハールハウゼン街道Hahnsenstraße脇の草原に現存する「巨人の匙」^{リヒゼレラッフェル} Riesenhöfel と唱えられる高さ二・二五メートルの砂岩製の物。元来はカトリック教会の大祭である聖体の祝日(ドイツでは快い時

- 期である五月末から六月下旬初めに掛けての移動祝日)のお練り(祈願行列。教区内を司祭が聖体顕示台を捧持して巡り、所所で聖餐式を挙げる)の折、聖体顕示台上部の大きな壁龕に、聖体顕示台から取り出された聖餅を下部の小さな壁龕に安置したものの。柄を地面に突き刺した巨大な匙に見える。これは一五〇七年に立てられた。やがて宗教改革がテューリンゲンに及び、この地方が新教プロテスタントに帰属し、カトリックの祭祀である祈願行列が行われなくなると、用途が忘れ去られた。「巨人の匙」という名称はどうやら十九世紀初頭ロマン主義の時代に発するようである。ベヒシュタインはこれに纏わる伝説を素材として「巨人の匙——ある昔話」Riesenhöfen. Ein Märchen.なる物語を書いた。これは他の三つの物語とともに『テューリンゲンの民話』Thüringische Volksmärchenと題して一八二三年に出版された。この物語集に興味のある向きは「ゼリンデ」Seinde. 「ハラルト・フォン・アイビェン」——十二世紀後半の「餉」Harald von Eichen. Eine Skizze aus der 2ten Hälfte des 12ten Jahrhunderts. 「ベラーの洞窟——民話」Die Böhlershöhle. Volksmärchen.、そして「巨人の匙——ある昔話」(いずれも鈴木満訳・注・解題。「武蔵大学人文学会雑誌」第三十九巻第三号/第四号/第四十巻第一号/第二号所載)を参照されたい。
- 落下傘 Fallschirm. ヨーロッパ中世に既に試行錯誤の工夫がなされたが、十八世紀末複数のフランス人が一応実用化に成功しているの、ベヒシュタインも当然知っていたわけ。
- (126) ベーラーの小人たち Böhlersmännchen. ベヒシュタインは「テューリンゲン地方の伝説群と伝説圏」Der Sagenschatz und die Sagenreise der Thüringerlandes. (一八三五—一三八) 第三卷(マイニンゲン、一八三七)第二節所収の一八「ベラーの小人たち」Die Böhlersmännchen. および一九「乙女の跳躍」Jungfersprung. でも同様の伝説を紹介している。また伝説を素材として、小人たちが善い人間を助ける際の温良さ、悪い人間を懲らしめる際の苛酷さをテーマとした物語を「ベラーの洞窟——民話」として発表した(前掲注参照)。この中では小人たちの容姿と彼らが棲まう洞窟の情景が詳細に描写されている。
- (127) リンブルク・アン・デア・マース Limburg an der Maas. 未詳。リンブルク・アン・デア・ラーン Limburg an der Lahn であれば、現ヘッセン州リンブルク＝ヴァイブルク郡郡庁所在地の都市。「リンブルフ」だけならネーデルラント(オランダ)最南端の州。
- (128) ニーフエル小人やオウヴェル小人 Niefelmännchen und Ouwelmännchen. 原文は上記の通り。
- (129) エスペンフェルト村 Espental. 現在はアルンシュタットを構成する地区の一つで最小。東のゲラ谷と西のヨナス谷に挟まれた高台(標高は三八〇メートル)の窪地にある。
- (130) ブッフアールト・アン・デア・イルム Bufahrt an der Ilm. 未詳。
- (131) ザルツミュンデ Salzmünde. 現ザクセン＝アンハルト州ザーレ郡の自治体ザルツタールの一部。尤もベヒシュタインは「テュー

- リンゲンの多くの他の場所」と記して、この名を挙げているので、異なる場所かも知れない。
- (132) マイニンゲン Meiningen. 現テューリンゲン州南部シュマルカルデン＝マイニンゲン郡郡庁所在地で著名な文化都市。
- (133) デイルシユテット Dilstätt. 現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の自治体。
- (134) ヴィヒツハウゼン Wichshausen. 現テューリンゲン州の都市ズール(＝ズーラ)の一部。
- (135) ヴアルパー森 Walperholz. DSB五〇では「ヴァルツァー森」Walzerholzと誤記されている。
- (136) いわゆる狩りの山毛櫨の樹 eine sogenannte Jagdbuche. ヘビシユタインは上記のごとく不定冠詞を付けているが、これでは意味不通。他の複数の文献では定冠詞が付いている。固有名詞。
- (137) マース Maas. DSB五七六注参照。
- (138) その昔(一二二二年)テューリンゲンその他ドイツ各地の子どもたちの間に、フランスでと同様、……広まったことがある。Zu einer Zeit (1212) kam unter die Kinder in Thüringen und auch im übrigen Deutschland, wie in Frankreich, 「子ども十字軍」少年十字軍] der Kinderkreuzzug./ la croisade des enfantsのこと。フランスでは、神の啓示を受けた、と称するエティエンヌなる少年が、ドイツではニコラスなる青年狂信者が聖地奪回を呼び掛けた。これに応じた少年・少女が中心となって東方へと向かった。大失敗だった第四回十字軍(一二〇二―〇四)の後、教皇インノケンティウス三世(在位一一九八―一二一六)がヨーロッパ各地に説教師を派遣、十字軍への参加を鼓吹したので、こうした民衆層はそれに煽られたものであろう。飢渴・病気などによる途中での斃死、海難事故の他、フランスのマルセイユから船で輸送されてエジプトのアレクサンドリアに辿り着いた者も、親切ごかしに無料で船を手配した商人によって奴隷に売られ、惨憺たる結果に終わった。ドイツからの者たちはアルプスを越えてローマに辿り着いたが、教皇に説得されて引き返した。しかしこちらでも無事に故郷へ戻れたのは少数に過ぎなかった由。
- (140) 十字軍従軍者の唄 Kreuzfahrlied. 十字軍への従軍を呼び掛ける中高ドイツ語宮廷風叙情詩。
- (141) シュヴァルトブルク伯ハインリヒ七世なる御仁 ein Graf zu Schwarzburg. Heinrich der Siebente heißen. エアフルトで汚物溜めに落ちて死んだのはシュヴァルトブルク伯ハインリヒ一世(一一三〇頃―一一八四)である。一二八五年以降シュヴァルトブルク＝ブランケンブルク伯ハインリヒ七世が存在する。厭わしい言い種は、ご先祖様の椿事が念頭にあったこの人の口癖だったのかも知れない。
- (142) 一一八六年 im Jahr 1186. 事故が起ったのは一一八四年七月二十六日である。
- 皇帝ハインリヒ六世 Kaiser Heinrich VI. ドイツ王(在位一一六九―一一九七)、神聖ローマ皇帝(在位一一九一―一一九七)。晩年シチリア王(在位一一九四―一一九七)をも兼ねた。これまでもDSBに登場。ドイツ王にして後神聖ローマ皇帝に戴冠

- したハインリヒ六世はポーランドへの出征の途次エアフルトで短期間宮廷を開き、諸侯会議を召集した——この時まだ十九歳。テューリンゲン方伯ルートヴィヒ三世とマインツ大司教コンラート一世の深刻な確執を和解させるためである。ハインリヒがエアフルト大聖堂の二階大広間に大勢の随行者と共に座を占めた時、古い、そしておそらく腐朽していた床が重みに堪えかねて倒壊、一階に落ちた人人は——この床も壊れたので——更に下にあった汚物溜めに顛落した。一部は汚物の中で窒息、他の者は落下した梁や石に打たれて死んだり負傷したりした。同時代の資料によれば、死者はほぼ六十人に上った。この悲惨な事故がいわゆる「エアフルトの汚物溜め顛落」Erfurter Latrinesturzである。ハインリヒは幸い辛うじて落ちないで済み、事故後すぐにエアフルトを去った。
- (143) テューリンゲン方伯ルートヴィヒ Landgraf Ludwig. 敬虔方伯ゲマインツないし温和方伯ミルツと添え名されたルートヴィヒ三世（在位一一七二—九〇）。事故の際深みに顛落したが、幸いに死を免れた。DSB四五六本文および注参照。
- (144) マインツ大司教コンラート Erzbischof Konrad von Mainz. ヴィッテルスバハ家の出。マインツ大司教（在位一一八三—一二〇〇）としてはコンラート一世。一一六六年以降枢機卿。
- (145) 汚物溜め Cloak. 現在は普通 Kloake と綴る。普通汚物溜めの汚物は特殊階級の請負人——廃牛廃馬の皮剥ぎ人を兼ねることもあった——が時時汲み出して桶に入れ、荷馬車で運搬、川に捨てたはずだが、ここでは溜め放しだったのであろうか。とにかく建物内部にあったとはまことに意外である。悪臭が芬芳と立ち昇っていたであろうに——。なお、エアフルトの聖ペートルス（サンクトペートルス）「修道院年代記によれば、一一八四年七月二十六日の事故で亡くなった貴顕は以下の通り。「アービンベルク伯フリーデリヒ Friderich, Graf von Abinbere」、テューリンゲンの伯爵ハインリヒ Heinrich, ein Graf aus Thüringen「これがシェヴァルトツブルク伯ハインリヒ一世である」、ヘッセンの伯爵ゴツマル Gzmar, ein hessischer Graf、キルヒベルク伯フリーデリヒ Friderich, Graf von Kirchberg、フルビヤルト・フォン・ヴァルトブルク Burchard von Wartburg「ヴァルトブルク城伯ブルビヤルト Burchard, Burggraf von Wartburg」」。更に「およびさほどの身分ではない他の人人」とあつさり記されている。
- (146) アルンスブルク伯フリードリヒ Friedrich Graf von Arnsberg. 該当しそうな人物は未詳。ただしアーベンベルク伯フリードリヒ一世 Friedrich I., Graf von Abenberg はこの倒壊事故で死亡。アーベンベルク伯爵家はフランケンフランクの貴族。
- (147) ヘッセン伯クスマール Gosmar Graf von Hessen. 該当しそうな人物は未詳。
- (148) ツイーゲンハイン伯ゴットフリート Gottfried Graf von Ziegenhain. 該当する人物は北ヘッセンノルデンのツイーゲンハイン伯ゴツマル三世 Gosmar III.（在位一一六八—八四）。
- (149) キルヒベルク城伯フリードリヒ Burggraf Friedrich von Kirchberg. 該当しそうな人物は未詳。

- (150) ベリンガー・フォン・メルディングン Beringer von Meldingen. メルリングン Mellingen (メルディングンとも記録されている。現テューリングン州ヴァイマラー・ラント郡南部の自治体) の殿だったのである。事故死を遂げたことと、この下級貴族ミニステリアーレ一門がメインツ大司教の家臣だったこと以外は未詳。
- (151) 巨人ポリュペモス Riese Polyphemus. ホメロスの叙事詩「オデュッセイア」に登場する一つ眼の人喰い巨人。オデュッセウスは十二人の部下の内六人を喰われたところで、濃厚なワインをしたたかに飲ませ、前後不覚に酔っ払って寝込んだ巨人の目を潰し、なんとか脱出に成功する。
- (152) 親愛なるクリンゲ博士 Mein guter Doktor Klingel 「クリンゲ」には「刃」の意があるが、嘲弄ではなく、そうした姓のかも知れない。実際テューリングンにはこの姓が存在するので。
- (153) 鞭打苦行者 Flagellant. 疾病や天災は人間の罪に対する神の罰で、自ら苦行を行い、悔悛を示すことでこれらを免れることができる、との思考から、十三世紀イタリアで背中を鞭打ちながら巡礼する者が現れた。更に十四世紀黒死病ペストの流行を機にヨーロッパ全土にこの宗教的熱狂が広まった。集団で町から町へ移動し、上半身裸となり、皮鞭や尖った金属を仕込んだ鞭で自らを打つのである。教皇がこれを弾劾する教書を出したことで、このヒステリーじみたキリスト教異端は不意に終熄した。
- (154) 「両手を上げた」十字型に Kreuzweis. 特に神の前にへりくだる時、両足を揃えて伸ばし、両手を左右に上げ、丁度十字の形に俯せになる。これを指すのであろう。
- (155) 下賤の輩 Lumpengesindel. 原文は上記の通り。
- (156) イルファースゲーホーフェン Jiversghöfen. 現在はエアフルトの市区。かつてはメインツ大司教(選帝侯)の所領で、エアフルト郊外のいわゆる御厨村 Kirchendorf (台所村。エアフルト市内の大司教の宮廷に生活必需品を貢納する義務を課されていた)の一つ。メインツ大司教が鞭打巡礼者ミクローにこの村近傍での宿営を許可したものが。
- (157) 疫病ハ権勢ヲ振ルイ、民衆ハ幾千モ斃レ伏シ、シニペイ異形ナル者トモハ半裸ニテ自ラヲ鞭打テリ。 Pestis regnavit, plebis quoque millia stravit / Insolitus populus flagellat se seminudus. 原文は上記の通り。ラテン語。
- (158) エーレンシュタイン Ehrenstein. DSB五八三参照。
- (159) 不安に怯えながら voll Angst. 中世においては都市市壁外での野宿は極めて危険だった。
- (160) 特殊不治病者の隔離所 das Haus der Sonderseichen. 隔離施設は都市や村落の境界外に建てられて、通常修道士などが食事、被服、薬剤などの面倒を見ていた。そのように聖職にある健常者が管理している上、病者は多く身障者なので、こうしたことが起こったとは信じ難い。この伝説は偏見による恐ろしい歪曲の一例か。

- (161) 審判人 Schöppe. 原文は上記の通り。Schöffeのこと。中世、法律問題や行政問題の諸任務を委託された者。
- (162) 聖トーマス教会 Sankt Thoma. 原文は上記の通り。聖トーマス教会である。もちろんこの当時はカトリック教会。現在は新教のトーマス教会 Thomaskirche となっている。
- (163) あのパールシュテット村 das Dorf Berstett. 未詳。現テューリンゲン州キュフホイザー郡にベルシュテット Belstett という小さな村があるが、それか。
- (164) 燃え木 Strohisch. 一メートルほどの高さの若木や木の棒に藁束を括り付けたもの。畑や草地に立てられる。耕牧地の所有者が、羊飼いに、特に羊を移動させている旅の羊飼いに對し、この耕牧地では羊群に草を食ませてはいけない、ということを示す。また一般に警告としても用いられた。たとえば、通行できない道とか疫病感染者の出た家などの告知である。二十世紀に至るまで法的拘束力を持つ標識だった。今日でも、自然保護のため入ってはいけない区域を知らせるために用いられる。
- (165) 屍骸は野曝しにされた man ihn hingehen ließ, wohin er wollte. 直訳「人人は……彼がどこへ行くところ勝手にさせた」。これでは意味不通なので、「どうにでもなれと放置された」と解釈し、上記の訳になったが、自信はない。識者のご高教を俟つ。なお、夜間の放火は、宗教上の犯罪、大逆罪、破廉恥罪、夜間の重窃盗などと並び、民衆や国家に対する平和侵害行為の一つ。
- (166) キリアクスブルク堡 Vesté Gyraksburg. 一四八〇年から一六〇四年までエアフルト市の小城塞。標高二六五メートルのキリアクス山上にある。同所にはそれ以前は——十二世紀以降——聖キリアクス修道院があった。
- (167) ジビュレの小塔 Siblylenturmchen. エアフルト西方（ブリュエラー郭外市 Brühler vorstadt）、キリアクス城の下にある石造記念碑。現存。ほぼ一三七〇年から一三八〇年の間に建てられた。ゴシック様式の尖塔を持つ。キリスト受難の物語の幾つかの情景が浮き彫りにされて四つの側面に示されている。この小塔の名の由来は伝承されていないが、幾つかの仮説がある。
- (168) 市域 Weichbild. 都市の管轄権が及ぶ地域。中世以来の用語。
- (169) 一頭の牡狼 ein Wolf. 案ずるに、これは大層人懐こい、しかしろくすつば簾をされていない、小馬^{#ニ}ほども大きな迷い犬（飼い主は多分ご婦人）だったのではないかな。前脚を掛けたばかりか、はつきり記されていないが、そうされて怯えきった人間の顔をべろべろ舐めたに違いない。舐められた方はさぞかし生きた心地がしなかつたであろう。
- (170) エアフルト大聖堂 der Dom zu Erfurt. エアフルトで最古最重要的の教会建築。司教座^{カテドラル}教会。
- (171) ヴォルフラム der Wolfram. 「ヴォルフラム燭台」 Wolframleuchter. ドイツ最古の金属の立像。マクデブルクで鑄造されたと思われる。「ヴォルフラム」は寄進者の名。
- (172) 都市貴族 Patrizier. 古代ローマの世襲貴族の総称（パトリキパトリア）でもあるが、ここでは中世および近世初期の都市上層階級

- (173) のこと。市参事その他に選ばれて都市行政の実権を握った富裕な家族の成員。
三グライヒェン ドレイグライヒェン die drei Gleichen. 現テューリンゲン州の古い町ゴータとアルンシュタットの間にある三つの、互いに近接している城、ヴァンタースレーベンのグライヒェン Wandersleber Gleiche (現代ではグライヒェン城 Burg Gleichen——既に廃墟——で通っている)、その南のミュールブルク Mühburg 近くのミュールブルク Mühburg (主塔と城壁は残っているが他は廃墟)、ホルツハウゼン Holzhausen 近くのヴァクセンブルク Wachsenburg (改築・再建された城はいまだにある)をいう。一番目の城がおそらく一〇八八年古文書にその名が挙がっているグライヒェン城であり、トンナ伯爵家の分家がこの城主となつて、グライヒェン伯爵と名乗つたのである。
- (174) かの黒騎士ヴィッテキント Witekind, der schwarze Ritter. DSB五一九参照。
皇帝フリードリヒ二世 Kaiser Friedrich II. DSB五五八参照。
- (175) テューリンゲン方伯ルートヴィヒ Landgraf Ludwig von Thüringen. DSB四六五、DSB四六六参照。
グライヒェン伯エルンスト三世 Graf Ernst III. von Gleichen. 生没年がさほどずれていないのはグライヒェン＝トンナ伯エルンスト四世(一二二二以前—一二七七)だが、DSB五八一ではルートヴィヒとなつてゐる。いずれにせよ伝説上の人物なので、穿鑿は無用であらう。この伝説を素材としたまことにおもしろい物語は、ベヒシュタインが私淑した同郷の大先輩 J・K・A・ムゼーウス(一七三五—一八七)が書いた「メレクザーラ」Melechsalaで、『ドイツ人の民話』Volksmärchen der Deutschen に収められてゐる。鈴木満訳『メレクザーラ ドイツ人の民話』(国書刊行会、平成一九年)参照。二人妻を持つたグライヒェン伯の伝説については、知れる限りを同物語解題(前掲書二七八—二九四ページ)として記しておいた。
- (176) アツコン Akkon. DSB五五八参照。
- (177) イスラーム王 Sultan. エジプトとシリアを支配したイスラーム教国アイユーブ朝第五代スルタンで、完全王、すなわちアル＝マリク・アル＝カーミル(在位一二一八—一三三八)と尊称されたナースイルッドティーン・ムハンマド(クルド人の英雄サラーフ・アツ＝ディーン——西欧人のいわゆるサラディン——の弟の子)。皇帝フリードリヒ二世とは分別ある知識人同士として交信、戦闘をほとんど行わず、エルサレムを無血譲渡、十年間の休戦条約を結んだ。スルタンにしてみれば東方国境にはモンゴル軍の脅威も迫つてゐたことだし……。尤も、彼等の蒙昧な好戦派は——教皇を含め——片や皇帝、片やスルタンを非難・攻撃して已まなかつた。トルコ婦人の道なる舗装道路 ein gepflasterter Weg, der Türkin Weg. サラセン人の奥方が資金を出して舗装させたので、この名がある由。
- (181) トンナにあるグライヒェンの館は im Gleichenschen Schloß zu Tonna. トンナは現テューリンゲン州ゴータ郡の町。町の一部

- グレイフェントナには古い伯爵家の館ケッテンブルク Kettenburg^{ケッテンブルク}がある。ベヒシュタインはこれを指しているであろう。北翼にある高さ三五メートルの塔は九世紀のもの。一二〇〇年頃グライヒェン^{グライヒェン}トナ伯爵家により水城^{ワッサー}が新たに建てられたが、十八世紀半には改築。以来十九世紀半まではゴータ侯国の役所の一つとして用いられた。
- (182) ファルンローテ Farnode. ファルンロータ Farnoda. 現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡の町ヴァータ^{ヴァータ}にファルンロータ Wutha-Farnroda の一部(一九八七年ヴァータと合併)。
- (183) ビルモントの館 Schloß Pyrmont. 現ニーダーザクセン州ハーメルン^{ハーメルン}にビルモント郡の町バート・ビルモントにある。かつてシュペーゲルベルク伯爵家、ヴァルトテック^{ヴァルトテック}にビルモント伯爵家の夏の滞在地だった。
- (184) エーレンシュタイン城 Burg Ehrenstein. DSB五八三参照。
- (185) エムレーベン Emleben. 現テューリンゲン州ゴータ郡の村。
- (186) 婚礼肌着 Brautheud. 結婚式当日に新婦新郎双方が身に着ける優美な肌着。
- (187) クリステイアン・フリードリヒ・カール・フォン・ローゼ殿は〱一七一七年^{ミルガット}弥生月九日〱ここにて殺されたり。〱キリストの血、我を地獄より救いたまえり。〱復讐を〱我が血は〱復讐を求めて〱叫ぶ。〱我、我が事を〱神に委ねまいらす。 HERR CHRISTIAN / FRIEDRICH CARL v. BOSE / ward hier getödtet den 9. Marty / Anno 1717. / Christi Blut hat mich befreit von der Höllen / Rachen / Mein Blut / Umb Rache / schreyt / GOTT befehl ich mein / Sachen.
- (188) アウグステイン^{アウグステイン} Herr Augustin. 「アウグステイン^{アウグステイン}おじ^{おじ}」 Lieber Augustin とも。現在もその白い石像が商工業組合会館(ギルドホール)正面壁龕に立っている。一四三三—三八年の飢饉の間貧民にパンを施したゴータのある富裕な博愛家の市民に関する伝説によって「ヘア・アウグステイン」「リバー・アウグステイン」と呼ばれる。ただし、市民に生活必需品を供給する市長の象徴である、との説の方が真実か。
- (189) ゴータなるフリーデンシュタイン城 Schloß Friedenstein. DSB四八五注参照。
- (190) 宮廷暖房部屋 Hofstube. 中世ドイツにあつて城・邸・家屋の暖房——壁暖炉が発明されると、それまでの部屋中央の火床^{ヒトコ}より遙かに熱効率が良くなった——可能な部屋を「シュトゥーベ」Stube——この語はDSB五六八に既に出る——という。「ホーフシュトゥーベ」はここでは宮廷勤務の人人が食事や休息を取る部屋か。そう広いとも思えない。ただし大きなホーフシュトゥーベは城の祝祭・饗宴用広間として用いられた(上フランケンのコーブルク城 Veste Coburg のそれなど)。農場^{ホーフ}に百姓屋敷の暖房可能な広い部屋——居間・食堂として使用された——も「ホーフシュトゥーベ」といい、現代ではこの名を冠したレストランもある。
- (191) 公爵フリードリヒ二世 Herzog Friedrich II. ザクセン^{ザクセン}にゴータ^{ゴータ}にアルテンブルク公爵フリードリヒ二世(在位一六九一—

- 一七三二)。
- (192) 七面鳥 ein wälscher Hahn. 「ヴェルシユハーン」Welschahn とも。どちらも直訳すれば「南国(イタリア、フランスなど)の雄鶏」。「トゥールトハーン」Truthahn (ロッコッコ鶏)、「カルクターター」Kalkuter (カルカタ——現コルカタ——鳥)、「コンジストリアールフォォーゲル」Consistorialvogel (枢機卿鳥)、オーストリアでは「インディアン」Indian (インド鳥)とも。短距離なら飛翔もするが、普通は走るか、歩く。カナダ南縁部、アメリカ合衆国、メキシコ北部に棲息。中央アメリカの先住民には家畜とされていた。十六世紀にヨーロッパに入る。
- (193) ブルクトナナ Burgtonna. グレーフェントナナとバルシユテットの間、トンナ川の河谷に位置する村。
- (194) されば我ら聖靈に冀う Nun bitten wir den heiligen Geist. ルターが最初の節を作詞した聖歌。ドイツ語の福音派讚美歌集 Evangelisches Gesangbuch 一三四番。
- (195) 巡回販売員 Colporteur. フランス語。ベヒシユタインは気取ってこんな言葉を使っているが、現代日本の仏和辞典では、なんのことはない、「商人」とにへもない訳語となっている。
- (196) 上ヴァイマル村 Oberweimar. かつてはヴァイマル市の市壁の外にあった。現在はヴァイマル市の一区域。
- (197) 「テューリンゲンの劫罰洪水」Thüringer Sündfluth. 現代では「Thüringer Sündflut」と綴る。「テューリンゲンの大洪水」の意である。ベヒシユタインの用いている綴り＝語彙もかつて一般的で、「大洪水」Sündflut を「罪Sündeの洪水」、すなわち「ジュントフルート」と故意に訛ったもの。旧訳聖書「ノアの洪水」もドイツ語では双方使われる。一六一三年五月二十九日テューリンゲンの諸地域を大暴風雨が襲い、ほんの数時間の間に多くの河川の水位が数メートル上昇、大洪水となった。この大洪水の犠牲となった死者は総数二千二百六十一人。
- (198) IVDICIVM (MDCXIII) IVDICIVM (MDCXIII). IVDICIVM = iudicium. はラテン語で「審判」の意。括弧内はローマ数字で「一六一三」となる。
- (199) 大ファルグラー村 Grob-Valguta. 現テューリンゲン州ウンシウトウルト＝ハイニヒ郡の自治体グロースファルグラー Grobvalguta。バート・ランゲンザルツァに程近い。DSB 四六八に登場した献酌侍従ルードルフ・フォン・ファルグラーの属する下級貴族ファルグラー一門発祥の地はここ。
- (200) ネーゲルシユテット村 Dorf Nägelestätt. 現テューリンゲン州ウンシウトウルト＝ハイニヒ郡の保養都市バート・ランゲンザルツァの一部ネーゲルシユテット Nägelestätt。
- (201) ユダヤ人の葬式であるかのように人人が楯と一緒に走って行く様を wie man mit ihm dahinlief, als wäre er ein zu begräbender

- Jude: 中・近世、ユダヤ人の葬儀の際にはキリスト教徒の子どもなどがユダヤ人墓場まで嘲弄しながら随いて行ったものか。識者（のう）の「高教を俟」。
- (202) 被（ま）魔師 ein Hullen- und Popelsträger. 「フ」Hulle も「ペーベル」Popel も悪戯（コト）をして止まない家の精（ホト）や騒（ガ）霊（キ）、小妖精（ツツ）などを指す方言。これら邪な精霊を呪封して袋に入れ、運んでゆく者「Träger」を「フレントレーガー」「ペーベルトレーガー」と呼ぶ地域があったわけ。従ってここでは訳語を「被魔師」とした。
- (203) 千一夜物語の最初のお話に登場する漁師 dem Fischer im ersten Märchen der tausend und einen Nacht. フランスのマルドリユス版（豊島与志雄・佐藤正彰・渡辺一夫・岡部正孝訳「完訳千一夜物語」、岩波文庫、岩波書店、一九八八年）では「第三夜」から漁師と魔神（まご）の話が始まる。漁師が網で引き揚げたのは土甕。英国のバートン版（大場正史訳『バートン版千一夜物語』、ちくま文庫、筑摩書房、二〇〇三年）でも「第三夜」から漁師と魔神（まご）の話。こちらでは瓢箪型をした銅製の壺。いずれも「湯たんぼ」Wärmflasche ではない。
- (204) 阿魏（あゐ） Teufelsdröck. アサフェティダ。北アフリカ原産の芹科の二年草。根茎から採れる樹脂状物質を香辛料や生薬（鎮痙・鎮静剤）として用いる。これは大蒜やドリアンに似た強烈な臭いがある。ただし魚がささないよう油で炒めると玉葱を炒めたような快い香りと味になる。ローマ帝国の美食家に珍重されたシルフィウムはこれ。ドイツ語と同様英語「Devil's dung」も「悪魔の糞」の意。
- (205) 細草 Baldrian. ヨーロッパ原産の女郎花科の多年草。根は甘草根、細草根（けいそうこん）といい、生薬。これは特異な臭いを放ち、この臭いは乾燥させると更に強くなる。不眠症、精神不安に効能があるとされ、中世の修道院の薬園で長く栽培された。
- 麝香 Moschus. 牡の麝香鹿の腹部にある香囊（麝香腺）の分泌物を乾燥させた生薬、香料。甘く、性的な香り。
- ティーフルト Tiefurt. イルム河畔に位置し、現在ヴァイマル市の一部。
- (206) ヴァイマル Weimar. 現テューリンゲン州の都市で、文化的遺産で知られる。州都エアフルト、イエナ、ゲラに次いで人口第四位。ザクセン選帝侯だったザクセン公フリードリヒ二世（寛容公。DSB三七一注、DSB四九二注、DSB五三五参照）は一五五二年皇帝による虜囚から解放されたが、首都ヴィッテンベルクを失ったので、晩年をヴァイマルで過ごした（一五五四年没）。一五五五年皇帝を含むテューリンゲン邦は彼の三人の子息の共同統治下か。人心不安だったに違いない。小領邦ザクセン＝ヴァイマル公国（一五七二―一七四二）、ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ公国（一七四二―一八一五）、同大公国（一八一五―一九一八）の首邑。ゲーテがカール・アウグスト公・大公（在位一七五八―一八二八）の招きを受けて永住したことは有名。
- (209) グルムバハ事件 die Grunmbachischen Handel. 神聖ローマ皇帝の永久平和令 Ewiger Landfriede が破られた最後の事例。尤

(210)

もこの事件の顛末にはなにやらいかがわしい滑稽さがないでもない。グルムバハ騎士ヴィルヘルム(一五〇三—一六七)はフランケンの古い貴族出身。騎士にして冒険家。ヴェルツブルク市周辺の莊園の多くが彼の所領だった。ヴェルツブルク領主司教メルヒオール・ツォーベル・フォン・ギーベルシュタットとかねてから金銭問題・土地問題で抗争、腹心の配下に司教を殺害させた(一五五八年。誘拐して身代金を取るつもりが失敗した、との説あり)こともある騎士は、一五六三年ヴェルツブルクを奇襲、占領、掠奪、退去した。神聖ローマ皇帝フェルディナント一世(在位一五六—一六四)は騎士に帝国追放令 Reichsacht を発したが、管轄の帝国クライス Reichskreis であるフランケン・クライス内の悶着のため、処置は次の帝国議会まで持ち越された。この間に騎士はしかるべき君侯との同盟を画策、ザクセン公にしてヴァイマルとゴータの殿たるヨーハン・フリードリヒ二世に接近、やがてその完全な信頼を得、帝国顛覆計画に引き込んだ。隠された財宝を手に入れるための「開錠根」(これを押し当てるといかなる錠でも開いてしまうという呪具。入手方法は J・K・A・ムゼーウス「宝探し」——『ドイツ人の民話』所収。鈴木満訳「メレクザーラ ドイツ人の民話」、国書刊行会。平成十九年——や DS 九に詳しい)を調達した、などと瞞している。一五六六年五月七日、フェルディナント一世に代わったその子息神聖ローマ皇帝マクシミリアン二世(在位一五六四—一七六)主催の帝国議会は満場一致で騎士とその徒党の帝国追放を議決、ヨーハン・フリードリヒの宮廷に逃げ込んでいた騎士を引き渡すよう、使者が派遣された。ヨーハン・フリードリヒは友人、親族らの勧告にも耳を傾けず、騎士を庇護し続けたので、彼自身も一五六六年十二月十二日帝国追放令を受けた。ヨーハン・フリードリヒと騎士はゴータのグリーンメンシュタイン城に立て籠もったが、ゴータの貴族、市民の支持を受けられぬまま、ザクセン選帝侯アウグスト率いる強力な皇帝軍による攻囲の結果、一五六七年四月十四日開城、騎士は徒党と共に逮捕・拷問され、四月十八日ゴータの市の立つ広場で四つ裂きの刑に処せられた。一方ヨーハン・フリードリヒは、四月十三日ドレスデンに、後ウィーンに送られ、豪雨の中を無蓋馬車で引き回され(公衆に対し罪を認めさせ、宥恕を乞わせる加虐刑 II フランス語でいう「アマンド・オノラブル」 amende honorable か)、以後二十二年オーストリアに禁錮されて死んだ。グリーンメンシュタイン城は一五六七年徹底的に破却され、跡地は一六四二年フリーデンシュタイン城(DS B 四八五注参照)がザクセン II ゴータ公の宮殿として建設されるまで牧草地として放置された。

ヨーハン・フリードリヒ平凡公 Johann Friedrich der Mittlere. 一五二九年生誕——一五九五年上オーストリアのシュタイル城で禁錮されたまま死去。ザクセン公(在位一五五四—一六六)ヨーハン・フリードリヒ二世。穏やかな性格のお人好しだったようだ。添え名は「ほどほど公」「好い加減公」とでも訳し得るか。ザクセン選帝侯(後に選帝侯位は皇帝に剝奪される)・ザクセン公ヨーハン・フリードリヒ一世の子息。皇帝マクシミリアン二世に逮捕された後、弟ヨーハン・ヴィルヘルムがザクセン公となったが、一五七二年同皇帝の裁定により、所領はヨーハン・フリードリヒの二人の子息とヨーハン・ヴィルヘルムの間で分割された。子息

- (211) たちはザクセン＝コーブルク公、ザクセン＝アイゼナハ公となる。
 かのアルバ *der Alba* アルバ公。DSB五二六注参照。公爵の率いる旧教徒＝カトリック・イスパニア軍は新教徒＝プロテスタント派諸地方で殺人・強姦・放火・劫略を事とした。
- (212) 公の若殿ヨーハン・エルンストの許に *zu dem jungen Herzogssohn Johann Ernst*。この若殿は後のザクセン＝ヴァイマル公ヨハン・エルンスト二世（在位一六六二—一八三三）。ヴァイルヘルム四世の子息。
- (213) ザクセン＝ヴァイマル公ヴィルヘルム *Wilhelm*, Herzog zu Sachsen-Weimar. ザクセン＝ヴァイマル公ヴィルヘルム四世（一五九八年—一八二二）。ザクセン＝ヴァイマル公ヨハン三世の子息。新教徒。
- (214) ザクセン＝ヴァイマル公ベルンハルト *Bernhard*, Herzog zu Sachsen-Weimar. ザクセン＝ヴァイマル公ヨハン三世の末子ベルンハルト（一六〇四—一三九）。公爵ではない。新教徒。戦巧者で知られた備兵隊長。DSB二八注参照
- (215) スウエーデン王グスタヴ・アドルフと *mit dem Schwedenkönige Gustav Adolph*. スウエーデン王グスタヴ（ドイツ語読みではグスタフ）二世アドルフ（一五九四—一六三二）は三十年戦争の際新教徒派の大立て者だった。ライプツィヒ南西リュッツェン近郊での戦い（アルブレヒト・フォン・ヴァレンシュタイン率いる神聖ローマ皇帝軍との戦い）で戦死。戦いは指揮を引き継いだベルンハルト・フォン・ザクセン＝ヴァイマルのお蔭で新教徒側が勝利を収めた。王の死後、スウエーデン軍は幾つもの兵団に分かれ、ドイツ各地に転戦、掠奪を働いた。DSB二八注参照。
- (216) イエナ *Jena*. 現テューリンゲン州の都市（人口約十萬。州都エアフルトに次いで二番目）。ザール河谷に開けた。ヴァイマルの東二十キロ。一七四一年以降ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ公国（首都はヴァイマル。一八四〇年でもイエナの人口は同公国内でアイゼナハに次ぎ三番目で、アイゼナハ同様人口は一万に達しなかった）、一八一五年以降同大公国、一九〇三年以降ザクセン大公国に属す。古い大学町でもある。大学はザクセン選帝侯・ザクセン公ヨハン・フリードリヒ二世（寛容公）が一五四七年計画を立て、一五五八年彼の三人の子息が創立を実現した。
- (217) 内最も有名な韻文 *der bekannteste dieser Verse*. イエナ大学の学生ならだれでも暗誦していなければならなかったラテン語の押韻句。
- (218) 祭壇、頭、龍、御山、橋、狐塔、うあいけるノ家、コレゾいえなノ七奇蹟ナリ。*Ara, caput, draco, mons, pons, vulpecula turris, / Weigeliana domus, septem miracula Jenae*. 原文ラテン語は上記の通り。宗教的奇蹟ではなく、つまりは日本でいう「七不思議」である。
- (219) 祭壇 *der Altar*. アラAra。市教会聖ミヒヤエルの祭壇。現存。

- (220) 頭 der Kopf. カプト Caput。市庁舎の時計上部に「ばつくりどん」 Schnapphans (「イエネのハンス」 Hans von Jeneとも) と呼ばれる頭が付いていて、時計が正時を打つたびに、向かって左側に立っている巡礼の杖の先に付いた金の玉をばつくりやろうとすると、世界は滅びる、とか。また、この玉はテューリンゲン名物の団子シュトイなのだ、とも。頭の表情で分かるのだが、ベヒシュタインの言うような「欠伸」ではない。現存。
- (221) 龍 der Drache. ドラゴ Draco。頭が七つ、脚が四本、腕が二本、尻尾が四本の龍の立像。十七世紀初めおそらくイエナの大学生たちによって戯れに造られた。材料は動物の骨、針金、混凝紙コンキヤウシ(張り子の材料)。現在はその模造が市立博物館に展示されている。
- (222) 御山 der Berg. モンス Mons。イエナの最も特徴的な山イエンツヒ Jenzig (標高三八五メートル)。その木の生えていない部分、いわゆる「鼻」は石灰岩なので、朝日、夕日に赤く輝く。もちろん現存。
- (223) 橋 die Brücke. ポンス Pons。カムスドルフ橋 Camsdorfer Brücke。石造のアーチ橋。一四八〇年以降九つの橋脚があった。現在は架け替えられたが、同じ場所にある。建設当時ドイツ最大の橋の一つで、橋上には礼拝堂があった。
- (224) 狐塔 der Fuchsturm. ウ(ウ) ルベクラ・トゥリス Vulpecula turris。かつてハウスベルク山上にあったキルヒベルク城の主塔。現存。
- (225) ヴアイゲルの家 das Weigelische Haus. ヴエイゲリアナ・ドムス Weigeliana domus。昇降機を備え、屋根に天文観測所が設置された十七世紀の家屋。他にも発明・工夫が凝らされていた。数学者、天文学者、哲学者にして教育者だったエアハルト・ヴァイゲル Erhard Weigel (一六二五—九九) の家。市教会の傍にあったが一八九八年取り壊された。
- (226) キルヒベルク伯爵家の der Grafen von Kirchberg. キルヒベルク伯爵家はシュヴァーベンの一門である。従ってこれはキルヒベルク城伯爵家のことであろう。同家はテューリンゲン貴族の家系。元来は中部テューリンゲンのカペッレンドルフの下級貴族ニヒスチアール。一一四九年ドイツ王コンラート三世により帝国下級貴族に昇格され、イエナ近郊キルヒベルク城伯領を封土とされた。
- (227) 大辺境伯と添え名されたヴェッティン伯コンラート Graf Konrad von Wettin, zubenannt der Große. ヴェッティン伯、マイゼン辺境伯(在位一一二五—五七)、ラウジッツ辺境伯(在位一一三六—五七)。死去の僅か前に修道士となる。東方へのドイツ人入植と東方のキリスト教化に努めたので敬虔伯とも添え名された。
- (228) グロイツチュ伯ヴィブレヒト Graf Wiprecht von Groitzsch. グロイツチュ伯ヴィブレヒト二世。オストマルク、ニドラウジッツ辺境伯及びマイゼン辺境伯(在位一一三三—二四)。マイゼン辺境伯ハインリヒ二世が二十歳で亡くなると、神聖ローマ皇帝ハインリヒ五世からニドラウジッツ辺境伯及びマイゼン辺境伯に任命されたが、ザクセン公ロタールやザクセン貴族の抵抗に遭い、敗退

(229)

した。ロタールはマイセン辺境伯領をヴェットェイン伯コンラートに委ねた。

若き辺境伯ハインリヒ *der junge Markgraf Heinrich*。ヴェットェイン家のアイレンブルク伯、マイセン辺境伯ハインリヒ二世（在位一〇三二—一〇三三）。同名の父と区別するため小ハインリヒ *Heinrich der Jüngere* とも呼ばれる。父ハインリヒ一世（アイレンブルク伯、オストマルク辺境伯、ラウジッツ辺境伯、マイセン辺境伯）が一〇三年に亡くなった時、母ゲルトルート・フォン・ブラウンシュヴァイク（マイセン辺境伯エクベルト一世の息女。ハインリヒ一世とは三度目の結婚。一〇六〇頃—一一一七）はただ彼を出産していなかった。母は胎児の彼のため辺境伯位を要求したのである。このため政敵たちは母が生んだのは女兒で、料理番の俸と掬り換えたのだ、と噂を流した。母の後見の下、小ハインリヒはマイセン辺境伯領、オストマルク、下ラウジッツの支配権を獲得した。しかし、父ハインリヒ一世の従弟ヴェットェイン伯コンラートは、てっきり嗣子の無い従兄の所領を相続できるとの期待を裏切られたため、例の中傷を恣にし続けた。ためにハインリヒ二世は私闘を起し、一一二一年コンラートを捕虜とした。しかしハインリヒ二世は一一二三年九月ないし十月に——結婚してはいたが子のないまま——死去した。毒殺された疑いがある。コンラートはお蔭で釈放され、かつ念願のマイセン辺境伯をもやがて我が物にできたのである。

(230)

学校 *Schule*。中世およびルネッサンス期のドイツにおける二つの基本的学校形態は初等学校 *Elementarschule* とラテン語学校 *Latenschule*（リュッフェウム *Lyceum* とも）だった。初等学校は主として読み書きなどの基礎知識を教えるに留まった。地方により、ヴィンケルシュール *Winkelschule*、ヘックシュール *Heckschule*、クリップシュール *Klippschule*——いずれも蔑称であろう——とも呼ばれた。官庁に承認されおらず、私人——女性が携わることが多かったようだ——の経営。師匠に特別な資格は要求されず、月謝納入は義務で、現金払いか物納だった。ラテン語学校は聖職者になるための、ないし大学で更に研鑽するための準備機関で、古典語（ギリシア語・ラテン語）、特にラテン語教育を行った。これはやがて大学進学を建前とする古典語中高等学校（九年制中高等学校 *Gymnasium* に発展する。ベヒシュタインはここではただ *Schule* としているが、次に *Latenschule* と明記している。なお、右の他に修道院や各種商工業組合、あるいは市町村自治体が教師・教場を提供する場合もあった。ドイツ語圏においては十八世紀末まで、村の学校の場合、新教（プロテスタント・旧教）カトリック両教会いずれにあっても、教会の聖物保管係 *Küster*、*Mehner* が教場の師匠 *Schulmeister*、*Schuldienere* を副業として務めたりした。教会のオルガン演奏者や合唱隊指揮者 *Kantor* がこれに当たったこともある。

(231)

羽根洋筆 *Pennale*。「ペネラー」*Pennaler* とも。大学新入生（大学第一学期の学生）ないしラテン語学校生徒に対して大学在學生が用いる蔑称。ドイツの大学（特に十六—十七世紀）における上級生による新入生苛めを「ペナリスムス」*Pennalismus* とし、ラテン語学校出たての生真面目で気が利かない少年は「驃馬」*milus*（ラテン語）とも。驃馬は頑固で片意地な駄獣とされる。

- (232) 狐^{Fuchs}. 単数形 Fuchs。ラテン語で「ヴ(ウ)ルベス」vulpes とも。ゲーテ『ファウスト』によれば新入生は「蛙」Frosch と呼ばれている——ただし、これはライプツィヒ大学でのこと。同書によれば大学第二学期の学生は「ブランダー」Brander (炭焼きの用語で「まだ炭にならない半焼けの木」の意か)。
- (233) ツヴィカウ Zwickau. 現ザクセン州第四位の都市。
- (234) 子^こ孵^{かえ}し^し錢^{せん} Bräupfening. 「ハック(ハッケ)グロッシュェン」Hecke(groschen)とも。瀆神の方法で悪魔から入手する。無事に得られれば、この錢は毎晩同じ種類の錢を生んでくれる。DS八六注参照。
- (235) ファウスト博士の呪文書 Doctor Faust's Hollenzwang. ヨーハン・ファウストによって書かれた、とされる、儀式や呪文によって地獄の魔物を召喚し、魔術師の願望を成就するための手引き書。一五〇一年ローマで出版された下記のものなど。Dr. Faust's *riefacher Hollenzwang: Ein Geisterzwang und Zwang der Vier Elemente mit der sogenannten Tabella Rabellina*.
- (236) ハレ Halle. 現ザクセン＝アンハルト州の大都市ハレ・アン・デア・ザール Halle an der Saale。一七一四年まではプロイセンのマクデブルク公国の首邑。この物語の一七一六年にはプロイセン王国領。一八一七年以前の大学はブランデンブルク選帝侯フリードリヒ三世により一六九四年創立されたもの——一七一六年にはまだ歴史の浅い大学だったわけ。一八一七年ヴィッテンベルク大学であるロイコレア Leucorea (一五〇二年創立) とハレ大学が統合されてマルティン・ルター大学ハレ＝ヴィッテンベルクとなった。ウィーン会議の結果、一八一五年、ヴィッテンベルクを含むザクセン王国の北半がプロイセン王国に割譲されたからである。聖なる受難週 die heilige Charwoche. 現代では普通 Karwoche と綴る。復活祭前の一週間(枝(棕櫚)の主日)＝「棕櫚の日曜日」から復活祭前日まで)。カトリック教会では「聖週間」。
- (237) 神学部^{カトリック}の学生たち Gottesstudenten. 訳は訳者の類推である。識者のご教示を俟つ。
- (239) 居酒屋の亭主と給仕役のその二人の娘も引張り込んだ zogen …… auch den Wirth und den dessen zwei aufwartende Töchter. 案ずるに、聖母マリア、マグダラのマリア、イエスの遺骸を引き取って葬った、といわれるアリマタヤのヨセフの役を振ったのか。
- (240) 復活祭仔羊 Osterlamm. ユダヤ人が過越(の祝い)に食べる仔羊、あるいはドイツで復活祭を祝って作る仔羊の形をしたケーキ。ただし、ここではイエス・キリストの象徴としての「アグヌス・デイ」Agnus Dei＝「神羔(神の仔羊)で、復活したイエスを示す。従って、丸燻きの仔羊をこう名付けたばかりではなく、その上でこれを喰らったのはキリスト教徒として瀆神も極まれりである。
- (241) 晚餐^{ばんさん} das Nachmah. イエスと使徒たちの「最後の晚餐」をおちゃらかし、福音書にあるようなことをあさましくなぞったのである。直接の参加者は十三人で、他に傍観者がいたわけ。

(242) 大根の薄切り Rettigscheiben. ベヒシユタインは上記のごとく綴っているが、現在では普通 Rettigscheiben。【白麦酒大根】
 weißer Bier-retich——かなり細いが日本の青首大根と形状・色は同様——をそのまま薄く輪切りにしたもの。なるほど、聖餅に似
 ている。それに擬したのも言語道断の冒瀆である。ただし、生大根の薄い輪切りそのものには何の罪もない。塩を少々振り掛けた
 だけでビールをつまみに好適。なお、一本丸ごと、螺旋状に切って供する場合もある。

(243) 神聖な聖体制定の言葉 die heiligen Einsetzungsworte. ミサを執り行う時、司式者がこれを唱えることにより、未聖別の聖餅が
 聖別される。「取りて食へ、これは我が体なり」(新約聖書マタイ伝二十六章二十六節) から。

結びに一言

DSB五五七のラテン語二行詩については、親愛なる元同僚西村淳子教授のご配偶である青山学院大学文学部西
 村哲一教授にご教示を懇請した。訳者は locus、なる形にとまどった他、hic を遠く monti に繋げてしまい「
 こなる山を」と誤訳していたのだが、お蔭でいずれも納得および訂正できた。両西村先生、いつもながらまことに
 ありがとうございます。

訂正

試訳(その四)

二四六ページ 二行目 家小人 ↓ 家のちびさん

試訳(その六)

二七九ページ 五行目 家小人 ↓ 家のちびさん

試訳(その七)

一五五ページ 六行目 三二六 魔術の目眩くらまし Zauberverblendung.
試訳 (その十)
一二七ページ 三行目 ヴアルグラー ↓ ファルグラー

* DS254. Feshängen.

